

併し、赤井の心には、別の考へがあつて、不服の申立てを、爲なかつたのである。假りに、不服を申立てるにしても、どうせ長くかゝるに、極まつて居るから、そんな事をして、日を送るよりか、いつそのこと、脱獄して、再擧を謀らうと、かう覺悟を、定めて居たのだ。

北田正董の伴が、最近に、芝浦瓦斯タンク事件の正平であるが、今日代議士になつて居る。

一一一

その頃の未決監は、鍛冶橋内に在つて、警視廳と、脊中合せであつた。既決囚は、一人も置かず、未決の被告人士けであつたが、それでも、可なり繁昌で、大概は、満員の盛況であつた。

どこの國の、建築を學んだのか、よく知らないが、未決監の構造は、十字形になつて居て、その中央に、看守の見張所が設けられ、東西南北に、長い廊下があり、廊下をはさんで、室が設けられてあつた。

一室は、すべて四疊半につくられ、四疊は在監者が、起臥する所で、半疊だけは、セメントで堅めた、流し元になつて居た。醬油樽を、少しちいさくした位の桶が、その上に載せられてあつた。これは、大小便をするためで、朝夕に取り換てくれる。

顔を洗つたり、飲料にする水を、入れた桶が、それと一つ所に置かれてあるのだから、餘り氣持のよいものでなかつた。

階上、階下、すべての室が、八十の多きに及んで、空室は一つもない、といふ繁昌。ホテルが、この調子で、一年つゞいたら、儲かるであらう、と思ふが、監獄の繁昌は、何時の世も、格別なものである。

赤井は、階下の廿五號室に入られて、他のものと、一つにされなかつたから、全くの獨房生活であつた。宣告をうけて、一週間は、不服を申立てる爲めに、猶ほ未決の取扱ひに、なつて居る。併し、その儘に服罪すれば

その期間は、刑期に算入される事になつて居た。

七日目の朝、七時の交代がすむと、看守の役人が、やつて来て、

『オイ、赤井ッ』

『ハイ』

『今朝は送りになるから、準備し置け』

『ハイ』

『忘れ物のないやうに、すつかり始末して置くのぞ、いゝか』

『ハイ』

戸前口の上に掲げてある、名札を、持つてゆく。看守でも、押丁でも、その時分には實に亂暴な口を利いたのであつた。

罪名は、國事犯であつても、取扱ひは、常事犯に對するのと、大した變りはなく、應對の詞などは、ずるぶん下劣であつたが、併し、ぐつと、上級の役人になると、幾分の敬意を持つて、取扱ひも丁寧であつた。

間もなく、看守長が来て、監房から出された。常事犯には、看守と押丁だけであるが、國事犯には、看守長が、やつて来る。左様いふ點に、取扱ひの區別はあつた。

中央の見張所で、一と通りの調べをうける。此處では、單に本人に相違ないか、どうかといふことを、確める丈けの事で、これから、洗場と稱する所へ、連れて來られて、五月蠅と思ふほど、種々の事を訊べ、さらに典獄が出てきて、訓示のやうなことを申渡すのであるが、つまり、既決監へ、送るから、謹慎して、刑期の來るのを待て、といふ位の事である。

入監した時の衣服や、その他の物を一括して、表門の内側へ來ると、箱馬車が、きて居て、それへ乗せられる時は

常事犯のものも一しよで、六人乗の馬車へ、八人位は、詰め込む。そのうちの一人は、看守が、サアベルを抱へて、合乗をするのであつた。

鍛冶橋を渡り、京橋の、賑やかな町を過ぎて、靈岸島の通りに出て、渡場へ着くと、馬車から出されて、船へ載せられる。

この船は、監獄へ通ふだけに設けられてあるのだが、一般の人も、載せらるやうになつて居る。囚人の多い時は、一と船待たせられる事になつて居るのだ。

大川の流れを横切り、向ふ岸へ着くと、それから、地獄の一丁目といふて、二丁目のない石川島の監獄である。

今では、監獄も、種々に改革されて、在監者の取扱ひも、頗る寛大になり、その室内には、電燈も點いてあるし水道も、引いてある位で、四分六の麥飯は、昔の通りでも、一切の状況が變つて、少し窮屈な、別荘と思へば、左迄に苦痛でも、ないやうであるが、昔の事を思へば、恰で夢のやうだ。

昔は、未だ罪人と決まらぬ、被告人でさへ、動もすれば、身體の利かなくなるほど、殴りつけられて、病監へ送られる事があり、既決囚の如きは、殆ど動物の扱ひであつた。

今でも、行つて居るさうだが、減食處分と、いふのがあつて、一食分を、三度に與へられ、茶や漬物の代りに、鹽が、一とつまみで、これを三日とか、五日とか、事件の輕重に依つて、執行されるのだから堪まらない。

如何に胃袋の、小さい奴でも、一日に、一合三勺の麥飯では、ずるぶん辛い事だ。其處に、暗殺處分と、いふものあつて、眞ッ暗な部屋へ、ぶち込まれて、一食分を、一日に食はされる事がある。

監獄署といふ名が、いつか刑務署と變つて、非常にハイカラにはなつたが、食物で虐めるやうな事を、相變らず、行つて居るやうでは、刑務所の看板も、餘り有難くない。

さればとて、法外な優待をしたら、競争して、行くものが増えるだらうから、取扱ひの改良にも、餘程考へを、要する譯である。

石川島の獄監署は、苦役に服せざるものと、政治に關係の犯罪者を、主として入れるやうになつて居た。

中央の正面が、玄關で、左右に羽翼を延ばしたやうに、監房が設けられてあり、東西ともに、廊下を差抜んで、五室づゝ、向ひ合つて居る。正面の玄關は、看守押丁の見張所に當て、左右の廊下を、見透し得るやうに、造られてあるから、椅子に倚つた儘、監視する事が、出来るのであつた。

便所と、洗面所は、左右に設けられ、廊下から、通ふやうになつて居て、設備の悪い、田舎の宿屋よりか、遙に上等であつた。

西の方の參號室に、古くから這入つて居たのが、石川縣士族の松田克之。明治十一年の五月十四日紀尾井坂下で、大久保内務卿を暗殺して、死刑に處せられた、島田一郎の連類である。

若し、島田が失敗したら、第二番手として、實行に當る可く、數名の壯士が、控て居たのであるが、松田は、其うちの一りで、終身禁獄の刑に處せられて、それ以來、此室に入れられて居たのである。

松田の居る所へ、遅れて、這入つて來たのが、熊本縣の士族、井上敬次郎と、いふものであつた。

井上の名は、東京市民の記憶に、なほ新であらう。市の電氣局長を勤つてゐたが、今では鬼怒川水力會社に、重役をして居るから、大分お馴染もあらう、と思ふ。

林正明の發行して居た、近事評論の署名人で、あつたために、禁獄一年の刑をうけて、這入つて來たのである。

其頃には、讒謗律といふ規則があつて、政府の大官を、非難攻撃すれば、すぐ處罰されて、入獄の身となるから、發行者または編輯人には、それ／＼人を選んで、監獄行きを引受けるものを、署名人として置いた。井上は、要するに監獄行きを引受けてゐる、署名人であつた。

學資の不足で、苦學を爲るものは、井上と同じやうに、新聞雜誌の署名人を、やつて居た。社へは勤めず、氏名の

み、出して置けば、下宿料と、學校の費用位にはなる。監獄へ行くと、月給に改まつて、五十錢位にはなるから、一月十五圓、下宿料の二圓五十錢時代に、これ丈の金があれば、出獄後の學費には充分であつた。

一四

赤井は、繁雜な、手續きを繰返されて、やうやく禁獄監へ、送り込まれた。

「其方の氏名は、何と申すか」

「赤井景韶といひます」

「族籍は……」

「士族」

「原籍と住所は……」

「新潟縣中頸城郡高田木築町であります」

「罪名は……」

「謀殺未遂犯」

「刑期は、いくらだ」

「重禁獄九年で、あります」

「ふゝむ。人殺しの遣り損ないか」

「ハイ」

「どういふ事件だ」

流石に、赤井も、むつとしたのは、自分の事件を知らないとは、呆れた看守だ、と思つたからで、殊に、その口調

は下劣で、昔の獄卒を、そのままの調べやうであるから、疝癢に觸つたのである。

「大臣暗殺の事件です」

「何ッ、大臣暗殺だと」

「ハイ」

「大きい事をやつたな。どなたを暗殺しようとしたのか」

「伊藤、井上、松方の三人でした」

「それぢやア、國事犯だな」

と、いひながら、綴ぢ込である、書類を讀んで居たが、

「うむ、こゝに書いてある」

それから、暫く讀んで、居て、何か頻に首肯した後、

「宜しい」

何が宜しいのか、赤井には、少しも解らなかつた。

「お前の、はいる室には、同じやうな犯罪のものが居るから、くはしいことは、聞いて置くがよい」

「ハイ」

「九年といへば、可なり永い年月であるが、謹慎の狀が現はれて、表章が、四個貰へると、假出獄になるのだが、謹

慎して、はやく放免されることを、心掛けなくては不可、宜しいか、解つたか」

「ハイ」

「さア、此方へ來い」

看守が、先に立つてゆく、その跡から尾いて、第三號室の前まで來た。

禁獄監の戸前は、晝夜締がなく、自由に開閉の、出来るやうになつて居たが、赤井の脱獄から、夜だけ錠を下ろす事になつて、すべて取締は、嚴重になつた。

看守は、室の戸を開いて、

「オイ、松田ッ、新入があるよ」

「御苦勞様です」

背後を振り返つて、

「さア、はいつた」

赤井は、夜具と、枕を持つて、すつとはいつたが、隅の方へそれを置いた儘、膝に手を置いて、軽く會釋した。

看守が、行つてしまふと、松田は、

「我輩は、松田克之といふものだが、君の氏名と犯罪は……」

「新潟縣士族、赤井景詔と申すものです。罪名は、暗殺未遂犯で、刑期は、九年であります」

「それは、却々の重罪ですな」

「萬事、不馴れのものでありますから、宜しくお願ひいたします」

松田の前に、若い書生風の男が居て、じつと、赤井を、見詰めて居たが、

「僕は、熊本縣の井上敬次郎ですが、讒謗律に依つて、一年、やられて來たのです」

「やア、赤井です」

折柄、ギーツと、音がして戸前が開いた。左右を見廻しながら、しづかに、はいつて來たものがある。それが、河

野廣中であつた。福島事件の六人は、向ふ側の四號室に、共同生活の態で、一しよに這入つて居たのだ。赤井の事件は、鍛冶橋の

未決監に居る時から、既に知つていたので、遠からず、跡から、來るものと、堅く信じて居たのである。

それであるから、石川島へ來てからも、赤井が來ることは、心待ちに、待つて居た所へ、三號室へ、新入がある様子で、どうも、その新入が、赤井らしく感じたから、河野が、便所へゆく振をして、看守の際を盗み、そつと三號室

へ、はいつて來たのである。

「やア、河野先生」

「矢張り、君であつたね」

と、いひながら、河野は、松田と井上に、ちよいと會釋して、座に着いた。

「松田君、この仁は、赤井といつて、我輩の親友であるから、何分宜しくお願ひいたします」

「はア、左様ですか」

「井上君も、どうか、親しくして下さい」

「何分宜しく……」

一應の紹介がすむと、河野は、赤井へ向つて、

「君の來ることは、早くから判つて居つたので、實は待つて居つたのだ」

「左様でしたか」

「待つた居た、といふても、監獄の裡だから、どうといふこともないが、かういふ身になると、一人でも、味方の多い方が、心強くなるからね」

「そりや、左様でせう。併し、諸君は、達者ですか」

「皆な、無事で居る」

「いづれ、逢へるでせうが、どうか、宜しくいふて置いて下さい」

「そのうちに、ゆつくり話す事にしやう」
河野は、こつそり、自分の室へ戻つた。

跡には、松田が、赤井を相手にして、しきりに話込むのであつた。

「君の事件は、全體、どういふのでした」

「甚だ詰らない事だ、とても話には、ならないのです」

「併し、どういふ筋ですか」

「伊藤と松方、それから井上、この四人を、殺ツつけやうとして、失敗したのです」

「痛快だね」

「失敗したのだから、痛快でもなからう」

「イヤ、失敗しても宜しい。左様いふ事を、考へるものであるのは、つまりをいへば、政府の失態に、なるのだからいくら失敗しても、跡からくと、君のやうな人が、代るく出て来るうちには、人民の方でも、氣が付いて、政府を信用しなくなるから、頗る結構だ」

「僕の失敗したのに比べると、君の方は、大成功でしたな」

松田の鼻は、急に高くなつて、

「大成功と、いふほどではないが、まア、内務卿を斃したのだから、目的だけは、達した譯ぢヤ、ハッハ、、、」

赤井は、井上の方へ向いて、

「君は、讒謗律でやられた、といふのですな」

「左様です」

「新聞はどれですか」

「近事評論です」

「はア、林正明先生の……」

「御承知ですか」

「よく讀んだものです」

話は、それからそれへ、と移つてゆくが、すべて、天下國家の事ばかりであつた。

初対面で、よくは判らないが、赤井の頭脳には、何となく、井上の態度に落付きがあつて、松田に比べると、遙に優つて居るやうに、思はれた。

年は、やうやく廿歳を出たばかりで、自分よりは、幾つか若いやうにも思はれるが、話の内容もゆたかで、何となく、床しいやうな氣がして、井上と、話をかはすことが、多かつた。

一五

禁獄監に居るものは、すべて服役の義務がなく、室内にあつて、謹慎さへして居れば、可いのであるが、書物にもやかましい制限があつて、自分の欲するものは、多く讀めないものであるから、大概は、同室の者と談話をして、日を送る外はなかつた。

長い月日になると、それも厭いて来る。同じ事を、くり返すやうにもなり、無味に、一日を過ごす事が重なるので自分から進んで、服役の願ひを、出すやうになる。

赤井は、左様した、事情からばかりでなく、胸に一物あつて、服役願ひを出したが、容易に、許可を得る事が出来ず、いろ／＼苦心して、受持の役人に、氣受けのよくなるやうに、努めた。

監獄の方でも、政治犯の人に對しては、充分に注意を拂つて、第一には、行狀の良い者、第二には、氣性の荒くな

い者、第三には、他囚を煽動する恐れのない者、この三條件に、叶うたものでないと、服役は、許さぬ事にして、あつたのである。

入獄後、あまり間のないものは、その人格を、知り得ないから、どうしても、相當の日が、経つた後でなければ、容易に、服役を許さないのが、今までの習慣と、なつて居た。

典獄は、受持の看守から、本人の行状を、申告するのを待つて、よく考慮した末に、その許否を決するのであつて願つて出たら、誰にでも許す、といふ譯のものではなかつた。従つて、赤井の願ひも、再三斥けたけれど、そのうちに、看守の方から出す、行状についての申告が、頗る良くなつて來たので、服役を、許す事になつた。

「赤井ッ」

「ハイ」

「さア、出て來い」

まるで、犬を呼び出すやうにする。それを氣にして、忌やな顔付をするものは、すぐ不良の者として、取扱はれるのだ。取扱ひの酷いほど、下から出て、頭をさげるものは、看守の氣受けが、よくなるのであるから、赤井は、その覺悟で、こみ上げて來る、疝癪を抑へつけて、叩頭の安賣を、やつて居たので、頗る看守の見込みは、良くなつて來た。

見張所へ、つれてこられると、

「汝は、服役が、許可される事になつた。この上ともに謹慎して、よく勉強しなければ、いかんぜ」

「どうか、何分よろしく、お願ひ申します」

頭を低く下げて、両手は、板敷の上に、ついて居る。

「どういふ、工作へ廻されるか、本職にも解らないが、どこの工作にもしろ、受持ちの看守には可愛がられ、はやく

彰表の一つでも、貰ふやうにせなければ、汝への損になるぞ」

「御注意は、有難う存じます」

「今、押丁が來たら、連れてゆかせるから、少し待つて居れ」

それから、暫時の間は、看守を對手に、話をして居る。その間も、赤井は、看守の氣に、入りさうな事ばかりいふので、看守は、頗る満足の様子であつた。

やがて押丁が、やつて來て、服役掛の所へ、連れてゆく。もう四五人のものが、同じ赤い仕着を被て、控へて居た。

「赤井といふのは、汝か」

「ハイ」

「汝は、工作に希望があるのか」

「別に、これといふ希望は、ありません」

「遊山にでも、行くつもりか」

皮肉な事をいふのは、その憤みを試みやう、と、するのである。

「徒食して居りましては、何となく氣が咎めますので……」

「感心なことだ。汝は、風呂番だ」

「ハイ」

赤井は、湯屋の三助に、されたのである。

未決監に居るものは、一六の日に、入浴させられるのであるが、既決囚は、苦役に服して居るから、一日隔に、入浴する事に、なつて居た。

尤も、土工や米搗は、毎日の入浴であるが、坐業をして居るもので、餘り體の汚れぬものは、一日隔であつた。

赤井は、浴場へ、連れて来られた。どこの工作にも、傳告者といふのがあつて、囚人の役付きとし、看守や押丁に代つて、仕事の監督を、爲るのであるが、自分は、何一つ仕事も爲すに、朝から夕暮の引上げ迄、同囚の作業を、見廻つて歩くのが、その役目であつた。

浴場にも、この傳告者なるものが居て、一切の指圖をして居る。浴槽へ、水の汲込みから、焚木の事まで、やかましくいつて、同囚を叱咤する状態は、本場の役人と異ならず、恰で二重監督を、うけて居るやうなものだ。

「オイ、傳告者ッ」

「ハイ」

「今日から、二十三番が服業するから、よく教へてやれ」

「ハイ」

看守は、赤井を殘して、自分の控室へ去つた。二十三番とは、赤井の襟字にある通り、氏名に代へる、呼名である。

「二十三番は、何といふ名だね」

「赤井と、いふものです」

「えッ、赤井だツて……」

「はア」

「左様か、お前が、赤井か」

傳告者は、少し驚いた、といふ態度で、ずつと、赤井を睨めた。

「我輩を、知つて居るのですか」

「お前には、初めて逢つたのだが、姓名は、知つて居るよ」

「どうして、知つて居るのですか」

「國事犯だつて、いふぢやないか」

「左様です」

「大臣を暗殺しやう、として、やり損なつたんだつて、そんな事を聞いたが、本當かい」

「左様です」

「左様ですつて、すまして居らア、いゝ度胸だね」

どういふ理由で賞められたのか、赤井には、それが解らなかつた。

「さア、此方へおいで……」

赤井は、傳告者に連れられて、大きい堀井戸の、前まで来た。

「世間では、風呂番位と、いふけれど、自分が、やつて見ると、それでも、ナカ／＼むづかしいものだ。國事犯は名人でも、風呂番は素人だらうから、まア、水汲から始めて貰はう」

「どうか、宜しく御指圖を願ひます」

「さア、よく見て居なさい。かういふ風に、やるのだから、覚えてくれ」

井戸側の上へ、厚い板が、一枚渡してある。ほんの足を載せるだけの幅で、その上に、兩股を廣げて立ちながら、釣瓶繩を手繰つては、大きな溜桶へ、調子を取つて、水を汲み込むのである。

何でもない、樂な仕事のやうで、これは、ナカ／＼むづかしい。腰で、調子を取つて、引上げる釣瓶を、向ふの桶へ、軽く當て、は、ざあツと、水を入れる。空になつた釣瓶は、すぐに井戸の中へ戻して、同じ事を、繰返すのであるが、腰の調子一つで、釣瓶が、軽くもなれば、重くもなる。

全身の力を、兩腕に入れて、何の呼吸もなく、矢鱈に汲上げたら、おきに疲れるばかりでなく、どうかすると、釣

込まれて落ちる事も、あるのだから、よく考へて見れば、むづかしい仕事である。

三四日、やつて居るうちに、すツかり、疲れが来た。自分の室へ、歸つて來ても、兩足が、思ふやうに曲らず、兩手の屈伸にも、苦しむやうになつた。

一六

其苦しみも、十日餘りであつた。一ヶ月も經つと、平氣で、やれるやうになつて、赤井は、毎日の水汲に、少しの不平もいはず、實に能く勤めて居た。

全體、禁獄監の囚人から、服役を、願つて出ても、荒い仕事は、爲せぬ事に、典獄から、その掛のものへは、内達があつたのだから、赤井に限つて、かうした仕事をさせたのは、全く改愼して居るか、どうかを試むるつもりから、殊更に、やらせて見たのであつた。

赤井の心には、別に深い企みがあるので、この荒仕事を、平氣で勤め、少しの不平もいはずに、看守や傳告者には可成く頭を安く下げて、その信用を得る事に、一生懸命であつた。

今、傳告者は、看守の前へ呼ばれて、何事か、訊かれて居る。

「旦那ッ」

在監者は、すべて看守や押丁の事を、旦那と、呼んで居る。呼ばれる方は、旦那といはれることに依つて、實に、大得意になるのだから、考へて見れば、莫迦らしい事でもある。

「何かな」

「只今も、申上げました通り、邦の國事犯は、今迄の連中と違つて、本當に溫和しい人で、私も、感心して居るのです」

「左様か。そんなに、溫和しいか」

「ハイ」

「水汲みの方は、少しはやれるやうに、なつたか」

「もう、本職に、なつちまひました」

「ふふーむ」

「私の考へでは、釜前へ使つてやらう、と思ふのですが、旦那の御考へは、いかゞで御座いますか」

「左様だな……」

看守は、少し考へて居たが、

「いッそのこと、焚木集めに使つたら、どうぢや」

「それでも、結構で御座います」

「釜前は、居るのぢやらう」

「ハイ、今迄の奴を、その儘にして置けば、よろしいのです」

「それならば、赤井を、それに廻してやれ」

「よろしう御座います」

「とに角、本人を、此處へ連れて來い」

「ハイ」

午前の、水汲をすませて、赤井は、一と息入れて居る所へ、傳告者が、やつて來た。

「オイ、二十三番」

「ハイ」

「お前の出世だ。はやく已れと、一しよに來なさい」

『はア、出世ですか』

『うむ』

赤井には、ちよつと解らなかつた。

『お前が、樂な方へ、廻られるのだよ』

『はア左様ですか』

『まア何でもいゝから、一しよに來い』

『ハイ』

看守の前へ、連れて來られると、赤井は、大地へ蹲踞んで、土に手をついた。

『二十三番』

『ハイ』

『明日から、焚木集めに廻す。よく謹慎して、働かなければ不可んぞ』

『有難う存じます』

それから、看守は、例に依つて、いろ／＼つまらないことを、諄々と、いつて聞かせる。それを、赤井は、有難さうにして、聞いて居るのであつた。

焚木集めは、構内の、どこへでも行ける。大きい焼印の捺された、鑑札を、腰に、ぶら下げてゐるから、構内は、自由自在に、歩けるのであつた。

脱獄をするのには、構内の地理を、知るのが第一だ。赤井は、その便宜を得たのである。

どこから、脱け出して、どこへ行く、といふ見當は、豫め定めて置く、必要がある。それには、構内の往來が、自由に出来るのでなければ、いざと、いふ時になつて困るから、これについて、赤井の苦心は、相當に深いものがある。

つた。然るに、焚木集めを引受けてからは、一段と注意して、役人の信用を、得ることに努め、周囲のものは勿論、傳告者の、氣受ても良くなるやう、可成り骨を折つたので、今は、何の方面でも、赤井に對して、少しの疑惑を有つものが、ないやうになつた。

『自分は、出獄の後、鐵工を以て、一生の職業にしたいから、ぜひ製鐵工の方へ、廻して貰ひ度い』

と、いふ願書が、出て來た。

その願書には、受持ち看守の見込書も、附いて居たが、これは、赤井に對する、信用保證の如きものであつた。幾ほどもなく、赤井は、製鐵工の方へ、廻される事になつた。

工作については、何の知識もなく、丸で素人の事であるから、重い物の持ち運びや、工場内の走り使ひをさせられて、蔭日向なく、働いて居た。

或日、看守の眼を盗んで、二尺餘りの鐵棒を二本、コソソリ持ち出して、便所の屋根裏へ、かくして置いた。

工作が終つて、監へ引上げる時は、外のものと違つて、禁獄監から、特別の迎ひが來るので、時間は、三十分ほど早く引上げるのであつた。その時には、出口の所へ、藁を敷いて、赤い仕着せを脱がせ、看守が、身體の搜驗を、爲る事になつて居る。

同じ看守でも、厳しく取調べるものと、只一通りの、調べをするだけで、存外に、あつさり、やつてくれる人もある。

受持ちの看守は、一日隔きに、變つた人が來るので、その寛大な調べをする人の、受持ち日を待つて居ると、或日の事、主任の看守が休んで、外の工作から、廻つて來た、看守、それが、意外にも、高田の士族で、赤井とは、小學校時代の、同窓生であつた。

『ヤッ、君は、内山ぢやないか』

「ヤ、これは、珍しい」

「どうして、君は、斯ういふ處へ……」

「實は、十日ほど前に、市ヶ谷の方から、轉勤して來たのだが、君も、飛んだ事件に、引ツかゝつて、さぞ難儀をして居る事だらう」

「我輩は、自分の、つくつた罪で、かういふ宛命に、遭つて居るのだから、すつかり、斷念めて居るが、君の看守になつて居る、といふことは、少しも知らなかつたよ」

「まア、君も謹慎して、早く放免されるのを待つが、よい」

「有難う」

その日は、それだけの事であつたが、どういふ都合か、今までの受持であつた、看守は其後、出て來ないで、内山が代つて、受持になつたらしい。

そこで、赤井は、内山の受持ちの日に、例の鐵棒を、懷裡にかくして、引上げの時、搜驗を、うける事にした。

内山が、帯も解かせずに、只だ體の上から、一と通り撫で廻して、搜驗を、すませてくれるのを利用して、鐵棒を持ち出さうと、したのであるが、ずるぶん、冒險的な道方であつた。

幸ひにして、例日の通り、一と通りの撫で廻しで、すんだから、ほつと、息を吐いて、監へ、歸つて來た。

日曜日には、工作が休みになつて、その代り、領置品調べと、いふのがある。在囚の所持品を、入獄の時、すべて預かつて置く。その引合せを、爲るのであるから、赤井は、巧に、この時を利用して、裕の衣物と、フランネルの衣物を、懷裡に、かくして來た。

衣物と鐵棒が、手に入つたので、これから、脱獄の手段を、考へる事になつた。

井上が、もう二三日で、いよいよ放免になる、といふ時、赤井は、松田の居らぬを幸ひ、井上に向つて、脱獄の決心を語つた。

「君は、豪い事を、考へて居るな」

「どうせ、九年なつて、そんなに長い月日を、この中で、送れるものぢやない。折角に考へた、暗殺も、このまゝに中止する事は出來ないから、脱獄の上、再擧を謀らう、と思つて、堅い決心をした譯だ」

「併し赤井君、それは、もう一度、考へ直したら、どうかね」

「イヤ、再考の餘地は、ないのだ」

「左様か」

「そこで、君の放免されるの見込んで、少し頼みたい事がある」

「どういふ事かね」

「巧く出て行つても、高飛びをする費用が無ければ、どうする事も出來ないから、君にその心配をして、貰ひ度いのだ」

「えッ、金の事か」

「うむ」

「そりや、困つたな。僕は、林先生の家に、寄食して居る身分で、萬事は、先生の世話に、なつて居るのだから、とても、金の工面なんか出來やしない」

「大した金ではない。たとへ、二圓でも三圓でも、君に出來るだけで、宜しいのだ。一文なしぢや、何うする事も出

来ないから、一日か二日の、小使錢さへあれば、そのうちには、何うとか、するつもりだ』

『その程度で、よろしければ、何とかしやう』

『有難い、どうか頼む』

『宜しい』

『松田には、内所にして置いてくれ』

『それは、僕も、いふつもりであつたが、松田は、正直で、よい男だけれど、どうも、輕卒な所があつて、殊に短氣だから、注意したまへ』

兩個は、しきりに打合せを、やつて居る所へ、廊下に、足音が聞えたから、話は、打切つてしまつた。

井上は放免されて、跡は、松田と對座になつた。或晩の事であるが、赤井は、今や眠りに入らう、とした時、松田が、掛け布團の、端を引くから、松田の方へ、向き直つた。

『君、いつまで、かうして居ても、人間としての甲斐がないから、脱獄しやう、と思ふが、同意してくれぬか』

赤井の頭腦は、一時に、かつと熱くなつた。自分の考へて居ることを、却つて相談されたのであるから、頗る驚いた、と同時に、弱つたのは、井上からも、注意のあつた通り、赤井は、單獨で、やるつもりであつたのを、かういふ風に相談されて見ると、無外に、斷る事もならず、さればとて、一しよにやらうとは、なほ更いへず、非常に苦しんだが、その晩は、ほどよく扱つて、やうやく、ごまかして置いたが、それからといふものは、松田の迫ることが、だん／＼はげしくなつて來た。今は、如何ともする事が出來ず、とう／＼赤井は、松田に、同意してしまつた。

同室して居る以上、松田に、ひどい反感を持たれたら、絶對に出來ない事であるから、止むを得ず、兩人で、決行する覺悟を、仕たのである。

一應は、河野へ、打明ける必要もあるから、河野が、便所へ行くのを見て、こっそり、尾いて來て、事情を打明け

た上、河野も、一しよに行けと、勸めて見たが、河野は、何としても同意しなかつた。

『君が、それまでの決心を以て、いよく斷行すると、いふのでは、もはや引留める事はせぬが、松田と、一しよに行くことは、もう一度考へ直したまへ』

『それは、よく解つてゐるが、今日となつては、如何とも致し難い』

『それでは、止むを得ないが、ずるぶん注意して、やりたまへ』

井上と、河野の注意は、その當を得て居た。赤井も、深い注意を、有つて居たが、如何にせん、同室して居るから否むことが出來なかつた。

脱獄の日は、明治十七年の三月廿六日と定めて、松田との打合せも、すんだ。萬事は、赤井が、行る通りに、松田は、従つて行く、といふことにして、松田は我意を通さぬ、約束までした。

洗面所の水を、毎日汲込んで、置くのは、在監者が交代でやる事に、なつて居た。廿六日は、赤井の非番であるから、すつかり、汲込みをすませて、看守の油斷を利用し、潛り戸の錠前を、本當に卸さずに置いた。其處から出て行かう、と考へたのだ。

日が暮れてから、便所へ行つて、河野等に逢ひ、別れを告げた。松田にも注意して、出てからの事を、よく教へて置いた。松田は、赤井の尻から尾いて行けば、それで可いのであつた。

夜半の十二時になつて、看守が交代した。一と廻りして、各室に異狀なし、と見れば、それで、安心して、見張所に、何か、書き物を、はじめた。

兎に角、各室の戸に、錠を卸さなかつた位で、夜中に、便所へ行けるやうにしてあつたのだから、萬事に、好都合であつた。

いよ／＼、時刻は來た。先づ赤井が、洗面所へ來て、例の空錠を外した。四邊を見て、そつと出る。後から、松田

も出て来て、赤井の爲る通りに、すべて眞似て、ゆくのである。
 焚木集めの時分に、すつかり構内の勝手は、覺て居るので、成るべく看守の、見廻りの少い所を選んで、暗い夜を幸ひに、徐々とゆく。若し見付けられたら、百年目、懷裡の鐵棒を揮つて、一人や二人は、打殺しても行かう、といふのであるから、ずいぶん、危ない事であつた。

佃島の方へ寄つて、高い土堤がつくられ、その上には、看守の見張所があつた。四方を、ガラス張にして、椅子に寄りながら、どこでも見えるやうになつて居る。
 赤井は、その見張所の下へ来て、水門の陰にひそんだ。石川島の方から、流れてゆく、小川の水が、佃島との境になつて居る、川へ注ぐ。その間が、水門に、なつて居るのだ。

水門の上の方は、堅い木であるが、長い間、泥の中に、浸された部分は、半ば腐蝕して居るから、それを、引抜いて出やうと、するのであつた。
 上部から、續いて居る、太い木であるから、水面より、少しはいつた所で、うまく折つて、泥に、埋まつて居る、部分を引抜き、水を溜つて、佃島の方へ出やうと、するのであるから、むづかしい、仕事である。

而も、見張所の下で、これを行らう、とするのは、赤井の如き、大膽なものにこそ出来るが、普通のものには、到底、出来る事でない。
 やうやく、このむづかしい事を、やり遂げて、土堤の前へ出た。其處に、また一つ堀がある。それも、程なく越えて、例の川へ出ると、まことに都合の、よい事には、すぐ向ふ川岸に、小さい舟が、一隻繋いであつた。漁夫が、發して行つたものに、違ひない。

赤井は、水練も、達者であつたから、泳ぎ渡つて、その舟に乗り、静かに漕いで、松田を、迎ひに来た。
 かくて、兩人は、大川の中流へ出た。明治十一年以來、獄に居つた、松田は、久し振りで、娑婆の風に吹かれた。

「もう、松田君、大丈夫だ」
 「君には、非常に骨を折らせた」
 「君のためばかりではなく、自分のためでもあるから、こんな事は出来るのだ」
 築地の明石川岸へ、船は着いた。かくして、置いた給とフランネルを被て、兩人は上陸した。

一八

もう、一時過ぎた。
 往來の人足も、全く絶えて、森閑として居る。向ふから、角燈を下げた、巡査が、ブラ／＼やつて來た。

「オイ、君ッ」
 「小さな聲をしたまへ」
 「巡査が、來たぢやないか」
 「來ても、宜しい」

「大丈夫か」
 「まあ、落ち付いて居るさ」
 角燈の光りが、ピカリ／＼と、此方を、照らして居る。赤井は、急ぎ足になつて、その巡査に近付いた。

「ちよいと、旦那ッ」
 巡査は、足を留めて、
 「何かね」
 と、いひながら、兩人の顔を、角燈に、照らして見た。

「八丁堀へ、行き度いのですが、近道がありますなら、教へて戴き度いもんです」
 「何ッ、八丁堀へ行く、近道か……お前達は、今頃、何んで歩いて居る」
 佃島のもですが、親類へ大急ぎで、知らせる事がありました、これから行くのです」
 「ふふーむ。親類へ行く、と申すのか」

「ハイ」

「急病でもあつてか」

「よく御存じですな」

「大概、そんな事ぢやと、思つた」

「矢ッ張り、御役目柄で、恐れ入りました」

「八丁堀へ行くのは、これから眞ッ直に、一丁ほど行つて、右の方へ、曲つて行くのぢや。近道をゆくと、迷ふ事があるから、本道を、ゆくがよい。急がば廻れ、といふ諺もあるからな」

「成程、御尤も様で、御座います。ツイ急ぐものですから、有難う存じます」

「お前は、連れか」

松田は黙つて、頭を下げた。

「これは、旦那、聾ですから、駄目です」

「ははア、左様か」

「どうも、有難う御座いました」

「氣を付けて、ゆくがよい」

「ハイ」

巡査は、ブラリ／＼と去る。赤井は、ペロリと舌を出して、踵足になつて、急ぐ。

「君の度胸には、實に驚いた」

「なアに、斯んな事は、何でもない、これからは、猶つと危いことに、出逢ふだらうから、さういふ時は、落付いてかゝるに限る」

「僕らは、君の眞似は、とても出来ない」

「弱い事を、いふぢやないか」

「でも……」

横丁から、突然に、伸屋が、出て来た。その頃に流行つた、合乗俵を曳いて、ボンヤリした、提灯の光りに、道を照らしながら、やつて来たから、

「伸屋さん、京橋の新着町まで、乗せてくれないか」

「ハイ／＼、宜しう御座います」

「いくらで、ゆくね」

「何分にも、夜更けの事ですから、少し氣張つて下さい」

「だから、幾何でゆくかと、聞いて居るのだ」

「左様ですな、お高いでも御座いませうが、三貫やつて下さいな」

「宜しい」

伸屋は、棍棒を下ろした。二人は、少し向ひ合せに、なるやうにして、俵へ乗つた。

「どつこいしよ」

といつて、俵夫は曳出したが、騙け足は遅い。

「旦那方は、ナカ／＼重いですぞ」
「十錢増してやるから、急いでくれ」
「へい／＼」俵は、少し速くなつた。

林正明といふ人は、古い時分の論客として、有名な方であつた。殆ど雑誌を發行したり、著書を公けにして、讀書の間には、却々、知られて居たが、早く世を逝つたのと、辯舌に、巧でなかつたから、演説の方で、有名になつた林包明と、同じ人の如く、思ふものが多く、終には、包明の方が、一般に知られて、正明の名は、何時から、といふことなく、忘れられてしまつたのは、いかにも、氣の毒な次第である。

包明は、近年まで、生きて居たが、これも、死ぬ時分には、餘りに知られず、まことに寂しい、最期であつた。

自由黨の創始時代に、一番の弱年で、本部の幹事となり、筆に、舌に、その活動は目覺ましく、包明の名は、全國に鳴り響いて、一時は、党内でも、重きをなした人である。

スペンサーの、社會學を翻譯して、世に公けにしたのは、包明が、最初の人であつた。第一冊を出したが、その頃の政黨員には、むづかし過ぎて、餘り賣れなかつたので、第二冊以下は、發行されずになつたが、兎に角、包明は、才氣の溢れて居た、人であつた。

包明に比ぶれば、正明の方は、ぐつと、先輩であつたが、包明ほどに知られず、只、兩人を、知る人の間では、正明の方が、重く視られて居た。

概は、正明の筆に成つたものが、雑誌の大部分を、占めて居た。井上は、正明が、最も愛して居た、書生の一人で、雑誌に、署名して居た爲めに、長く入獄して、やうやく、歸つて來た、といふ所から、正明も、井上には、特に優遇を、與へて居た。銀座の表通りは、今のやうに、賑やかではなかつたが、それでも、宵のうちには、ひと盛り人出があつて、九時頃には、もう店を閉めに、かゝるほどであつた。況して、その裏通りになると、商店も少いので、早く寝てしまふ、家が多、日が暮れると、ずるぶん淋しかつた。

夜は更けて、一時を、過ぎて居る。合乗俵を曳いて、新町を、往きつ戻りつ、して居たが、

「旦那、やうやく判りました」
「左様か」
「此處で、御座います」

「といつて、車夫は、梶棒を下ろした。若い方の男が、しづかに下りて、表戸を、トン／＼叩いた。眠入りついた時と見えて、ナカ／＼起きて來ないから、

はげしく叩くと、微かに返事が聞えた。歳の若い書生が、潛戸を開けて、ぬつと、首を出しながら、

「誰れだい、今頃に……」
「オイ、井上君」

「ゑッ、誰れだね」
「我輩だ。ちよいと、出てくれ」

「ヤッ、君は……」

「叱ッ」
 「尋ねて来たのは、赤井で、首を出した書生は、井上であつた」
 「約束はして置いたが、まさかと、思つて居た、井上は、赤井の顔を見たので、一べんに、眼が覺めてしまつた。」
 「ど、どうして、君……」
 「今、出て来たのだ」
 「ふーむ」
 「松田も、彼所に、待つて居る」
 「松田が、一しよか……」
 「どうしても、否といへぬ事情があつて、連れて来たのだ」
 「ふーむ」

一七

赤井が、戸を叩いて居るうちに、松田は、氣を利かして、俵を二三軒、遠ざからせて置いた。
 「かねて、頼んで置いた通り、少しばかり都合して、貰ひ度い」
 「弱つたな」
 「金は無いのか」
 「小使錢が、少しばかりはあるが、とても、君に満足を與へるだけの、金は無い」
 「いくらでも、宜しい」
 「夜半でない、林先生から、借りることも出来るが、まさか、起して借りることは、食客の身では、少し困るから

な」
 「それは、道理だ。いくらでも、君の手元に在るだけで、宜しい」
 「左様か。それぢやア、少し待つて居て、くれたまへ」
 井上は、家の中へはいつて、間もなく出て来た。
 「君、これだけしか、無い」
 「有難う」
 赤井の手には、二圓と少しばかりの、金が載せられた。少ないとはいふものゝ、その頃の二圓は、今の二圓と違つて、書生の身に取つては、大金、といふてよい。
 「松田君が、一しよだと聞いて、僕は驚いたよ」
 「君の注意があつたが、何しろ、同じ室に居るので、斷りかねたのだ」
 「今となつては、仕方がないから、注意して、ゆきたまへ」
 「うむ」
 「之から、どこへゆくつもりかね」
 「どこといつて、別に的はないが、とに角、これから、弟の居る下宿を訪ねて、いくらかつくらせ、その上の都合で、ゆく先きを、定める事にしようと思つて居るのだ」
 「本郷の龍岡町だつて事だが、左様かね」
 「まだ、其處に居る筈だから、まア、行つて見よう」
 「赤門の大學が在る、近邊だから、すぐ判るだらう」
 「事によると、明日は、君を迎ひに、寄越すかも知れないから、その時は、ちよつと、来てくれたまへ」

「承知した」

「松田にも、逢つてくれるか」

「ちよつと、逢つて置かう」

「それぢや、逢つてくれ」

「よろしい」

赤井は、俵の傍へ来て、松田を招いたから、松田は、俵を下りて、赤井の跡から、尾いて来た。

「やア、井上君」

「しばらく……」

井上にした所で、松田を嫌つて、居るのではない。殊に一年も、同室して居た、親しみはあるのだが、只、松田の性質を、よく知つて居るだけに、赤井が、一しよに脱獄する、として、考へて見れば、少し不安を感じたから、一應の注意は與へたが、かうして、出て来た以上は、どうも、止むを得ない、と思つて居たのだ。

「今、赤井君にも、よくいふて置いたが、大いに注意して、くれたまへ」

「イヤ、君の親切は、感謝する」

「それぢや、失敬しよう」

「いろ／＼有難う」

井上に別れて、兩個は、また俵に乗つた。俵夫は、もうこれで好いのだ、と思つて居たら、兩個がすまして、俵に乗るのを見て、少し驚いた。

「旦那、未だ何處かへ、行くのですか」

「本郷の龍岡町まで、やつてくれ」

「へー、困りましたな」

「賃錢を増してやるから、ぜひやつてくれ」

赤井が、一圓の紙幣を渡した、俵夫は、ニッコリと笑つて、また曳き出した。

赤井の弟、金十郎は、學問修行のため、東京へ、出て来た。同郷の先輩が、赤井の入獄後、それ／＼に、學資の分擔をきめて、金十郎のために、學問を仕込んでやらう、といふ、親切からであつた。

利口な、子供ではあつたが、兄ほどの氣概がなく、中途から、ぐれ出して、學校へ行く事は、廢めてしまつた。兄の死後は、壯士の群れに入つて、どこといふことなく、押廻して歩き、茨城縣の下館には、しばらく居た事がある。

藤田善次郎といふ人が、頼つて来る壯士のために、寄宿舎のやうなものをつくつて、何時も、五人や六人の壯士は、養はれて居た。

最近に、佐賀關史や、阿部宗任を著はし、一種の史眼を有つ、隠れた人物として、やうやく、人に知られて来た、山田宇吉といふ人は、この寄宿舎に、監督として、控て居たが、それは、餘り人に知られて居らぬ。

金十郎は、この山田に、大分教へを、うけたのであるが、徒らに亡兄の名を、利用するのみで、自分の方で、世に立つことを、心懸けなかつたから、純眞な、壯士からは斥けられ、いつか事件屋の、壯士の中へ、飛び込み、それから、博徒になつて、つまらなく、死んでしまつた。

龍岡町の、木築幸右衛門といふ、下宿屋から、學校へ、通つて居たが、兄の景韶に、訪ねて來られた時は、只だ驚くばかりであつた。

「兄さん、兎も角、はいつたらどうです」

「莫迦いふな。お前の下宿屋などへ、うつかり、はいれるか」

「左様でせうか」

「かうして、戸外へ呼出したのは、足を取られまい爲だ。若し訊べをうけても、下手な事をいふては、不可んぜ」

「そりやア、大丈夫です」

「いくらか、都合が出来るか」

金十郎は、頭を掻いて、

「月末ですから、どうにも仕ようが、ありません」

「少しも、無いか」

「五十銭位はあります」

「それでも、宜しい」

「月が變れば、少しは都合もつきませう」

「外によい、工夫はないか」

「鈴木さんが、出て居ますぜ」

「何だ、鈴木君が」

「エー」

「どこへ……」

「本白銀町の越後屋十右衛門へ、来て居ます」

「可矣、お前の五十銭は、貰はぬ事にする」

「左様ですか」

「鈴木君が、来て居るなら、これから行く事にしよう」

赤井は、一と通りならず、喜んだ、鈴木に逢へば、一時の凌ぎは、つくものと思つて、金十郎に、別れを告げ、引返へして來ると、俥の上の、松田に囁いて、また、俥へ乗つた。

「オイ、大急ぎで、本銀町へ、やつてくれ」

「旦那、もう勘辨して下さいな」

「まア、そんなことをいはずに、やつてくれ」

「何しろ、疲れて居りますから……」

「お前の家は、どこか」

「鐵砲洲です」

「それなら、どうせ通り道だらう」

「へい」

「少し重からうが、空身で行くよりは、張合があるだらう」

「へい」

俥夫が、漕つて居て、容易に棍棒を持たないから、赤井は、また五十銭の紙幣を、擱ませた。

「それぢやア、本銀町へ行つたら、お暇を戴けますか」

「うむ。彼處まで行けば、それで勘辨してやる」

「ぢや、行きませう」

俥夫は、駈けはじめ。

鈴木昌司は、加藤貞盟と、共に上京して、越後屋に、泊つて居た。宵のうちから寢込んで、もう一と眠り、した時であつた。廊下の、障子が、スツと開いた。續いて、襖を開けるものが、あつたので、

「誰だ」

「お目覚めで、御座いますか」

「一と眠りした所だが、今時分に、何の用事か」

「かういふお方が、お見えになりました」

といつて、宿屋の番頭が、何か、書いたものを出した。

鈴木は、それを受取つて、寢て居ながら、披いて見ると、驚いた。氏名は書いてないが、赤井の手蹟であるから、

「すぐ通してくれ」

「宜しう御座いますか」

「うむ、國元からの使ひぢや」

「はア、左様で御座いますか」

番頭は、スグ階下へ行つたが、間もなく、連れて來たのは、赤井と外に一人。

「お前は、階下へ行つて居てくれ、用事があつたら、呼ぶから……」

「へい、それでは、御免下さいまし」

番頭は去る。鈴木は、膝を進めた。

「よく達者で居たな」

「どうか、かうか、生きて出て來ました」

「而て、この人は……」

「大久保内務卿を殺つた、島田一郎の仲間で、松田克之といふ人です」

「ふうーむ」

「一しよに行く、といふから、連れて來たのです」

流石の鈴木も、その大膽な、遣り口には驚いた。松田との挨拶もすんでから、

「全體、どうしよう、と思ふのか」

「未だ方針は、定まつて居ませんが、兎に角、東京を遁れて、ほとぼりをさましてから、引返して來て、一と仕事、やるつもりです」

「我輩は、左様いふ事に、賛成は出來ないが、今更に、君としては、如何ともしようは、あるまいから、君の思つた通りに、やるがよい」

「甚だ申兼ましたが、少し融通を、願ひ度いのです」

「宜しい。それは承知した」

鈴木は立つて、廊下へ出た。やがて、戻つて來ると、跡から尾いて來たのは、加藤であつたから、これには、赤井も、意外の感に、うたれた。

「やア」

「やア」

「鈴木君から、一と通り聞いたが、ちと輕率な事をしたね」

「……………」

「併し、もう如何ともしようがない」

「先輩に對して、御心配をかけて、すまないが、どうか恕して下さい」

鈴木は、紙に包んだものを出して、

「少しばかりだが、これを、持つて行つてくれ」

「どうも、すみません」

松田は黙まつて、頭を下げた。

「それぢや、これで失敬します」

「此處へ、泊めてもよいのだが、却て危ないから、引留めぬ。悪く思つてくれるな」

兩個に、送り出されて、兩個は、戸外へ出た。俵屋は、向ふ側に、待つて居る。

「オイ松田君、どうするつもりか」

「僕は、粕壁へ行かうと、思つて居る」

「そりや、可からう。途中まで送つて行かう」

「君と、粕壁まで行つて、それから相談して、方向を定めやうぢやないか」

「うむ、可からう」

兩個は、また俵へ乗つた。

「南千住の方へ、行つてくれ」

「えッ、御冗談おツしやつちやア、いけません」

「冗談ぢやない、本當だ」

俵屋は、呆れてしまつた。既う二時を過ぎて、はや三時に近く、黎明には、程近いのである。築地の明石町から、京橋新町へ行き、それから、本郷の龍岡町を経て、日本橋の本銀町へ来たのだから、體も、疲れて居るのに、

亦た南千住へ行けとは、無理な事だ、と思つた。

それに、兩個の様子が、何となく怪しい、とも思はれたので、ます／＼嫌氣がさして、これからは、近い所でも、

度いてゆく心に、なれなかつた。

「どうか、御勘辨を、願ひ度いものです」

「そんなことを、いはずと、もう一息の所だから、骨を折つてくれ、たむむ」

「でも、疲れてしまつたので、歩けません」

「どうせ、お前の家へ歸るにも、矢つ張り、歩いてゆくのだらうから、方角は違つても、歩くのに變りはあるまい」

「……………」

「疲れたら、僕等と、一しよに泊つても、よいのだ。ぐつすり寝て、疲れを休めてから歸つたら、よいではないか、

それだけの心付けはする。明日休むなら、一日分の増賃もやるから、ぜひ度いて行つてくれ」

赤井は、しきりに車夫を宥めながら、

「オイ、これを、やつて置く」

といつて、一圓紙幣を、三枚握らせた。今と違つて、その頃の三圓は、俵屋の身に取つては、少からぬ金である。新

橋から、神田まで駆ても、二十錢位にしか、ならなかつた時代に、一圓蔭ぐのは、容易な事でない。

「さ、どうか、やつてくれ、ぶら／＼歩きでも、よろしい」

「南千住は、何の邊でせうか」

「大橋向ふで、ぢぎだよ」

「左様ですか、それなら、やりませう。疲れて居ますから、とても急げませんが、よろしう御座いますか」

「可いとも、ゆつくり、やつてよろしい」

やうやく俣夫を、口説き落して、赤井は、俣へ乗つた。俣夫が、膝かけを廣げて、兩個の膝へ、かけやうとした時、松田が、體を横にしよう、とした刹那、蹴込みへ、何か落した。ゴトンと音がして、すつと、俣夫の足元へ、巾に包んだ、二尺ばかりの鐵棒が、落ちて來たのだ。

松田が、はつと思つた。赤井の胸も、どきんとしたが、俣夫は猶更、はつと思つた。松田の締て居た、三尺帯が緩んで、懷裡に、かくして居た、鐵棒が、ずり落たのである。

「旦那、こんな物が……」

といつて、俣夫が、差出した鐵棒を、引つたくるやうにして、松田は、懷裡へ入れた。赤井が、険しい眼をして、松田を、デロリと睨んだ。

俣夫は、ますく疑ひはじめたが、何しろ三圓、握らせられたので、疑ひは起しながらも、ソロ／＼俣は、曳き出した。

俣の上の兩個も、黙つて居るが、曳いて居る俣夫も、黙まつて駈けはじめた。はやくも、俣は、千住大橋へ、かゝつて來た。

松田は、赤井を、脇で突いた。赤井が、松田の顔を見ると、松田は、右の手を以て「俣夫を殺してしまはう」といふ、仕方話をする。赤井は、首を振つて、反對した。

俣は、青物市場を通りすぎて、菅へゆく、間道へかゝつた。

「旦那、未だ先きでせうか」

すぐに、松田が答へた。

「もう宜しい」

「田圃の中ですが、宜しいのですか」

「向ふに、見える家だ。疲れて居るやうだから、此邊でよろしい。お前は、跡から尾いて來い」

「へい」

松田が、俣を下りる時、右の手は、懷裡に、はいつて居た。

一九

膝掛けを取つて、俣夫が、一步退がりながら、頭を低れると、同時に、鐵棒を持つ、松田の手は、その頭を臨んで振り下ろされた。

「呀ッ」

と叫んで、俣夫は、前へのめらうと、したのを、松田が、二度目を、振り下ろした。鐵棒は、ピュツと鳴つて、俣夫の脳骨は、打碎かれてしまつた。

赤井は、俣の上で、これを見たが、留める間もなく、俣夫は、聲さへ立てずに、横ざまに倒れた。

「松田君、ひどい事を、やつたな」

「うむ、可哀さうだが、仕方がない」

「そんな事をせずとも、可かつたのだ」

「併し、鐵棒を見られたから……」

「もう、仕方がないから、息を吹つ返さないやうに……」

といつて、赤井も、俣を下りた。

これから、倒れて居る、俣夫の頭を、赤井が、力任せに毆つたので、息の根は、全く絶えてしまつた。

「赤井君、これから、どうしたら可いか」

「まア、僕に任かして置け」
赤井は、俣夫の着衣を脱がせて、素裸にしてしまった。松田が、ちつと、見て居るうちに、赤井は、その衣物を着て、自分の衣物は車の中へ入れた。どう見ても、一人前の車夫としか、見えぬ。

「さア、松田君、君が、この俣へ乗るのだ」
「えッ」

「僕が、俣夫になつてひいてゆく」

「どこへ、行くのか」

「東京へ、引ッ返すのだ」

「何だッて……」

「それより外に、方法はない、と思ふ」

「東京へ行くのは、火の中へ、飛び込むやうなものだ」

「これから、先きへ行くよりは、却て安全だ」

「左様かな……」

「まさか、俣夫を殺して、東京へ引ッ返したとは、どんな奴でも、思ふまい」

「ふふーむ」

歳は若い、何といふ、膽の太い男だらう、と松田は、舌を捲いて感心した。

殺された俣夫は、京橋の鐵砲洲に住んで居る、宇田川三太郎と、いふものであつた。

松田を載せて、赤井は、俣を曳きながら、東京へ、引ッ返し、萬世橋の傍で、俣を捨てたが、連雀町の宿屋へ、泊り込んだのは、實に横着な道方であつた。

却説、石川島の監獄では、夜が明けてから、松田と赤井の居らぬことが判つて、それからの騒ぎは、非常なものであつた。

警視廳の探偵は、先づ活動をはじめた。各署の探偵も、競争的に飛び出した。憲兵隊の本部でも、殆んど總動員で搜索をはじめ、といふ騒ぎになつた。

兩個ながら、大臣暗殺の前科者だ、といふことが、少からぬ恐威であつた。大臣參議の官邸は、憲兵が詰めかけて警戒の任に當り、東京の出入口には、それ／＼見張りをつけて、往來の者を誰何する。市中の各戸について、巡查が取調べをはじめた。

この騒ぎの最中、兩個は、宿屋を出かけて、須田町の大通りを、日本橋の方へ、ぶら／＼やつて来た。

何となく、巡查や憲兵の、歩いて居るのが、平生より、はげしいやうであつた。警部の服を着た人が、綱杵の俣で急がしさに走らせてゆく、姿を見て、兩個は、ニヤ／＼笑ひながら、悠然として、歩いて居る。

「オイ、飯を食つて行かうぢやないか」

「よからう」

「久し振りで、鶏肉鍋でも、突つて見よう」

「うむ」

神田鍛冶町の往來で、兩人は相談をきめると、その頃では、東京一の鶏肉屋、今金の二階へ上つた。

近年は、飲食店の上にも、非常な變化があつて、昔の江戸らしい氣分は、追々に薄れゆくばかりで、時の流れは、恐ろしい力を、持つて居ると、思つて居た所へ、例の大地震で、全然ツきり、變つてしまつた。

アメリカ式の、レストランや、喫茶店が、莫迦に、幅を利かして、昔の江戸らしい所は、少しも無い。ゆつたりと落付いて、味はいながら飲食する、といつたやうなことは、殆ど跡形も、なくなつてしまつた。

その影響は、古い暖簾を誇りにした、料理屋にまで及んで、最近二十年の間に、全く姿を消してしまつたものが、可なり多くある。

賣茶、大椿の、古い所は別としても、倉田家、八百勘、松源、青柳、川長、柏木、菊隅、金清等、數へて来れば、限りなくある。會席茶屋の外にも、名物として知られたものが、枕を並べて、倒れてしまつた。

銀座の松田、下谷の雁鍋、神田の今金、この三軒は、地方から出て来る人を、多くのにしたものであるが、松田は、純な日本料理で賣出し、維新の際に、上田右馬之助が、天童の、織田の家來の三人を、見事に斬つて、一世に勇名をうたはれた。それがために、松田の名も、廣く知られて、その繁昌は、實に大したものであつた。

雁鍋の賣出しは、上野の戰爭からであつた。一時の繁昌は、これも大したものであつたが、廿年ほど前に、潰れてしまつた。松田の跡は、酒造火災保險會社になつて、雁鍋の跡は、世界といふ牛肉店になつた。

美味い鶏肉と、便所の綺麗なのが、呼び物になつて、流行出したのが、神田の今金であつた。赤井は、二度來た事があつて、珍らしいとも思はないが、松田は、初めての事とて、いかにも物珍らしさうに、四邊を見廻しては、しきりに感心して居る。

「君、實に立派な、鳥屋だな」
「家が、立派なばかりぢやない。第一に、鳥も美味いし、酒の評判が、良いのだ」
「何しろ、久しぶりで、實に愉快ぢや」
「これからは、不愉快の事も多くあるだらうから、今日は、思ひ切り、愉快に飲んで、ゆく事にしようか」
「それが可い」

女中は、鍋を火にかけて、鳥を煮始めた。その間に「旦那、失禮ですが」と、いつて酌をするので、松田は嬉しさうに飲み出した。

表二階は、ガラス窓で往來は、直ぐ見下しであつた。僅かに六年振りではあるが、その間の、世態の變化は、實にはげしいものであつて、松田の眼から見れば、何を見ても、珍しいのが當然である。

往來の人や、向ふ側の商店を、熟と見下して居た、赤井は、女中に向つて、
「オイ、今日は、巡査が、軒毎にはいつて、何か訊べて居るな」
「旦那は、未だ御承知がないんですか」
「何ういふ事だね」
「昨夜、大變な事があつたんですよ」

「ふーむ」
「石川島の監獄を、破つて逃げたものが、あるんですつて、それが、何でも大した奴なのですとさ」
「大した奴、といふのは……」
「人殺しのある、大泥棒だつて事です」
「左様かね」

「そんな事が、あつたものですから、急に訊べが、やかましくなつて、親類の人でも泊めて居るものは、一々しらべられるんですつて、そりやア、五月蠅いのですよ」
「この家でも、しらべられたのか」
「はア、もうすみましたが、いく度でも來るつて、いつてましたよ」
「そんなかは、はやく捕まればいゝがな」
「本當に、左様で御座いますね」

女中が、酒を取りに行つた跡で、

「オイ、松田ッ」

「何だ」

「實に愉快ぢやないか」

「……………」

「我輩等が、かうして飲んで居るのも知らずに、あゝして騒いで居るのを、見て居るだけでも、實に面白い」

「面白い事はなからう」

「面白いさ」

「左様かな」

「まさか、此處で飲んで居るとは、どんなものでも、思ふまいよ」

赤井は、しきりに愉快がつて居るのに、松田は、少し悄氣て居た。

「旦那、お待ち遠さまでした」

「やア、御苦勞々々」

「オヤ、銅が煮えつきましたね」

「取り換へて、貰はうか」

「さういたませう」

新しい銅にして、また、鳥を煮はじめた。それを、また食ひにかゝつた時、女中が、ちよつと立つて行つたから、

「さア、此處で、相談を定めてしまはう」

「何の相談か」

「お互に、かうして、揃つて歩くのは、頗る危険であるから、いつそ別かれて、思ひ／＼に、方向を定めて、一時、潜伏する事に、しやうぢやないか」

「うむ」

「君は、どこへ行くつもりか」

「僕が行く先きは、考へてある」

「どこか」

「信州松本に、古い知人が居るから、そこへ頼つて行かうと、思つて居るのだ」

「そりや、大丈夫の人間か」

「立派な奴だ」

「それなら可いが、うっかりした奴では、危ないぞ」

「大丈夫だから、心配してくれな」

「君は、少し世間に、迂い風があるから、よほど注意せぬと、引ツかゝる恐れがある。注意の上にも、注意をする事にしてくれ」

「有難う、併し、君は、どうするか」

「僕は、どこといふて、未だ定めて居ないが、まア、甲州へでも行かうか、と思つて居るのだ」

「甲州の、どこへ行くのか」

「それが、判然して居ないのだ。今は、左様思つて居るが、戸外へ出てから、どう變るか、判らないし、行く先も、

「これといふ的はない」
 「甚だ曖昧なんだね」
 「頗る曖昧だ」
 「それぢやア、此處で別れるか」
 「左様しやう」

相談が極まつたので、女中を呼んで、飯を食ひ終り、勘定もすませてから、残つた金を、折半して、松田へ渡した。微酔の御機嫌で、戶外へ出ると、兩人は、左右へ別れた。さすがに、名残りの惜まれて、赤井は、幾たびか振り返つて見る。松田の方でも、振り返り行く。

巡査と憲兵が、通る中を、押分けて行く、といつては、ちと大袈裟だが、まア左様した、感じを持つて、赤井は、芝の方へ、やつて来た。新橋の驛前まで来て、ちよつと考へたが、道を、芝口の方へ取つて、やがて、やつて、来たのが、芝浦の海水浴であつた。

今では、跡形もなくなつてしまつたが、一時は、評判の高かつたもので、品川の海を見晴らして、廣々、席を取り座敷の敷も多く、まことに氣持のよい、樓であつた。長廊下を傳ふて、一番に奥深い、静かな座敷へ、はいつた。井上と鈴木へ、書面を持たせた、使ひを出し、その間に、海水の湯にはいつて、監獄の垢を、綺麗に洗ひ落した。

世間の事情に、迂かつたばかりではなく、長い獄中生活で、いく分か、頭腦の働も、鈍くなつて居たものか、赤井に別れた、松田は、その夜のうちに、捕はれてしまつた。本郷の湯島臺から、浦和まで、通しの俥に乗る、といふやうな莫迦氣た、ことをやつた。而かも、その俥夫が、探偵の下働きをやる、奴であつたから、下板橋の松村みねといふ、女主人の旅館へ連れ込んで、警察署へ密告した。そ

れといふので、多數の巡査が押かけて、否認はさず、縛り上げたのである。

それと、眼星をつけて、押へたのではあつたが、いよく、これが松田である、と知れた時の、署長の喜びは、固よりいふ迄もなく、密告者や、踏込んだ巡査に對して、警視廳からは、賞與をやる、といふ騒ぎで、跡の一人、赤井の行衛について、各署では、全力を擧げて、搜索をはじめた。

折柄、俥夫の死體が発見されて、また、これが一問題になつた。初めは素ッ裸の死體であるから、どういふものかといふことも、能く判らなかつたが、鐵棒に、巻付けてあつた巾が、獄衣の引裂いたものであると知れてから、徐々、判つて来て、死體の様子から見て、其者は、俥夫だ、といふことも判明した。

鐵砲洲の俥夫、宇田川三太郎の家族から、搜索願ひが、出てゐたので、その家族に、死體を見せると、正しく本人と判り、鐵棒も、石川島監獄から、持ち出したものだ、と知れて、こゝに兩人の兇行に、相違なし、と見極めをつけ、松田に對する訊問を、厳しくやることになつた。

赤井の弟、新村金十郎を引上げたので、兩人の尋ねて来たことも、薄々ながら判つて来た。松田は、初めのうちこそ、頑強に突ツ張つても見たが、いろ／＼の證據を示して、理詰めの訊問に、堪へ難く、遂に兇行の大體を、自白に及んだ。

さて、赤井は、海水浴の一室で、井上と鈴木に再會して、ゆつくり別れを告げ、その夜のうちに、東京を脱け出して、甲州路へはいつたが、乞食の姿になつて、巧に探偵の網を避れた。

それにしても、警視廳の偵吏は、赤井の行く先を、甲州筋と睨んで、跡を逐ふたのであるが、初狩までは、足が附いて、それから先が、さつぱり判らなくなつた。甲府へ乗込んで、その旨を、警察本部へ通じて、助力を求めたが、本部の方では、一笑に附して、對手にならなかつた、といふ事である。後になつてから、南都留郡の寶村に居た、といふ事が判り、警視廳から、突込まれて、警部長が、進退伺ひを出し

た。
 初狩に、高橋作衛といふ人が居て、戸長を勤めて居た。赤井は、この人を訪ねて、巧に詐いて、初狩から山道を、寶村へ、はいった。
 高橋は、その後、種々の事に失敗して、終には財産を失ひ、煩悶の末、強盗を働いて、重罪刑に問はれた。
 海水浴で、赤井と別かれて、数日の後、井上は拘引されて、未決監へ繋かれた。鈴木にも、嫌疑は及んだが、巧く言ひ譯が立つて、これは拘禁を免れた。
 赤井は、寶村へ、逃げ込んで、日蓮宗の寺へはいり、しばらく坊主に、なつて居たが、不圖した事が因になつて、赤井である、といふ疑ひを持つものが、出て來た所から、偽狂人になつて、寶村を飛出し、それから山越えをして、静岡縣へ入り込んだ。
 この時分に、丘南自由黨の連中が、政府顛覆の陰謀を企て、しきりに秘密の運動を、やつて居た。

岳南自由黨

静岡縣の江川町に、鈴木音高といふ、代言人が居た。父は、山岡景高と謂ふて、以前は、旗下の士として、相當の位置に居たものだが、幕府の瓦解と共に、静岡へ移つて、多くの舊幕臣と謀り、種々の事業に關係して、いづれも思はしい、結果を見ず、幾何かの資産が、有るを幸ひ、はやく見切りをつけて、閑散の生活に入り、子供の教育にすべてを打込んで居た。
 長子の昂三は、餘りに覇氣が強く、人の下風に、立つを嫌つて、暴れ廻るのみであるから、父も、深い望みをかけなかつた。
 次子の音高は、鈴木家へ、養子に遣はす約束が、あつたけれど、兄に比べて、學問を、好む風があり、少年の時代から、頗る落付きもあつて、前途、甚だ有望と視たので、はやく東京へ送つて、法律を、修めさせる事にした。
 その頃は、フランス學が盛んであつて、殊に法律といへば、すぐフランスを、聯想する位で、法律はフランスに限られて居た。司法省にはボアソナードが、顧問になつて居て、法律らしい法律は、この人に就て、教へをうけるの有様であつたから、一層、フランスの法律が、大切にされて居た。
 音高も、矢張り、フランス學を修めながら、法律を、學んで居た。大して深くはなかつたが、フランス學も、一通

りは、やつて居たので、試験の成績は毎時も良かった。

廿一歳の時、既に代言人の免状を得て、静岡へ、歸つて来た。歳は若いし、新しく法律を修めて来た、といふ所から、その評判は、非常に高く、父の顔もあつて、訴訟の依頼者は、詰めかけて来る。

フランスの法律を、そのまゝに、日本の法律として、取扱はれた時代に、フランスの法律學を、修めて歸つた、といふのであるから、裁判所の信用も、外の代言人に比べては、頗る良かったのは、當然の事である。

法律と、いつた所で、未だ民法も、商法もなく、粗末な刑法が、たつた一つ、あつただけの事で、裁判所の仕事としては、刑事の方が、殆ど専門の如く、なつて居た。

鈴木は、刑事専門の代言人として、静岡第一の稱があり、一たび、その雄辯を聞いたものは、鈴木でなければ、ならぬやうに言ひ離して、その繁昌は、縣下に於て、肩を列べるものもなかつた。

代言人組合が組織されて、数年の後ではあるが、鈴木が會長となつた頃が、最も盛んな時代である、といはれた。夙く、自由黨に入つて、静岡へ、支部を設けよう、としたら、集會條例の規定が、それを許さぬ、とあつて、幾たびか、その筋との争ひもあつて、静岡の自由黨は、獨立する事になり、丘南自由黨と稱した。

黨の先輩としては、前島豊太郎が居た。代言人としても、前島の方が、遙に古いのであつたが、何時か知らず、黨の勢力は、鈴木の方へ移つてゆき、代言人としての名も、前島より高くなつて来た。

頭髮は長く垂れて、肩を掩ひ、稍や太り氣味の、體格は上脊もあつて、立派な男振であるから、初めて逢ふた時の感じは、頗る好かつた。任侠の風があつて、よく金を散るので、同志の間にも、頗る人氣があつた。

明治十七年の正月、江川町の鈴木邸に於て、極く親しい同志を、十二三人集めて、新年の小宴を、催す事になつた。

鈴木辰三、眞野眞然、濠省太郎、宮本鏡太郎等の人々が、集まつて来た。席上の周旋には、萩江露八が、主として當り、土地で有名な藝妓が、七八人も揃つて、ナカ／＼さかんな、宴會であつた。

その頃には、鈴木も、未だ無妻であつたから、かうした宴會を、自邸に開く場合、露八が、周旋掛りになるのは、常例の如くなつて居た。その露八の事を、少し述べて置き度い。

徳川幕府が、いよく瓦解する時に、旗下八萬と稱して、三河以來の幕臣は、多く遊惰に流れて、本當の武士氣質は、頗る薄くなつて居た。

泰平が、三百年も、つゞくと、武士の氣風にも、甚だしい變化を來して、昔の豪快さは、影も留めず、嬌奢と風流に、明け暮れ、浮身を糞すやうになり、茶の湯、音曲、舞踊、人々の好みにこそ、相違はあつたが、すべての嗜好は女性的に、なつてしまつた。

竹刀を、持つべき手に、三味線の音締を合はせ、柔術を、習ふべき身が、トコトンを、はじめるといつた調子で、清元の允可をうけて、それを誇りにする、物凄連中も、出て来た。

それを嘆いて、しきりに武道を、勵むものもあつたが、數の上からいへば、頗る少く、大概なものは、遊藝に耽つて、酒食の友を求むる外に、餘念なく、祖先が、血を流して、やうやくに、築き上げた、武名も、今はすたれて、家名の維持にさへ苦しむものが、多くなつて来た。

攘夷倒幕、開港佐幕と、二つに分れて、鎬を削つての争ひは、徳川慶喜の辭職に依つて、一段落とはなつたやうなもの、幕臣の身に取つて、その口惜さは、一と通りでない。少數ながらも、骨の硬いものはあり、頑勢の挽回に努めて、薩長の專横に對抗しやう、と謀るものも出て来て、各所に、その會合は、催されるやうになつた。

土肥庄次郎は、そのうちの一人であつた。本多敏三郎からの召集をうけて、東本願寺へ行き、會合の趣旨も聞いたが、集まつたものが、意外に少ないのを見て、

「本多さん、これぢやア駄目だ。一口にいふ、旗下八萬、それが、只つた二三十人とは、何事だ。徳川の武運も、今は、これまでと思ふ外は、あるまい」

と、土肥が、嘆くを聞いて、本多は、笑ひを浮かべながら、しきりに土肥を宥めた。

「馬鹿な事、かういふ企ては、只の一度や二度で、うまく行くものではない。いく度も、つゞけてゐるうちには、物にならう。まア、あきずにやつて見やうぢや、ないか」

「左様か、拙者は、一旦募りに應じたのだから、いく度でも、出て来るが、いつも二三十人では、張り合ひも、なからうな」

「たしかに、殖えて来る」

「十倍になつても二三百人、百倍になつた所で、二三千人だからな」

「まア、左様いふな。倦まずに、やつて見やう」

「それにしても、勝安房は、怪しからぬ奴だ。徳川の粟を食みながら、一戦も交へず、薩長の賊徒等を、御城内へ手引をする、といふぢやないか」

「さ、それにつけても、我等の團結が、必要なのだ。上様の御身に觸らぬやう、と考へて、今日までは、黙つて居たが、もはや勘辨相成らぬから、一と働き、やつて見やう、といふのが、我等の本心だ。足下も、その覚悟で、やつてくれ」

「可矣、やれるだけは、やつて見せる」

「それを聞いて、一と安心だ。この次ぎは、四谷の方で、集まつて見やう、と思ふから、同感の士を誘つて、はやくから来て、貰ひ度い」

「宜しい」

「何分たのむ」

その日の會合は、これで終つたが、頗る不味い結果であつた。

けれども、人の一心は大いもので、かうした事を、いく度か、つゞけて居るうちに、とう／＼本物になつた。五千人以上の同志が、堅い決心を持つて、集まるまでに漕ぎつけた。

この集團を、後に彰義隊と名づけ、上野の山内へ、その本部を移した。澁澤榮一郎が、頭取に推薦されて、連判に加はるものは、多くなつて来た。

茲に謂ふ、土肥が、後の露八である。

一一

彰義隊の人々が、上野に立籠つて、徳川のために、最後の氣を吐いたことは、些か痛快の感はあつたが、それも、只だ一瞬の間で、硝煙と共に、消え去つたのは、まことに無残であつた。

西郷は、勝安房の、胸中を察して、容易に手を下さず、假りに手を下さず、として、一日の間に、勝利を得ること

は、とても、見込みが立たぬから、彰義隊の連中が、自然に疲れてゆくのを、待つて居たのだ。

當時の兵力を比較すれば、ほとゞ對等であつて、正々堂々の陣を張つて、戦ひを開く以上、朝始めて夕暮には、すつかり、片付けてしまはぬと、官軍に、勝身は無いのである。

田舎育ちの、兵士のみであつて、江戸の地理には、殆ど暗く、八百八町の、江戸ッ子は、權現様有難やで、先祖以來の徳川鼻根であるから、いよ／＼開戦となれば、官兵の足位は、引ッ張るに、極まつて居る。上野に集まつてゐるものは、僅に七千人内外であつても、市中には、猶ほ澤山の幕臣が、散々に住んで居るから、若し戦ひが、夜に入る

と、それ等の幕臣が、相當に押出して來やうし、隨所に、火を放つて、官軍を包圍したら、それこそ、一大事であ

つて、終には大敗を遂げ、その影響は、すぐ奥羽十五州に及び、延いては全国的に、どんな禍亂が、起るかも知れない。

殊には、薩長の人氣も、餘り良くない、といふことは、西郷ほどの人物が、氣の付いて居らぬ筈はなく、一戦も交へずに、江戸城を明渡させた、功績を、無謀の戦ひで、烟りにしてしまふやうな、莫迦なことは出来ぬから、ちつと堪へてゐたのである。

品川の沖には、榎本釜次郎が、七隻の軍艦を率ゐて、凄い目を光らして居る。それも、官軍のためには、容易ならぬ恐れであつて、前後の事情からすれば、西郷が、手を控へて居たのは、當然の事であつた。

所へ、大村益二郎が、朝命を帯び、江戸へ、乗出して來た。これは、江藤新平の意見を容れて、彰義隊を討つ事だ

け、西郷の手から引放して、大村に行らせやう、といふのであつた。

大きい心の西郷は、その事を聞いて、何の故障もいはず、大村へ、一任してしまつた。そこで、大村は、一般方略を定めて、上野を包圍した。

時に、慶應四年の五月十五日、北風強く、降りつける雨を冒して、戦鬨は開かれた。さすがに、幕臣の粹を抜いた、彰義隊は、實に強いものであつた。

山王臺の受持に、酒井宰輔といふ、血氣の人ではあつたが、却々に、戦さは巧く、配下の幕臣、いづれも、一粒選の人々として、よく防いで、黒門口から、一步も官兵を、ふみ込ませなかつた。

「やア、酒井氏」と、聲をかけて、山王臺の砲列を、布いてある陣へ、のそりと、やつて來たのは、土肥庄次郎であつた。

六尺に近き、大男で、筋骨の逞しい、堂々たる體格、數ヶ所の傷を負うて、血汐は、着衣を彩つて居るが、存外に元氣は漲り、長い槍を杖にして、悠々たる態度は、平生の嗜みをも思はれた。

「オー、土肥か」

「残念ながら……」

といつて、聲を曇らせる、

「なアに、まだ、鬪ふ力はある」

酒井は、冷やかに答へた。

「最後まで、鬪ふ心に、少しの變りはないが、大局は、もう定まつたやうに、思はれる」

「……」

「黒門を開いて、撃つて出たら、どうかと思ふが……」

「まア、待てッ」

歳は、未だ三十を、越えたばかりで、やゝもすれば、血氣に逸る歳頃ではあるが、酒井の落着は、平生からの評判であつた。武術にも、深い修業が、積んで居て、殊に、砲術は、最も長所に、なつてゐた。

山王臺の守備が堅いので、黒門口は、容易に破れなかつた。黒門口の破れぬ限り、官軍の勝目は、ないのだ。そのうちには、日が暮れるであらうから、それまでは、いかにしても、防ぎ鬪かはねばならぬ、といふのが、酒井の覺悟であつた。

「土肥ッ、貴公は、何故、さういふ氣になつた」

「拙者の覺悟は、間違つて居るかな」

「敵に破られるまで、黒門は、守る外あるまい。此方から、門を開いて、撃つて出るなぞ、といふ考へを、起しては困る。日の暮れるまでは、どうしても、防ぐ必要があるのだ。この山王に集めた、僅少の兵力を以て、全局の勝利を占めよう、とは、初めから、思つて居らぬ。只だ頼むは、日が暮れて、はやく夜に入る一事だ。土肥ッ、頼む、

もう一と防ぎ、やつてくれ」
「宜しい。左様いふ次第なら、もう一と闘ひ、やつて見よう」
「輕はづみして、死を急くな、飽迄も防げ」
「可矣」

「南無、東照權現も、照覽あれ。三河以來の武勇は、今も猶ほ、盡きては居り申さぬ。薩長二藩の奸賊に、この靈地を汚させることは、吾人の、堪へ得ざる所だ。これだけは、どこ迄も、防がねばならぬ」
さしも、沈勇の聞えありし、酒井も、茲に至つて、氣昂り、血熱して、その語氣には、悽愴の調が、顯はれて來た。時に、轟然たる、音響と共に、山王臺の陣中へ、一丸が、飛込んで來た。二三十人の砲兵は、これがために、木葉微塵になり、砲車一門は、再び使用出來ぬまでに、打碎かれてしまつた。
酒井も、土肥も、その場に倒れたが、忽ち起き直り、四方を、屹と見廻した。續いて飛び來る、砲丸に、今は、山王臺の陣地も、撤退する外はなかつた。

「土肥ッ」
「うむ、何だ」
「もう、致し方がない、最期の外、あるまい」
「左様か」
「さ、黒門口へ行つて、一と闘ひしよう」
「可からう」

兩人は、槍を携へて、黒門の方へ、駆出した。山王臺は、その跡で、砲弾のために、打碎かれてしまつた。すぐ眼の前の山下に、鷹鷲といふ、料理屋があつた。その二階へ、野砲を二門、曳き擧げて、其處から、山王臺に、

砲撃を加へたのであつた。

直徑にすれば、十四五間しか、ないのだから、どんなものが撃つても、見當は外れない。こんな所から、砲撃されやう、とは、酒井も考へて居なかつたらう。それにしても、官軍が、料理屋の二階へ、野砲を、据ゑ着けたなどは、支那のいくさにも似て、頗る面白い事であつた。

黒門口へは、薩軍が迫つてゐた。篠原多一郎が、部下の決死隊を率ゐて、犇々と攻め寄せる。當時の參謀は、伊知地正治であつた。

酒井、土肥を始め、一同は、黒門を開いて、斬つて出る。

「それッ、朝敵の奴原、一人も遁すな」

と、喚きながら、薩軍の勇士は、一齊に、討つてかゝつた。

哀れ、酒井は、亂軍のうちに斃れる、と同時に、黒門口は破れた。吉祥關も、火焰に包まれて、輪王寺の本坊も、すでに危くなつた。

土肥は、數ヶ所の傷を包み、敗軍のうちに紛れて、いづくともなく、落てゆく。

三

上野の戦争は、僅か一日で済んだけれど、その闘ひは、可なりはげしいものであつた。運動會とは、全く違ふのであるから、女子供は恐ろしがつて、立退いたものもあるが、それは、ホンの上野附近の人々であつて、少し離れた、町の人は、大砲の音を聞きながら、平日の通り、商賣を、やつて居たのだから、實に面白い。

大村の采配、宜しきを得て、彰義隊は、一日のうちに、討伐されてしまつた。輪王寺宮は、淨門院邦仙、常應院守慶、竹林坊方映、覺光院義觀の四僧と、外に宮家の臣、鈴木安藝守、麻生將監、安藤直紀の三人を伴ひ、林光院の裏手

から、中根岸を経て、三河島の方面へ、落延びられた。

池田大隅守、天野八郎、榊原謙吉等の人も、それ／＼に、方面を變へて、山内を、立ち去つた。隊士は、すべて幕臣のみであるから、住家は、市内にあるのだ。戦ひに敗れたものは、或は、自分の家へ歸るものもあり、或は、知己を辿つて、身をかくすものもあつて、それから後は、官軍の兵士が、八百八町の戸毎を、嚴重に探し尋ね、一人も遁さじと、逐廻す所から、到る處に、血を流して、無残な物語りを、残したものが多くあつた。

土肥庄次郎は、酒井の討死を見て、自分も、死ぬ氣で闘つたが、持つて生れた大力と、槍術の妙技は、敵を多く惱まして、自分の身を、安全の境地へ、送り出してしまつた。

併し、數ヶ所の痕は、負うて居るから、その手當を、せねばならぬ。戰場に在る間は、死ぬ氣に、なつて居ても、かうして、逃れ出て見ると、助かりたい心も起つて、いづれかに、落着くさを考へねばならぬ。屏風坂を下りて、坂本の通りへ出てから、かねて、自分の家へ、親しく出入りして居る、大工の政吉が、龍泉寺の附近に住んで居ることを、不圖、思ひ出したので、それを訪ねて見やう、といふ氣になつた。

雨は、猶ほ降りつゞいて、大小の溝渠は、みな往來に溢れ、どこの家も、床下へ泥水が、浸入して居る。貧しい人の、多く住んで居る所で、従つて、その家並も、頗る粗末であるが、それにしても、所々には、高い塀を繞らして、廣い庭を有つて居る、別荘風の家もある。

疵を包んだ、白い巾が、鮮血に染まつて、さらに雨にうたれたので、うつすりと、赤く滲んで居る。穿いて居た草鞋も、いつしか切れてしまつて、片足を跛きながら、歩いて居るのは、疵の惱みに、違ひない。

その頃の、龍泉寺邊は、未だ田圃が多く、畔道を、少しばかり廣げて、假りの道路を通じ、それを差挟んで、だらしなく、建てられた家並、そのうちでは、稍眼につく、新しい一軒建の、平家でこそあるが、頑丈づくり、見るからに、職人が、鶯の頭でも、住みさうな家が在る。

辛うじて、辿りついた土肥は、四邊に注意して、雨戸を、密と叩いた。

「誰だね」

「ちよつと、開けてくれ」

「へー、誰だね」

「開けてくれたら、判る」

「物騒ですからね」

「まア、開けてくれ」

「へー」

容易に開けやう、としない。土肥は、少し焦れ込んだ。

「これッ、開けぬか」

「いつて、はげしく叩いたので、」

「どなたですか」

前とは、違つた聲で、問ひ返すから、土肥が、氣を沈めて聞くと、それは慥に、政吉の聲であつた。

「拙者ぢやよ」

「えッ、旦那様ですが」

「うむ」

戸を開けて、政吉は、驚きの眼を睜つた。

「旦那、どうなさいました」

土肥は、四邊を見廻して、聲をひそめながら、

「はいつても、よいか」
「よろしう御座います」

土肥の體が、すつとはいると、戸は、元の如く、しつかり締められた。
足の汚れを、洗ひ落して、案内された奥の一室に、土肥の、疲れた體を休める。その間に、茶菓の用意が出来て、

政吉夫婦は、懇切な待遇をする。

土肥家の先代から、政吉は、出入して居て、何といふ事なく、世話になつて居たので、政吉の身に取ると、恩人の
若旦那が、いくさに負けて、逃げ込んで来たのであるから、どういふ苦勞をしても、隠匿ふ義理は、あつたのだ。
現在の政吉が、亡父と争つて、家を飛出し、それからといふものは、道樂に、身を持ち崩して、どうにも、手の付
けやうのないのを、土肥の先代が、屋敷へ、連れて来て、みつしり、意見を加へ、亡父との折合ひをつけて、歸參が
出来るやうに、してくれてからは、政吉も、一生懸命になつて、家業に勵み、亡父の存命中に、一本立ちの棟梁株に
なり、多くの出入屋敷を、引受けるやうになつた。

左様した恩義を、うけて居るだけに、政吉が、土肥の身を案じるのは、並一と通りでなく、殊には、女房のいわも、
以前は、土肥の家に、召使はれて居たのを、土肥家が親元になつて、妻として送られたのであるから、その因縁は、
ナカ／＼深いのであつた。

「若旦那、いくさは不可ませんでしたね」
「うむ、残念ながら敗北した」
「つまり、徳川様の、御運が盡きたのでせう」
「未だ、左様とのみはいへぬ、奥羽十五州の聯盟さへ破れなかつたら、回復の道は、いくらでも有る」
「さうなつて、くれりやア有難えが、うまくゆきませうか」

「どうか、なるだらう」

女房のいわが、氣を利かして、酒の用意をした。

「さア、若旦那様、一つ召し上つて下さいませ。遅くなつて看が、ありませんから、有り合せのもので、御勘辨を願
ひます」

「いろ／＼世話になつて、氣の毒ぢやのう」

「どうしまして、御恩をうけた、昔の事を思ひましたら、どんな事でも、いたさねばなりません」

「左様いはれると、拙者は嬉しい」

「これから、どう遊ばします」

「もう一と働まして、最後の御奉公を、するつもりぢや」

「まア、お勇ましい事で、大旦那様が、お居で遊ばしたら、さぞ御喜びでせうに……」

「少しばかり、傷を負うて居るから、その手當もしてから、しづかに、行く先の事も、考へて見たい、と思ふ」

「わたくし達に、出来ます事なら、何でもいたしますから、御心配なく、ゆつくり御手當を遊ばしたが、宜しう御座
ります」

「何分、頼む」

夫婦が、親切に世話をしてくれるので、土肥は、安心して、一夜を過ごした。

翌日は、政吉が、附近の様子を、搜りに出かけたが、息を切りながら、歸つて來ての報告は、すべて不利の事ばか
りであつた。

江戸の四方は、官軍の見張りが、嚴重で、蟻の這出る處もなく、殊に、奥羽へ向ふ、街道筋は、一だんと、きびし
くなつて居る。市内も、探索がはげしいから、うっかり外出は、できないとの事であつた。

かくて廿餘日、市内の取締が、少し緩んだのを幸ひに、土肥は、變装して、江戸を抜け出したが、さて、どこへ行くのやら――。

四

彰義隊は、見事に討伐して、上野の山内には、一人の幕臣も、居らぬやうにしたが、未だ市内の各所には、少からず幕臣が、居るのであるから、敗戦した幕臣が、それ等のものを、頼寄つて行くことは、大に警戒して、再擧の企てを爲し得ぬやうにする、必要がある。

其處で、敗兵の後を逐ふことは、ずるぶん、厳しく行つた。少しでも疑はしいものは、遠慮なく引つ捉へて、嚴重な取調べを行ひ、そのうちには、罪状不明のものでも、構はず斬つてしまつたのが、いくらもあつた、と傳へられて居る。

土肥の如きも、萬一、捕へられたら、斬られる一人であるから、政吉夫婦の心配は、一と通りでない。商賣こそ、大工であるが、生一本の江戸つ子で、達引も強く、殊には、恩人の若旦那である、といふ所から、土肥のためには、能く盡してやつた。

土肥が、江戸の町を、無事に離れ得たのは、全く政吉夫婦の、御蔭であつた。奥羽へ行く街道は、嚴重に固めて居たが、外の街道は、その割合に、ひどくなかつた。土肥は、甲州路へ、はいつて、山から山の、木曾街道へ出た。名古屋に、しばらく居て、それから、少しの知己をたよつて、泉州堺へ、行く事にした。

道場通ひをする時分に、極めて懇意にしたものが、堺に落付いて居る、といふ音信を得たので、それをたよつて、行くことにしたのだ。柔術は、澁木剛太夫に習つて、免許を得て居たから、充分の自信がある。その知己といふのが、矢張り柔術をよくして、今では、堺に道場を開いて居る、といふので、當分は、そこへ行つて、身を置さう、としたのである。

一度は、再擧も考へたが、もう時勢は、さうした事を許さない、と悟つた。特に奥羽の方へは、とても行く事が出来ないので、すつかり断念めてしまつた。これから先は、どうして、世を送らう、といふやうな事は、未だ考へて居らぬが、少しでも、世間が落付いて、官軍の搜索が緩むまでは、どこにでも潜んで、青天の下を、歩けるやうになつてから、身の落付きも考へやう、といふのであつた。

堺へ来て見ると、立派な道場を開いて、遠藤先生といへば、大概なものを知つて居た。

「ヤア、珍しい」

「相變らず、御旺んで……」

「まア、ゆつくりして、ゆくがよい」

「何しろ、日蔭の身であるから、その邊のことは、宜しくたのむ」

「差支ない。心配なく居てくれ」

「何分たのむ」

「上野の一戦には、定めし勇を揮つたことであらう」

「何、大した事も、なし得ず、すこくと、負て引上げたまでぢや」

「十八番の槍術は、さぞ役に立つたらう」

「拙者としては、最後の御奉公は、いたしたつもりぢやから、もう、氣樂に世を送ることにいたしました」

「それが、よい。何事も、時節とあきらめるより外に、あるまいよ」

「當分は、置いて貰ひ度い」

「その代り、朝の稽古でも、手傳つて貰はう」

「宜しい。その位のこととは出来やう」
「だが、その後の事は、知つて居るか」
「少しも知らぬ」

「奥羽も駄目、長岡は、破れて、獨り會津が、頑張つて居るが、これも、近く落ちるだらう、この事だ」
「どうせ、仕方がない」

「榎本先生は、五稜廓に、ふむ張つて居るが、これは、何うか物になりさうぢや」
「左様か」

遠藤は、存外に氣安く、引受けてくれたから、安心して世話になる。朝一しきりは、門人へ、柔術の稽古を、つけてやる事にした。

體格は大きいし、腕力は、充分に有つて、その上に、柔術は強い、といふのだから、忽ち評判は高くなつて、遠藤の道場は、ますます榮えてゆく。

旗本のうちでも、道樂にかけては、人一倍であつたから、土肥には、隠し藝があつた。
三味線もひけば、踊も一通りやる。ちよいと、乙な咽喉で、端唄も歌ふ。清元は、最も得意とする所、むづかしい顔はして居るが、存外に氣輕な所があつて、すべての人の氣受は、すこぶる良かつた。

明治二年の春、新年宴會の席で、一つ二つの、隠し藝を見せたのが、出席者の間に評判となつて、藝妓のうちには、すつかり土肥に、打ち込むものも出來た。

柔術の先生は、早替りして、藝者屋の主人となり、長火鉢の前に坐つて、脂下るやうになつた。
「オイ、どうするつもりか」
遠藤は、眞面目に、訊くのであつた。土肥は、ニヤ／＼笑ひながら答へた。

「もう、人を投げる、商賣は廢める。かうして、浮世を面白可笑しく、送るつもりだ」
「藝者屋の享主で終る、といふのか」
「まア、左様だ」

「君の覺悟が、さうと極まつたら、何とも、いひやうはないが、あんまり世間を、見限りすぎたやうにも思ふ。何とか、考へ直すつもりは、ないか」
「もう、御免だ」

「左様か、それぢや、仕方がない」
「深い世話に、なつたことは忘れない。いづれ恩返しは、出來るだらう」

「それにしても、藝妓屋の居候は、面白くないから、いッそ、夫婦になつてしまつたら、どうだ」
「同じ事ぢやないか」
「何故か」

「かうして、暮して居るも、夫婦と同じだ。別に改めて、夫婦の披露を、するにも及ぶまい」
「披露は別として、ダラ／＼に、はいり込んで、そのまゝでは居候も、同じ事だ。少しは自分の面目も、考へて見ろ」

「藝者屋へ、はいり込むに、面目も糞もあるものか。厭かれる迄は、夫婦と同じだが、厭かれたら體一つで、どこへでも、飛んでゆく。その方が、結局、氣樂だ」

「併し、夫婦といふ事にして、その堅めだけは、してくれ、己れが、媒介を爲る」
「ハツハ、、、君は、ナカ／＼几帳面な男だな。媒介をして夫婦に、なるのもよいが、お床入は、もうすんで居るのだぞ」

「冗談は、それとして置いて、きまりだけは、つけて置け」

『さういふ譯なら、然るべくやつてくれ』
『實は、お辰から、頼まれたのだ』

『ふふーむ』

『抱の子供の手前もあるから、きまりだけは、つけて貰ひたい、といふもので、己の所へ、たのみに來たのだ』

『左様か、そりア、知らなかつた』

『だから、己れに、まかせてくれ』

『宜しい。まかせる』

遠藤は、土肥と、話合つて歸る。

その翌日は、いよく亭主と、いふことにして、料理屋の方へも、仲間のものへも、批露したので、土肥は、正式に、藝者屋の主人となつて、お辰の本夫と、いふ事に定まつた。

お辰は、土肥より一つの、年長であつた。容貌は、餘り美くはないが、藝は達者で、土地一番の、流行ッ妓であつた。

『お辰、おれも、稼ぎに出やう』

『え、何ですつて……』

『座敷へ、出て見やう』

不意の相談に、初めは反對したが、土肥の希望を、抑へ切れず、ついに承知した。萩江露八といふ、幫間が、堺の花柳界に、現はれた。

五

立派な男子が、藝妓の間に立つて、酒間の斡旋を、するばかりでなく唄もうたへば、踊りもして、人の機嫌を取繕らふのだから、實にむづかしい、職業である。

男藝者ともいへば、また、幫間ともいはれて、可なり、人から輕蔑され、卑しい職業として、取扱はれて居るが一概に、卑しいものとのみはいへぬ。

一國の大臣にも、幫間は、従いて居る。天下の富豪にも、幫間が、取巻いて居る。少しでも、實力を持つて、世間に立つて居るもの、左右には、必ず幫間の、一人や二人は、徒いて居るものだ。酒間の斡旋を、するものばかりが幫間ではなく、人の機嫌を取つて、一と仕事しやう、とするものは、みな幫間性を、有つて居る。他人のために、仕事の手傳ひをして、或一人を取り込まう、とするものは、一種の幫間であつて、幫間なくして、仕事の出来るものは果して幾人あるだらう。

それ等の人々は、いづれも幫間の、もぐりである。鑑札を持つて、私は幫間であります、といつて居るものは、立派な、一つの職業として、立つて居るものであるから、決して卑しむべきものではない。

尤も、同じ幫間にも、上中下の別はある。いかにも幫間らしく、下品なことを、平氣で、やつて居る奴もあるが、多くのうちには幫間らしくない、立派な幫間も居る。態度や、言語の末ばかりでなく、すべての取廻しの上に、それと知らさずして、幫間の役目を果たすが、本當の幫間である。

そんな、氣の利いたものは、今では、殆んど無くなつて、厭味な事をして、それを、幫間の能事と、心得て居るものが、多くなつたのは、歎かほしい事だ。

芳原の松の家露八が、世を逝つて以來、殆ど幫間らしいものは、東京に一人もない。その露八が、萩江露八の事である。

岳南自由黨の物語りに、露八の事を、なぜ長々と述べるかと、疑ふ人もあらうが、この事件には、深い關係のあつ

た、一人で、どうしても、その爲人は、一と通り、いふて置く必要があるのだ。静岡の國事事件と、幫間露八と、それに、何の因縁があるか。それは、追々に判つてゆく。

堺で賣出した、露八は、お辰との間に、氣不味ことが起つて、夫婦別れを、する事になり、同じ土地に、居るのも面白くない、と思つたので、大阪へ、乗出して来た。

大阪は、遊樂の地である。朝に夕に、酒と女で、日を送るの土地柄、花柳界の榮えて居ることは、日本第一であらう。

けれども、幫間を、酒席に侍らせて、粹な遊びに、一夕を送る、といった風のことには、あまり喜ばれぬ。昔も今も同じことで、只ガヤ／＼と騒いで、ベチャ／＼と、しゃべつて、卑猥な話に、興味を唆られるのが、その特色の如くなつて居る。

露八のやうに、一種の氣概を有つて、呼吸一つで、人を樂ませる、といった、遣方の幫間は、どうしても、歡迎されぬ。

酒間に入出して、見榮を張る稼業であるから、収入は少くても、服装は崩せず、交際にも、江戸ッ子の估券を思つて、瘦我慢をするので、いつか下義理の、借銭も多くなり、今は、大阪にも居難くなつて、東京へ引上げやう、と思つて居た處へ、親しい友人の音信があつて、慶喜公が、静岡へ移られた、ことが判つた。幕臣の多くは、公について、静岡へ移つたことも、はつきり判つたから、其處で、兎も角、静岡へ行く事にして、大阪を立退いた。

静岡へ、来て見ると、昔に變る、幕臣の境遇、多くは開墾事業に従つて、それ／＼に、活路を求めて見る状態は、只だ痛ましくのみ感じて、何をしやう、といふ氣もない。

久し振りで、江戸へ、歸つて来た。もう、東京と改まつて、何も彼も、みな新しく變つてゆく、ものばかりだ。それから十幾年、土肥の一身には、種々の浮沈もあつて、何といふことなく、自分の力が及ぶだけの事は、行つて

見たが、一つとして、成功したものはない。

其間に、大工棟梁の政吉夫婦が、土肥の蔭身になつて、よく盡して居たことは、土肥のために、この上もなき、頼み綱であつた。

舊幕臣の多くは、静岡の方面に居て、それ／＼職を求め、生活の基礎は、築いて居るが、三方ヶ原の開墾も、思つた程には成功せず、たゞ僅かに、金谷ヶ原の茶園丈は、頗る前途に望みあり、とされて居た。

中條金之助や荒井郁之助も、一時は、開墾の事に、従つて居た。山岡鐵太郎は、宮中に入つて、陛下の御前勤めをする。松平太郎は、裁判所へ出て、判事になつて居た。

表面は、四百廿萬石でも、實際の収入は、八百萬石と、いはれた程の、徳川家が、今は七十五萬石となつて、駿遠參の三州に、中位の大名として、何事にも、控目勝にせねばならず、慶喜は、全く隠居して、養子の田安龜之助が、當主となつて居るのだ。

それも、明治四年の廢藩置縣から、制度の改革で、昔の大名としての、權威はなく、少からぬ公債は貰つたが、澤山の家來を處分するにも、思つただけの手當は與へられず、豪奢を極めし、徳川家も、質素な生活を、しなければならなくなつた。従つて、家來の身の上は、哀れな境遇に、落ちたものが多く、それすら、充分の救済が、出来なかつたほどである。

はやく、見切りをつけて、榮辱を考へずに、身の方向を定めたものは、どうか、かうか、一家の生活は、支へ得たが、昔の格式をいふて威張つて、居たものは、大概ひどく、なつてしまつた。

一と頃、さかんに、流行つた、奥様鬘と稱する、新形を賣出した店は、人形町に在つたが、その主人といふのは、旗下の寺澤志摩守で、あつたことは、あまり知る人は、なからう。

上野の戦争で、勇名を唄はれた人が、女の鬘形を賣出すなぞ、ちよつと、面白い事では、ないか。

一日の事、土肥が、神田小川町の通りを、ぶら／＼やつて來ると、向ふから來た人が、急に足を停めて
「オイ、土肥ぢやないか」
と、いつて呼びかけた。

「ヤツ、山岡か」

「どうしたい」

「君こそ、どうしたか」

「どちらも、同じやうな事をいつて、手を取り合つて、しばらくは、後の詞も出なかつた。

「全くしばらくだつたな」

「十幾年に、なるよ」

「どうぢや、世間の變りやうは……」

「とても、お話しに、ならんほどぢや」

「此邊も、歩兵隊の舊跡ぢやが、あの時分は、御互に、肩で風を切つての勢ひを、示したものでぢやが、今では、振り返つて、見るものもないな」

「これも、時節で、致し方がないよ」

「君は、今、何をやつて居るのか」

「別に是れ、といふこともなく、人の家に、厄介者ぢや、ハッハ、、、、、」

「大きな體で、人の家に、厄介になつて居るのも、ずるぶん辛からう」

「うむ」

「静岡へでも來たら、どうか」

「君は、引つゞき静岡に、居るのか」

「左様だ」

「何をして、居るのかね」

「別に、これといつて、定まつた事もないが、今では伴が、代言人になつて居るので、まア幾らか、樂になつたのだ」

「飯でも食ひながら、話さうか」

「可からう」

六

今では、どういふ風に、變つたか知らぬが、その頃では、淡路町の中川といふ、牛屋が、東京でも、評判の良い方であつた。

神田から、本郷へかけて、學校が多く建てられた關係から、書生の町と、いつてもよい位、小川町の附近には、書生が多く居た。本郷の方は、何しろ、帝大といふ、呼物があり、神田明神の坂上には、濟生學舎と稱して、醫者をつくる學校があつて、お茶の水と、俗に謂はれて居る、神田川を挟んで、駿河臺から小川町の通りは、湯島の高臺に對抗して、書生が、幅を利かして居た。

本郷の方には、豊國と、恵智勝が、一番に流行つた牛屋で、神田では、どうしても、中川を第一位として、今文はずつと後のものと、覺えて居る。

「入らつしやい、ろの二番、お二人さん……」

渡される、下足札を持つて、土肥が先きに、二階へ通る。後から山岡が、尾いて行く。

「お誂へは……」
と、女中が聞く。

「ロースのあほりて、酒を熱くしてくれ」

「ハイ」

女中は、階子段の手摺に、もたれ乍ら、

「ろの二番さん、ロース臺で、二升ッ」

と呼ぶ。

何しろ、東京の牛屋は、景氣のよいものだ。

牛鍋が煮えはじめて、二三杯、熱いのを呑んでから、土肥は、先づ山岡に、尋ねるのであつた。

「今、ちよつと聞いたのだが、君の伴が、代言人になつた、といふのは、大きい方だらうな」

「イヤ、さうぢやない、弟の方だよ」

「へへ、あの音高とかいつて、いたづら小僧であつたが、弟の方かね」

「兄の昂三は、どうも學問を好かぬやうだし、氣分も高く、人の下位に、つくのが嫌ひで、暴れものになつてしまつ

たから、本人の思ふやうにさせて、音高の方へ、學問を仕込むのだ」

「そりア、何しろ樂みだな」

「幸ひ、代言人の免状を取つたから、今では、静岡に、開業して居るのだ」

「昔は、公事師といはれて、人に嫌はれたものだが、今では代言人といへば、大したものだ」

山岡は、伴の自慢で、盃の數を重ねる。土肥は、あまり呑まないから、多く酌の方に、廻つて居る。

「それにしても、未だ若いだらう。君の家へ、僕が行く頃は、乳を呑んでゐたからな」

「うむ、未だ二十歳を出たばかりだ」

「偉いな、君は幸福だ」

「それは、俺も、少し位の、貯蓄があるし、昂三も、この頃では、顔がよくなつて、いろ／＼の事をやるから、金に

なる事は、少くないやうだが、まア、人から立てられて居るやうに、なつたよ」

「兄弟が揃つて、出來のよいのは、いよく幸福と、いふものだ。僕なんぞは、相變らずの一人者で、どうにも仕や

うが、ないのだ」

「まア、一ぱい」

と、いつて、山岡は、土肥に獻した。

「時に、土肥ッ」

「何だ」

「どうぢや、静岡へ來ないか」

「僕の、やるやうな事が、あるかね」

「しばらくの間、音高の世話を、してくれないか」

「どんな事を、するのか」

「未だ無妻で居るから、家事の取締と、いつたやうなことを、たのみ度いのだ」

「どうせ、遊んで居る身だから、行つてもよいが、伴の氣に容るか、どうか判らないぜ」

「君の事を、おぢさんと、いつて居たのだから、矢張りおぢさんの格で、やつてくれ」

同じ旗下のうちでも、山岡景高と、土肥庄次郎は、殊に親善であつた。景高の方は、少し窮富な性質で、昔から士

格を、崩すまいとして、一たん言ひ出したことは、刀にかけても、跡へ退かぬ、といつた調子があつて、人に對して

の愛憎も、可成り強かつた。土肥は、武藝こそ、すぐれて居たが、その気性は、洒落にすぎ、融通の利く方であつた。

けれども、人間の交情は、下世話にいふ、合縁奇縁で、性質の、全く反對のものが、よく折合つて、水魚の交はりを持つこと、昔から其例も少からずある。

土肥と山岡は、則ち其れと同じく、互に能く心を知り合つて、性質に、異ふ所はあつても、兩人の交情は、恰も兄弟の如くであつた。

上野の戦ひがある時、小石川の山岡の屋敷は、一部の旗下が、密會の場所にして居た位で、土肥の彰義隊入りは、山岡が、仲に立つて、酒井宰輔と、話合つたのが、因であつた。

音高が、やうやく二つ三つの子供で『おぢチャン』と、いつては、土肥の膝に上るのを、土肥は『おう、音坊や』といひ乍ら、頭を撫でて、可愛がつたものだ。

その音高が、今では代言人になつて、静岡から、濱松へかけて、評判の利け者であつた。おぢチャンの土肥は、見る蔭もない、瘦浪人となつて、浮世の波に、漂うて居るのだ。

『それぢやア、行く事にしやうか』
『どうか、さうして、貰ひ度い』

『只だ、役に立つか、どうかと思つて、それが心配だ』
『君でも、そんな事を考へるやうに、なつたかな』

『追々の辭だ。僕も、昔の土肥ぢやない。それに、人間は零落すると、氣が小さくもなる、ハツハ、、、』
『其處で、君に、能く頼んで置く事は……』
といひ乍ら、山岡は、四邊を見廻した。

『件は、自由黨の一人に、なつて居るのだ』
『左様か。此頃の流行物で、政黨へ、はいつて居るのか』

『岳南自由黨の首領株で、ナカ／＼幅を利かして居るのだが、どういふものか、警察の方で、眼をつけて居るのだよ』
『はア、そりや、可笑しいな』

『俺も、政黨の事は、よく解らないが、自由黨は、薩長の藩閥に反對して、何でも構はず押倒してしまへ、といふのださうで、それがために、警察の方では、自由黨を、謀叛人同様に、視て居る。といふ事で、件が、岳南自由黨の首領株であるから、それで、何か目星を、つけて居るのだらう』

『そんな事は、ちつとも知らなかつたが、今の自由黨といふのは、そんな事を、考へて居るのか』
『左様だ』

『そりや、愉快だ。少しは手傳つてもよい。全體、薩長の奴等が、僕には、氣にくはないのだ』
『其處で、件の身の上について、君に、注意して居て貰はう、といふのだよ』

『うむ、可し、受合つた。そんな事情なら、こちらから、好んでも行く』
『併し、件の身に、間違ひのないやうに、深く注意をたのむが、煽りつけて、この上にはげしい事をされては困るか』

『宜しい、承知した』
『何日頃から、来てくれる』

『今から、直ぐ行かう』
『えッ、今から、直ぐに行く、といふのか』

『うむ』

「君は、相變らず氣樂だな」
「一人者は、いつでも、斯うだ」
「それぢや、飯にしやうか」
「よからう」
兩人は、食事をすませて、中川を出た。

七

静岡へ移つてから、土肥は、しばらく音高の家に居たが、どうも面白くない。代言人の支關番を、する歳でもなく、執事のやうな、氣の詰まる事は、元來が嫌ひであるし、さればといふて、遊んで居る身分でもないから、何か始めやうと、考へたが、これといふ、名案も出ないので、矢張り、道樂稼業の、幫間が、自分の性に、合つて居るばかりでなく、世間を茶にして、暮らすに限ると、考へて、鈴木に、その相談をはじめた。

「先生、少し相談が、ありますが、聞いて下さい」
「何かね」

「實は、私もかうして御厄介に、なつてるよりか、何でも、自分の性に合つたことを、やつて見たい、と思ふのです
が、どうでせう」

「全體、何をする氣かね」

「幫間を、やつて見たいのです」

「えッ、何だ、幫間だつて……」

「はア」

「そりやア、えらい事を、考へたものだな」

「私は、世間から捨てられてしまつた、人間で、眞面目に何かやらう、としても、人が、對手になつてもくれず、いつそ、幫間のやうなことをはじめ、私の方から、世間の人を、茶化して暮らし度い、と思つて、御相談をするのですが、御承知下さらぬか」

「我輩が、承知するも、せぬもない。君の體は、君が自由にすれば、よいのだ。けれども、我輩としては、どうも賛成しかねるから、もう一度、考へ直して見たら、どうかね」

「先生が、賛成しかねる、といふのは、どういふ譯でせう」

「君は、我輩の父と同僚で、昔は、チャキ／＼の旗下であつたのが、いかに何でも、幫間となることを、我輩に相談されたから、といふて、我輩は、賛成の出来る筈が、ないではないか」

「ハッ、、、、先生、旗下は驚きましたね」

「それに、違ひないぢやないか」

「併し、旗下は、疾くの昔、亡者になつてしまつたのです」

「どうしても、幫間になるといふのだね」

「先生は、幫間を、何う考へますか」

「男子のくせに、藝妓の眞似をして、人の機嫌を取つて、世を送る、といふのだから、あまり高尚な、稼業とは思へぬ」

「なる程、先生は、左様考へて居られるが、併し、私は立派な稼業だ、と思つて居ますよ」

「どうしてか」

「祝儀を出して、幫間を呼ぶものも、あまり利口とは、いへますまい。金を貰ひながら、對手を莫迦にして、世を送

る、と思つたら、幫間も、存外、良い商賣ですよ」

『それも、一理ある』

『つまりは、自分の心まで、幫間にならなければ可いので、私には、私の魂がありますから、まア、やらせて見て下さい』

と、氣を吐いて、さらに聲を、ひそめた。

『先生、例の一條について、役人の方の、秘密を知つたり、世間の評判を、聞き込むには、この商賣が、一番に良いのですよ』

『うむ、君はそこまで、考へて居て、くれるのか』

『景高君は、私に先生の後見を頼む、といはれたのです』

『ふふーむ』

父は、それまでに、心配して居てくれるか、と思つたら、さすがに、音高も、涙ぐまれるほど、嬉しかつた。

『それでは、父と相談して、くれたまへ』

『ちや、さうませう』

大望を抱いて、秘密の仕事をやつて居る、鈴木のためには、どうしても、一人のスパイが、入用である。土肥はその役目に當らう、といふのであつた。

堺の時と、同じ名、萩江露八と稱して、静岡の、花柳界へ乗出すと、忽ちにして、評判になつた。

幫間である、といつた風を、少しも顯はさずに、たゞ視れば、生真面目な大入道で、その一言一行は、すべての人の腹を扶る。祝儀を貰へば、頭は下げるが、自分から、進んで物を欲しがらうな、卑しい事は、少しも無く、恬淡無慾、滑稽洒脱、それを、その儘に、人間の形にしたものが、露八であつた。

苟くも、紳士の集まる、酒席に、彼の頭を見ざることもなく、果ては、良家の奥、深く立入つて、嫁取り、婿入りの世話まで、するやうになつた。

三遊亭圓朝の妻であつた何某——私も親しくして居たが、どうしても、其名を思ひ出せぬ——圓朝に別かれて、この地に、左棲を取つて居たのと、いつか深い交情となり、終に夫婦に、なつてしまつた。

今日は、鈴木の家で、新年の小宴が催されて、集まつて来るものは、自由黨のうちでも、鈴木と最も、親しいものはかりだ。露八は、酒間の斡旋役で、藝妓を相手に、奇抜な、警句を吐きつゝ、しきりに働いて居る。

『オイ、湊ッ』

『何だ』

『どうも、面白くないな』

『うむ』

話しかける、鈴木の詞は、外のものに、意味が解らぬ。それを受けて答へる、湊の生返事も、聞いて居るものには變に思はれた。

『大概にして打切るか、それともに、進んで、一と思ひにやるか、どつちかに定めぬと、意外の破綻を、引起すかも知れぬぞ』

『左様だね』

『よく考へて見てくれ』

『打切ることは出来ぬが、何とか道を開くことは、考へる必要があらう』

所へ、露八が、大きい體を、藝妓の間へ割込んで、

『へー、お酌を……』

といつて、徳利を取上げた。

「オイ、坊主ッ」

鈴木は、露八を、坊主と呼んで居た。

「へい」

「跡で、この間の話を、湊に聞かせて置いてくれ」

「例の一件ですか」

左の掌を廣げて右の人差指を出す。これが、警察署とか、探偵とか、いふことの符牒に、なつて居たのだ。

「その事だ」

「宜しい、承知しました」

玄關番の書生が、バタ／＼足音をさせながら、廊下を廻つて、鈴木の背後へ來た。

「眞野先生が、見えました」

「何ッ、眞野眞然か」

「ハイ」

「可矣、こちらへ通せ」

書生の去つた跡で、鈴木は、列席の人々に向つて、

「眞野が來た、といふから、この席へ通せといつてやつた。諸君にも、不同意は、あるまい」

一同は、軽く首肯いて、同意を表した。

今、此處へ、やつて來た、眞野。それは、どういふ人物か、といふに、この人は、練武館と稱する道場を開いて、武術を教へて居るのであつた。

劍術は、直眞影で、槍は、山本無邊流、柔術は、眞の神刀流であつた。本宅は、藤枝に持つてゐたが、道場を、靜岡に、開いて居たので、大概は、道場の方に、泊つて居るのであつた。

人爲は、極く物堅い方で、昔の士族肌そのまゝの人物であつた。

露八とは、武術の方で、親しくして居たが、鈴木との交際は、可なり古くからで、自分の身に、ついでこのことは、すべて、鈴木と相談して居たのである。

八

藤枝から乗出して、靜岡へ、練武館を、創設する時分にも、鈴木の力で、少からぬ金を集めた、關係があり、眞野は、鈴木に對して、深く恩義を、感じて居た。

一座の人々も、眞野を、知つて居るので、その同席は、拒まなかつた。けれども、眞野は自由黨員でなかつたし、政黨運動には、あまり興味を、有つて居なかつたから、政治的關係は、このうちの、何人とも無かつたのである。

「やア、眞野君」

鈴木に、聲をかけられて、眞野は、一同に挨拶して、席に就いた。

それから、さらに、盃は巡る。酔ひが出て、氣焔を吐くものも、多くなつて來た。談ずる所は、すべて政界の事であつた。反對黨を罵り、政府を非難して、政治の刷新を、論ずるものがあると、眞野は、そのものに向つて、

「議論は誰でもするが、議論して居るばかりで、政治の刷新が出来やうか」

と、冷靜の氣味で、眞野が問ひかけたのを、鈴木が抑へて、

「君には、政界の事は判るまいから、武術の話でも、したらどうだ」

嚙んで吐き出すやうに、一喝されたので、眞野は、膝を乗出した。

「そ、そりや、怪しからん。鈴木先生にも、似合はぬことをいはれる。僕も、日本國民である以上、政治の事位は判ります」

「左様か。判るかね」

「判ります」

「どういふ風に判つて居る」

「薩長專横の政治と思ひます」

「アツハ、、、、薩長二藩が、徳川幕府を、倒したからだらう」

「冗談いつちやいけない。僕は、眞劍に、左様思つて居るのだ」

「思ふだけの事なら、誰でも思ふだらうが、どうしたら可いか、といふことを、いはなければ、議論にはなるまい」

眞野が、一同を冷嘲しかけたのを、今度は、鈴木がやり返へしたので、一同は、留飲の下つた心地がして、互に顔を見合せ、微笑を漏らした。

「僕は、日本人を、頼み少ない國民だ、といふことを看抜いたから、いつそ、アメリカへ送籍の願ひを出さう、と思つて居るのだ」

これを聞くと、湊が笑ひ出した。

「ハツハ、、、、何だ、眞野君は、弱い男だな。アメリカへ逃げ出すのか」

「イヤ、逃げるのぢやない」

「君は、今迄に政治運動を、仕たことはあるまい。自分は、何もせずに居て、人の爲すことを、嘲罵するのが、國民の能事でもあるまいから、まア、君も、一と通りは、政治運動を、やつて見る、がよいと思ふ。やるだけ、やつて見て、それでも、不可ない時は、アメリカへでも、ロシアへでも、飛んでゆくのも、よからうが、一人で憤慨して

居た所で、何の甲斐もなからうぢやないか。君は、宜しく自由黨に入るべしだ」

「自由黨の壯士に、果してどれだけの事が出来るだらうか」

「そりや、入黨して見なければ、判るまい」

「僕は、自由黨の壯士、頼むに足らず、と思つて居る」

「君が、思つて居るやうなものぢやない。一死以て國家に殉ずるの、壯士は、雲の如く、集まつて居るのだ」

「議論ばかりして、居るぢやないか」

「君には、未だ判らないのだ」

この時、鈴木は、湊の袖を引いて、それとなく抑へた。

「さア、唄つたり」

といつて、露八が、粹な聲で唄ひはじめた。

眞野が、アメリカへ送籍する、といつたのは、珍らしい事のやうに聞えるが、實は、餘り珍らしいことではなかつた。

その前に、日本脱管屈と、いふのを出して、問題になつた、人がある。

「日本の國內に居て、日本政府の支配を受けず、自由に、やつて行かう」

と、いふのであるから、可なり、蟲のよい希望で、政府は、そんな事を、認める筈もなく、書面は却下して、しまつたが、一時は、左様した事が、流行つたものだ。

眞野も、その流行りを逐ふて、こんな事を、いひ出したのであらうが、實は、政府に不満の餘りに、考へた事で、眞野ばかりでなく、誰でも、そんな事は、能くいふたものである。

薩長二藩の武力で、制服された藩の士族は、どこまでも、政府に、不快の念は、有つて居たので、その連中は、政

府に反對と、さへ聞けば、喜んで仲間入りをしたのが、一般の状勢であつた。

家祿奉還の結果、公債證書は、下げ渡されたが、それは、一時の衣食の料で、ぢきに無くなつてしまつたから、その後は、生活難に、苦しんで居たのが、舊藩の士族であつた。

眞野も、左様した境遇の一人で、同病相憐れむ、士族の仲間を誘つて、地所拂下の出願をしたのが、その筋から斥けられたので、ます／＼政府に、反感を有つやうに、なつて来た。

平生から、さうした、感情を、有つて居るので、やゝもすれば、政府を非難する、と同時に、自由黨の、やつて居る事が、何となく、手緩く見えてならぬから、この晩の宴會でも、自由黨の壯士を、ちよつと、嘲けつて見る、といつた調子も、出て来るのであつた。

それを、鈴木に逆襲されて、今度は反對に、眞野が、冷嘲されたので、折角の酒宴も、理窟に落て、甚だ不快なものに、なつてしまつた。

才人の湊が、この狀況を視て、

『もう、止さうぢやないか。かういふ席で、お互に、理窟を列べた所で、おさまらない、と思ふから、いつそ、面白く飲んで、愉快に語らうぢやないか』

と、いひ出したので、主人側の鈴木も、やうやく氣が付いて、

『左様だ／＼、こりや、我輩が良くなかつた。眞野が何といつても、我輩が、對手にならなけりや、よかつたのだ。湊のいふ通り、今夜は、新年宴會と、いふのだから、變な理窟をいつて、争ふことは止めやう』

眞野も、額を抑へて、

『イヤ、僕が悪かつた、いはゞ飛入りの僕が、跡から、やつて来て、諸君の氣に、觸るやうな事をいつたのは、全く宜しくなかつたから、もう何事もいはぬ』

これで、理窟はおさまり、藝妓と、露入の周旋で、賑やかに飲みはじめた。夜もふけて、十二時近く、眞野は、鈴木の家を出て、足を千鳥に、やつて来たのが、呉服町三丁目の柳瀬といふ、時計屋の前であつた。

『オイ、眞野君』

といつて、暗い所から、ぬつと、出て来たのが、湊であつた。

『ヤツ、湊君か』

『うむ』

『君は、跡へ残つた筈であつたが、どうして、こんな所へ、出て来たのか』

『實は、君の跡を、追ひかけて来たのだ』

『ははア、どういふ事かね』

『少し話もあるが、君と、大に飲まう、と思つて、来たのだ』

『君は、丸での下戸ぢやないか』

『うむ、左様ぢやツた』

『その君が、大に飲まう、といふのは、少し可笑しいぢや、ないか』

『それぢや、大に食ふことに、しやう』

九

湊の父は、新八郎と謂ふて、江戸時代には、講武所の劍術師範を勤めた、一人である。はやく父を亡ふて、母の手に、人と成り、妹のお廣と、三人生活であつた。

維新の變に逢ふて、父は、静岡へ移り、それから、相當に苦勞もしたが、多少の貯蓄の、有つた所から、あまり貧しくは、なかつた。

父は、武術家であつたが、伴の省太郎は、天性の虚弱で、小さい時分から、病勝ちで、日を送つた。そのうちに、父は、世を逃つて、省太郎は、母の手一つで、育て上げられたが、才人肌の省太郎は、學校の成績もよく、充分の教育をしたら、本人の爲めには可い、とは思つたけれど、肝腎の稼人に、先立たれたので、學校も、中途で廢めさせて、しまつた。

鈴木と湊は、先代が、同じ幕臣であつた、といふ關係から、深い親しみがあり、鈴木の方は、父が、長く生きて居たし、自分も代言人として、名を成すに至つたから、内輪も、左まで苦しくなかつたので、いつも湊を、保護してゐた。

兩人の性格は、非常に違つてゐたが、それでも、交情は、恰も管鮑の如くであつた。火のやうな氣性の、鈴木と、水のやうな性質の、湊と、よく親しく出来る、といつて、同志の間でも、可怪しく思つた、位である。

辭の、若いに似合はず、沈着の風があつて、平生は、口數も少く、何時でも、考へて居る、といつた様子、鈴木が、疝癢を起して、ギャン／＼いひながら、論じかけてゆくのを、ニヤ／＼笑つて、受流してしまふのが、常例の如く、なつて居た。

それであるから、兩人の間に衝突する、といふ事は、絶へて無く、最後には、鈴木の方から、折れてゆくやうになる。平生は、多く沈黙して居るが、一たび演壇に立つと、雄辯滔滔、擒縱自在、驚くべく、鋭利な、舌の持主であつて、著者が、四十年來の経験から觀て、湊ほどの雄辯家は、多く知らないのである。

正則の教育は、受けて居らないが、文章も巧であり、東海曉鐘新報の紙上に、湊の書いたものが出ると、いつでも評判になつて、讀者を引付ける力は、第一番であつた。

色の黒い、平顔の男で、容貌は、好くなかつたが、女には、氣受けがよく、湊のために入りあげて、土地を賣つた、藝妓も一二、あつたことを、知つて居る。

静岡の遊廓は、昔から有名なもので、駿府の二丁町といへば、誰知らぬものもない位であつた。

京の島原、長崎の丸山、江戸の吉原、それに、比す可きほどの物ではないが、人の噂に上つた、二丁町は、兎に角、大したものであつた。

その遊廓に、代表的大樓として、蓬萊屋と、小松屋の二軒があつた。吉原の大樓と、同じ格式を逐ふて、威張つて居た。

小松屋の、看板女郎となつて、お職を張り通したのが、大里と稱する、遊女であつた。その全盛は、廓内を壓して、肩を並べるものは、蓬萊屋の可視を除いて、他に一人も無かつた。

可視は、鈴木の馴染で、大里は、湊を情人として、向へて居た。可視は、物靜かな、優しい女で、大里は、傳法肌のお依であつた。

眞野を連れて、湊は、小松屋の暖簾を潜つた。その姿を見ると、店のものは、小腰を屈め、搦手をしながら、『入らつしやい』

と、大きな聲で叫ぶ。それを、聞き流すやうにして、幅の廣い階子を、トン／＼と、駈け上る。

二階には、樓婢の聲がして、『大里さんの、花魁……』

と喧ましく呼び立てる。昔の志士と稱する、連中は、多く遊女買をしたもので、今のやうに、待合入りやらなかつた。殊に、維新當時の

志士は、すべて左様であつたやうに、聞いて居る。

それだけに、遊びも淡泊であり、大概の秘密は、遊女屋の二階で、相談されたものである。藝妓や幫間は、大騒ぎを、やつて居る。その隣室には、燈火を消して、同志のものが集まり、こっそりと、打合せをするのだから、幕府が密偵も、容易に、秘密を聞き出す事が、出来なかつた。

酒を飲み、色を漁ることも、或は目的の一つで、あつたかも知れないが、本来の目的は、秘密の會合に、遊女屋が用ゐられたことも、決して偽はりではなかつた。

それ等の人が、明治政府の大官に、なつてからは、遊女屋へゆくものは、追々に少くなつて、新橋や柳橋へ、流れ込むやうになり、しきりに女色を、漁る所から、今の如く、待合遊びが、さかんになつて、来たのである。

不見轉なる、熟字が、新聞を賑すやうに、なつたのも、實は、それからの事であつて、花柳界の調子も非常に變つて来た。

それにしても、政黨の勃興した頃には、未だ昔の、名残りはあつて、天下の志士を以て、自ら任ずる、人々の遊びが、多く遊廓で、あつたのを視て、著者は、面白い事だと思つた。

賣れつ妓の大里は、金の切れ放れも、綺麗であつたから、樓婢や、妓夫の間にも氣受は、すこぶる良かつた。

長い廊下を、重ね草履の音高く、引付け座敷の前まで、遣つて来た、大里は、息をはずませながら、

「お客さんは、誰人……」

と、樓婢に尋ねる。

「花魁、おごつて頂戴な」

「あら、省さんの？」

「オヤ、よく判りますね」

「だつて、わたしの胸に、ちゃんと、映つて来るんですもの、オホ、……」

「御馳走さまですね」

「後に澤山おごりますよ」

「どうぞ……」

大里は、忙しさに、座敷へはいつた。湊の傍には、知らぬ人が、むづかしい顔をして、控て居るので、は、と、思ひながら、

「省さん、しばらくね」

「冗談いつちやいけない。一昨日の晩来て、すぐ今夜ぢやないか、しばらくのことは、ありやアしない」

「あんな、憎らしい事を、いつてさ、一ト晩來なけりや、しばらくですわ」

「一年も來なけりや、どういふのだ？」

「あら、一年も來ない、つもりなの？」

「どうだか、判らない」

「省さん、ひどわ」

といつて、湊の肩を打つ。

これを見て居る、眞野は驚いた。鈴木や湊が、足しげく遊廓へ入込む、とは聞いて居たが、これほどの事とは思はなかつたので、兩人の痴話を、少からず不快に感じた。

「オイ湊君、どうするつもりだ」

「イヤ、失敬した」

「餘りだしが、ないぢやないか」

眞野が、生眞面目にいふので、さすがに、湊も弱つた。物堅い男で、かういふ所へは、絶えて立ち入らぬ、といふことは、かねて知つて居たが、それにしても、野暮すぎると思つた。大里は、少しづつが悪い、と感じたか、外の座敷へ廻る、といつて、出て行く。

湊は、四邊を見廻して、

『秘密に、話したいことがあつて、君を、こんな所へ、連れて來たのだが、どうか、恕してくれ給へ』

『どういふ事か、聞かう』

『實は、かういふ次第だ』

と、湊は、聲をひそめて、語りはじめた。

一〇

『吾々は今、ひそかに、計畫して居る事があつて、それ／＼に、同志を集めて居るのだが、君にも加盟して、貰ひ度いのだ。その計畫は、政府を倒してしまふ、といふので、可成りに、計畫は、進んで居るが、君のやうな人物に、同意して貰つたら、吾人も、頗る心強くなるのだが、どうだらう』

『政府顛覆の陰謀を、事も無げに、いひ出したのには、眞野も、頗る驚いた。』

『大い事を、考へて居たのだね』

『政府の大官が、國家を無視して、不都合な事ばかり、働いて居るから、いッそ、ぶつ倒してしまふ、といふので、理窟をいへば、種々あるけれど、君に向つて、そんな諄々しいことは、いふ必要もなからう。君にしても、今の薩長政府には、不平不満があるだらうから、ぜひ同意して、仲間へ、はいつてくれたまへ』

『鈴木君始め、廿人位は居るが、いよ／＼と、いふ時には、君の如き、武術に達した、人物を要するので、實は苦しんで、居る所なのだが、今晚の席で、君のいふ所を聞いて、君の心事も、ほど推察し得たから、君の歸る跡から逐ひかけて、こゝまで案内した譯なのだ』

『政府を顛覆する、といつても、それには、種々の手段もあらうが、全體、どういふ事をせう、といふのか、それを、打明けてくれぬか』

『その手段としては、擧兵と暗殺の二つに、なつて居るが、今の所、擧兵を決して、準備を、急いで居るのだ』

『正々堂々とやるのには、擧兵の方が、男らしくていゝが、それには、人數も、多く要するし、第一に、金がなければ、いかんのだが、その金は、どういふ事に、なつて居るか』

『さ、その金には、同志も、苦心して居るが、思ふやうに集まらないから、非常手段に訴へやう、といふ話もあつて、これは、未だ決して居ないのだが、いづれ行るやうに、なるだらう』

『非常手段と、いふのは……』

『切り取り、強盗は、武士の習ひ、といふ諺もあるから、いつそ、やつつけやうか、といふ説があるのだ』

『それは、容易ならぬ事だ。僕は、その點については、反對する。併し、君の今いふた、政府顛覆には、飽くまで同意する事にしよう』

『さうか、君に、同意して貰へば、百萬の味方を、得たやうなものだ』

『大した事も出来ないが、まあ、手傳へるだけは、やつて見る氣だ』

『明日にも、改めて鈴木に逢つて、よく打合せて、貰ひ度い』

『よろしい、承知した。併し、湊君、擧兵暗殺の、いづれかにする、といふことは、はやく定めて置かなければ、いかんよ。かういふことは、最初に定めてかゝらぬ、と、意外の失敗を、遂げる事に、なるものだ。擧兵についての』

準備と、暗殺についての用意とは、自ら相違のあるものだから、計畫を立てる初めに、いづれの道を取るか、といふことは、定めて置くべきであつた。今からでも、遅くはあるまいから、早速に定めたら、どうかと思ふ』

『いかにも道理だ。その點については、鈴木に逢つて、よく話してくれ』

『いづれ、相談して見よう』

『火の中へでも、飛び込むものは、いくらもあるが、さういふことについて、深い思慮を、有つ人物が、少いので困つて居るのだ』

『どうだ、深浦を、引つ張り込んだら……』

『深浦ッて……』

『藤太郎さ』

『そりやア、いゝな、ぜひ引ッ張り込んで、くれたまへ』

一一一

深浦藤太郎は、鈴木に並んで、評判の代言人であつた。はやく自由黨に入つて、演説會にも、大概は、出席して居る。湊も、深浦の爲人は、よく知つて居るから、眞野のいふことを聞いて、すぐ賛成したのである。

『其處で、湊君』

『うむ』

『僕の、意見を、君にいふて置く』

『どういふことか』

『僕は、第一の手段たる、暗殺の方で進まう、といふのだ』

『成るほど』

『擧兵なんと、いつても、それは、徒らに勞して、結果は、失敗に了るのが、落ちだ。今の時節に、五十人や、百人の同志を集めて、何が出来るものか。それよりは、小人数でやるのは、暗殺に限る。僕は、擧兵といふことになれば、反對するが、暗殺と定まつたら、充分の決心を以て、参加するつもりだ』

『君のいふ通り、それに違ひない。擧兵は、むづかしい、と思つて居る。併し、最初から、それでかゝつて來たのだから、今、これを變更するとなれば、どうしても、同志の會合で、充分論じた末でなければ、輕々しく變更するとは出来ない。君のやうな、新しく加盟した人から、大にいふて貰ふ外は、ないのだ』

『話は、この位にして置かうか』

『もう、この上に、話す事もないから、ゆつくり、遊んで行かう』

『時に、湊君』

『何だ』

『君等は、しきりに遊ぶさうだが、そりや良くないぜ、少し慎んだら、いゝだらう』

『大した事でもない。時々、來るのだ』

『左様では、ないらしいぜ、さつきの様子では、大分、おなじみらしいからな』

『あの位の事は、何でもないよ』

『僕は、どうも面白くない、と思つた』

『君は、堅い人だから、そんな事をいふが、まあ、恕してくれたまへ』

『鈴木君も、蓬萊屋へ行く、といふことだね』

『うむ』

「かういふ、計畫をして居るものが、あまり遊んでは、いけない」
「まア、それは、他日、聞く事にして、今夜は、恕してくれ」
湊は、手を拍つて、樓嬢を呼んだ。

「もう、御相談は、すみませしたのですか」
と、いひながら、樓嬢は、座敷へ、はいつて来た。

「うむ、兩人ながら、酒を飲まいのだから、うまい物を、持つて来て、貰ひ度い」
「かしこまりました。こちらの旦那様へ、お相方を、どういたしませう」
「さうだね」

湊は、眞野の顔を見た。

「まア、さういはずと、どうです」

「イヤ、そんなものは、邪魔になつて、いかん」
樓嬢は、眼を圓くして、

「そんなものとは、ひどいぢやありませんか、兎に角、誰か見立てる事に、いたしませう」
「オイ、冗談ぢやない。僕は、必要がないのだから、平に御免蒙る」

「だつて、旦那……」

「何でも要らん、といふのだ」

眞野の詞が荒かつたので、樓嬢は、驚いてしまった。

「それでは、眞野君にな、一人で寝て貰はう。もし寂しいだらう、と察したら、お前が、泊りにゆく事に、しなさい」
「わたしは、眞ツ平ですよ。こんな、怖い御方は、始めてですもの……此家へ来て、女は要らないなんて、變ですわね」

ね」

「泊りに、行かなくツても、よいから、誰でも、眞野君へ、定めて置け」

「ハイ」

政府の方から視れば、自由黨員の全體が、みな過激の如く、思はれて居たので、その取締に就いて、一樣に、きびしかつたのである。けれども、党内の實情からいへば、過激派の、二つに別れて、常に争つて居たのだから、面白い。この時分の自由黨は、二つの敵を、有つて居た。一つは政府であつて、他の一つは、立憲改進黨であつた。改進黨の主張は、左迄に異つて居ないのだが、感情の上から、ひどく反目して、居て、事毎に、争つて居たのである。

政府が、自由黨を、謀叛人の集合、と視て、嚴びしい、壓迫を加へるばかりでなく、地方へ宣傳するのに、「火附、泥棒、自由黨」なる標語を用ゐて、極力、これを抑へ付けやう、と謀つた。それを利用して、改進黨も、亦、自由黨を呼ぶに「疎暴過激派」を以てし、盛んに讒誣中傷をやつたものだ。

其處で、自由黨は、この二つの敵に向つて、逆襲的に、突進してゆくから、その争ひは、日を遂ふて、はげしくなり、今から、想像し得ぬほど、相互の反感は、甚だしいものであつた。

改進黨は、明治十五年に組織されたもので、その重立ちたる人々は、長く官吏を、やつて居たから、どこことなく、官具を帯びて、變に氣取つたものばかりであつた。

それと違つて、自由黨の方は、舊藩の士族と、郡村における、中農以下の人と、それは、中央の論客を、加へたものであるから、どこ迄も、野人の風があり、志士の氣分に充ちた人が、多く居たので、改進黨との折合は、どうしても、悪かつたのである。

併しながら、自由黨が、正面の敵として、長く闘つて来たのは、矢張り、薩長藩閥の、政治家であるから、はやく政府を、ぶつ倒してしまはう、といふのが、本來の目的であつた。

政府の大官にしても、改進黨に對しては、餘り恐れて居なかつたらしいが、自由黨のうちには、決死の志士が多くあるので、これを恐れる事は、よほど深いものがあつて、暗に過激派のものに、對してばかりでなく、溫和派の人々に向つても、下斷の壓迫は、加へて居たのである。

明治十六年の秋、東京の本部において、黨員の集會が催された。全國に涉つた、代表的のものが、集まつて來て、黨の將來や、對政府策に就て、その打合せをしよう、とするのであつた。

静岡の方面からは、十數名の出席であつたが、過激派と目されるものは、鈴木音高、湊省太郎、村上佐一郎、廣瀬重雄等の數名であつた。

『政府の壓制は、日一日と、ひどくなつてゆくが、これに對して、我黨は、如何なる手段に依り、對抗してゆくのがよいか』

といふのが、第一の案であつた。

これに對する、溫和派の主張は、どうといふに、

『明治廿三年には、議會が開けるのであるから、それまでは、陰忍自重して居るがよい。議會の開けた場合には、一舉にして、政府を、倒し得る見込みもあり、その準備としては、味方を、多く求める必要上、まず／＼言論を、さかんにして、政府の稅政を、攻撃することに努めやう』

と、いふのであつた。

『漸進論者は、緩溫い事を、いふて居るが、現在の状態で、二十三年を迎へる事が、果して有利か、どうか、といふことは、大いに考ふべきだ、と思ふ。諸君が、いかに陰忍自重しよう、としても、政府の壓制が、昨今の如く、なつて來ては、黨勢の擴張も、出來ないではないか。言論の自由は、絶対に無いのであるから、言論に依る運動は、もはや斷念める外はない。吾人は、一大決心を以て、この難關を踏破る、覺悟を要するのである』

過激派は、かういふ論鋒で、板垣總理に迫つた。

一一一

本部の幹事は、加藤平四郎と、宮部襄の、兩人であつた。

加藤は、岡山縣の先輩として、極く溫和な人であつた。今の犬養木堂が、未だ慶應義塾に居る時分、加藤は、國會請願者の總代として、乗出して來たほどに、古い有志家であるが、昨今では、政友會の院外團長として、猶ほ活動をつゞけて居る。曾ては静岡、山梨の縣知事も勤め、甲府市長としては、水道の完成を名残りに、職を辭したのである。齡は、もう七十八になつて、未だに國事に、努めて居るのは、まことに、珍らしい人だ。

宮部は、高崎の生れで、漢學仕込みの硬骨漢。どこことなく、趣味のある人ではあつたが、ナカ／＼才智に、富んで居て、奇策縱横、容易に、端睨することの出來ぬ、一種の才人であつた。演壇に立つことはしなかつたが、坐談は、實に巧いもので、血氣の壯士を取扱はせたら、黨内第一であつた。

この兩人が、板垣の左右に、從いて居たので、板垣は、何事についても、兩人を、相談對手にして居た。硬軟二派に別れて、議論が、頗る面倒に、なつて來たので、宮部は、板垣に耳語いた。板垣は、振返つて、加藤の顔を見るとき、加藤が、軽く首肯したので、やがて、板垣は立ち上つた。

『諸君が、國家を想ふ熱誠から、互に論争せらるゝことは、實に敬服して居る所であるが、その争ひには、少しでも感情を、加へぬやうにして欲しい。』

政府が、我黨に對して、甚だしい壓迫を加へることは、諸君の、いはれる通りであるが、それは、初めから覺悟して居た事であつて、今更に、これを喋々するのは、却て我黨の諸君が、平生における不用意を發表するやうなもので、甚だ面白くないと思ふ。

いかに、政府が、壓制を以て臨むも、我黨の諸君が、充分の覺悟を以て、これに當れば、宜しいのである。一時の感情に依つて、過激な手段に訴へることは、御互に慎まなければならぬ。要するに、今日は我黨の諸君が、陰忍自重する、と同時に、ます／＼結束を堅うして、政府及反對黨に向つて、勇往邁進すべき時である、と信する。硬軟二説があつて、これが爲に、感情の争ひをすることは、深く慎んで、政府及び反對黨に笑はれぬやう、各自において、心がけるのが肝要である。

我黨の内部が、よく調和してゆけば、それだけ、力は強くなり、政府及び反對黨は、大に脅威を感じる次第であるから、諸君は、どこまでも、議論は闘はしても、よいが、徒らに感情に走らぬやう、大に注意されんことを、望む次第である」

黨の總理としては、これより外に、いひやうは、なかつたであらう。併し、言外に、板垣の意見は、微見えて居た。要するに、板垣も、漸進主義を以て、どこまでも進まう、といふのであつた。

さすがに、水を打つたやうになつて、一座は、寂としてゐたが、鈴木は立つて、板垣に質問の一矢を放つた。

『總理の御訓戒は、われ等の、大いに服膺すべきことであるが、さればとて、徒らに泰平を謳歌して、事勿れ主義を執る譯にもならぬ。政府の壓制は、今や極度に及んで居るが、われ等は、いかなる壓制を受けても、これに堪へ忍べ、と、いふのでありますか。また、一部の論者は、言論を以て對抗せよ、といはれて居るが、政府は、その言論に對して、無限の壓迫を、加へて居るではないか。言論の自由を、有せざるものに向つて、言論を以て闘へ、といふのは、いかなる次第であるか。我等には、その眞意の存する所が、判らない。

總理は、我等に對して、どうしろといはれるのであるか、はつきりと、進むべき道を、教へて貰ひ度いのである』と、さすがに、鈴木は、何の恐れる所もなく、板垣に、詰め寄り、一座を睥睨して、意氣昂然たるものがあつた。

その頃の、自由黨には、星亨と、大井憲太郎が居て、大抵な事に、處理されてゆくのであつたが、かういふ問題に

なると、あまり立ち入つて、世話もやけぬから、ある程度までは、傍觀して居る外は、なかつた。

片岡健吉は、多く土佐に居て、河野廣中は、監獄にはいつて居た。大井の勢力は、非常に強いものであつたが、板垣の洋行事件から、星の力が、少しづつ、はいつて来て、今では大井と、肩をならべるやうになつた。

その以前には、馬場辰猪、末廣重恭、大石正巳の三人も居たが、この時は、既に脱黨してしまつて、黨に、關係は無かつた。

大井の急進主義は、誰も皆知つて居るが、星も、それに劣らぬ、急進論を、唱へて居た。幹事のうちに、矢張り二派あつて、加藤は、漸進派として、板垣を援け、宮部は、急進派として、板垣を、引付けやう、として居たのである。

同じ位の人物でも、中央に常佳して居るものと、地方に引込んで居るものとは、格段の相違があつて、社會的にその位地も違ふのだから、實に變なものだ。

本部に於ての取扱ひも、世間から見ると、ぐつと違つて、地方の人物は、どうしても、田舎者扱ひにされるので動もすると、その不平で、ごたつく事があつた。

鈴木の爲人や、學識辯舌は、優に黨の幹事としても、耻かしからぬほどであつたが、静岡支部の人だと、いふことに依つて、幾分は、軽くも、視られて居たのだ。

然るに、神の如く、崇敬して居る、板垣總理に向つて、鈴木が、恰も詰問するが如き、態度を以て論じかけた、といふ所から、座中の空氣は、頗る険しくなつて來た。

『鈴木君、もうよいではないか』

と、いふものがあつた。

『天下國家を論ずるものが、もうよいではないか、とは怪しからぬ。苟くも議論をはじめた以上、行き當るまで行く』

のが、當然である。たとへ、總理の言といへど、腑に落ちぬことは、飽までも糺してかゝるのが、黨員たるもの、
本來の精神である。

我輩等の同志は、一身を抛出して國家に盡さう、といふのである。犬の遠吠にひとしき、生温い言論の力にのみ依
頼して、その日を送らう、とするのではない。

敢て事々しく、例を引くまでもないが、どこの國にしても、政治上に、大なる革新を行はう、とする場合には、み
な血の雨を降らして居るのだ。

吾人は、陰忍するだけ陰忍し、自重するだけ自重して來たのであるが、もはや、陰忍自重し得ぬ時になつたから、
かくいふのである。

諸君、我輩は……」
「もうよろしい、解つた〜」

「どう解つた、といふのか、誰だ、今解つたといふのは……」
「解つたから解つた、といふのだ」

「何を……」
事は、頗る面倒になつて來た。
板垣は、しづかに立つて、鈴木を制した。

「鈴木君の憤慨せらるゝのも、一應は道理であるが、そこを猶忍ぶのが、則ち自重である。まア、我輩に、まかせて
くれまいか」

「總理は、何をまかせろ、といはれるのですか」
「鈴木君は、我輩を信ぜぬ、といふのか」

「イヤ、左様ではない」
「然らば、まかせてくれたまへ」

「何をまかせろ、といふのですか、それを、聞いて居るのです」
これを機會に、加藤と宮部が、鈴木を抑へつけて、とに角席につかせてしまつた。

集會は、これで散する事になり、それ〜に、連れを求めて、歸つてゆく。鈴木も、同志と共に、戶外へ出た。

一一一

京橋の八官町に、北田正董といふ、代言人が居た。ボアソナードの門人で、その頃には、評判の人であつた。

司法省御雇フランス人、ボアソナード博士といつたら、明治十四年から實施された、刑法を、つくつた人として、
法律の神様のやうに、いはれた。

北田は、その門人であつた、といふので、大した法律家として、多くの人から、尊敬をうけたものだ。

序に、ボアソナードの事も、ちよつと、いふて置き度い。此人は、明治廿年の、井上條約に反對して、我政府に意
見書を提出したので、ひどく忌がられた末、解雇されてしまつた。井上條約のうちに、

「民刑の事件が、外國人に關係ある時は、外國の裁判官を立會はせて、審判する」と、いふことがあつた。

是れは「治外法權を撤廢して、領事裁判の制度が代るため、日本の法律が完成する迄」といふ事には、なつて居た
が、ボアソナードは、之れを以て、日本の裁判權が、獨立を失ふものとして、反對したのであつた。

日本の司法省に、顧問として、雇はれて居たにもせよ、其身は、フランスの人である。従つて、此條約改正の對手
方として、フランス國も、はいつて居たのだ。然るに、ボアソナードは、それに反對して、意見書を、政府へ出して
くれたのであるから、實に我國の、司法權を擁護してくれた、恩人であつた。

其意見書が、星亨の手に、はいつたので、星は、之れを加藤平四郎に渡した。加藤は、自分が主筆をして居た『めざまし』新聞社の印刷で、秘密に、之れを印刷して、同志に頒つた。それから、反對運動が起つて、終に條約改正は中止となり、井上外相は、職を辭するに至つた。

ボアソナードは、雇を解かれると、すぐフランスへ、歸る事になつたので、我有志者は、横濱まで送つて、其行をさかんにしたが、大旗を押し立て、船まで送つたのは、明治法律學校の生徒であつた。

大隈は、次ぎの内閣に入つて、此條約を蒸返へしたので、來島恒喜が、爆裂彈を投げ付け、大隈は、それが爲め、足を一本失つたのである。

『めざまし』新聞は、此事件から、星が入獄したので、大阪の村山龍平に譲り渡した。今の東京朝日新聞が、則ち其れである。今から思へば、夢のやうな話だ。

却從、鈴木は、自由黨本部を出ると、同志に別かれて、一人となり、北田を訪ねた。

『やア、鈴木君か』

『先刻は、失敬した』

『イヤ、君の議論には、みな弱つて、居たやうだ、ハッ、、、』

『君は、どう考へるか』

『我輩も、君と同じ意見ぢやが、すぐ實行に入らう、とするのは、少し無理だ、と思つた』

『君までが、さう弱い事を、いつて困るな』

『別に弱音を、吐く譯ではないが、今の場合、すぐ實行しやうとしても、それは、失敗に終る、と思ふ』

『そんな事はない、初めから失敗と、極めて居るから、いけないのだ』

『併し、君も、よく考へて見るがよい。昔と違つて、今の時代は、さう簡単に、政府を顛覆する、といふことは、む

づかしくなつて居るのだから、もう少し、慎重に考へて見ることに、したまへ』

丁度、この時に、やつて來たのが、幹事の宮部である。

北田の娘は、閨秀小説家として、一時は有名であつた、薄氷女史である。梶田半古といふ、貴伯の妻となり、子を産んでから、病を得て、はやく死んだ。長男は、正平と謂つて、一時は、滿鐵の理事を、勤めて居たが、東京で、二度も、選挙に失敗したが、今年の總選挙に、千葉縣から選出されて、衆議院の椅子に、ついて居る。

北田の晩年は、すこぶる振るはなかつたが、人物としては、剛直な性質で、しつかりした人物であつた。法律家ではあるが、劍術に強く、漢學は、よほど修めてゐた。

平生は、鈴木と、氣が合つて、極交情が良かった。北田が、兄弟の如くして、交際してゐたのが、宮部であつた。

今、鈴木と、議論してゐる所へ、宮部が、やつて來たので、これから三人で、遠慮のない、意見の交換が、はじまつた。

『宮部君、好い所へ、來てくれた。鈴木君が、例の議論で、我輩を、苦しめて居る所ぢやツた』

これを聞いて、宮部は、ニコ／＼笑ひ乍ら、鈴木の方へ、向きなほつた。

『最前の、本部の會議で、君の議論は、よく聞いて居たが、まだ時機が早いやうだから、もう少し、忍んで居て貰ひたい』

『イヤ、そりやア、いかん。僕は、一時の昂奮から、那アいふ事を、いひ出したのではない。大に決する所があつて、總理に迫つたのであるから、今更、變説は出來ぬ』

『然らば、どうしよう、といふのかね』

『總理が、どうしても、同意しなければ、絶交してもやるつもりだ』

『我輩等とも、絶交する、といふのか』

「どうも、致し方がない」

「まあ、左様いはずと、もう一度、考へ直して、くれたまへ」

「その餘地は、ないのだ」

「これほどに、いつても、君は、我輩等のいふことは、聞いてくれないのか」

「この事丈けは……」

「何故、さう剛情を張るのか、我輩等には判らないが、何とか思ひ留まつて、貰ひ度いものだ」

「もう、この事は、話すまい」

「左様か」

「天下に、一人の味方が、なくとも、僕の覺悟は、變へぬつもりだ。況して、多くの同志も居るのだから、飽まで

も、やり通す事にする」

こゝに至つて、北田も、終にあきらめた。

「オイ、宮部君、もう止めたまへ。鈴木君が、かういひ出すのは、何か仔細があるのだらう」

「左様かな」

「しばらく、その成行きを、見る事にしよう」

「その外は、あるまい」

鈴木は、思ひ出したやうに、

「僕は歸る事にしよう」

といつて立ち上つた。

「まあ、待ちたまへ。ゆつくり飲み乍ら、話さうぢやないか」

「湊が、旅宿に、待つて居るから、僕は歸る」

「湊も、同意して居るのか」

「無論さ」

「ふふーむ」

兩人は、顔を見合せて、何の詞もなかつた。鈴木は、振り切るやうにして、歸つてゆくのであつた。

斯うした、行掛りになつて、鈴木や湊は、静岡へ、歸つて來たが、東京を出る時に、板垣の寫眞へ、訣別の辭を書

いて、送り付けた。要するに、絶交狀の代りに、かねて各支部へ、送られてあつた、寫眞を、返附したのである。

静岡へ歸つてからは、此行掛りがあるから、同志の糾合に努め、既に二十人位は、決死の盟約をしたものもあり、

眞野も、鈴木に逢つて、その仲間入りをする事に、なつたのである。

一四

湊から、眞野が説かれて、同志の一人に加はつたことは、鈴木も、頗る氣をよくした。その外のものも、これを聞

いて、大に喜んだのは、眞野が、物堅い氣質で、武術に達して居たことが、重なる理由であつた。

それから後の、會合は、多く練武館で、開かれるやうになり、巧に偵吏の眼を、避ける事が出來た。

深浦が、眞野の勸誘で、さらに加はつて來た所から、その紹介をかねて、秘密會を、開く事になつた。

尤も、鈴木、湊、村上等が、東京から、歸つて來て、本部の情況を報告すると、いふ事も、この會合の要件の一

つには、なつて居たのである。

鈴木から、板垣總理と、應酬の一條や、外の黨員の主張する所を、一と通り報告した。それが済むと、湊が進んで、

「今、鈴木君から、いふた通り、本部の連中は、頼りにならぬのみならず、吾々とは、反對の意見を、有するものが

多いのであるから、吾々は、どこまでも、この儘で、進んでゆく外は、あるまい。これについては、諸君の意見も聞いて置き度いので、今晚の會合を催したのであるから、各自に、腹藏のない意見を、述べて貰ひ度い』

と、附け加へて、言ふた。

『板垣總理とは、全然、縁が切れたのですか』

と、誰か聞いた。

『全く縁を切つて、來たのです、その意見に、大分の隔たりがあるから、どうも、止むを得ない』

これは、鈴木、答へであつた。

しばらくは、寂として、誰も、發言するものが無く、一座の光景は、頗る沈んで居た。

この時に、深浦が、初めて發言した。

『我輩は、眞野君から、相談をうけて、さらに、湊君の話聞いてから、やうやく、同志に加はつたものであるから、同志間の事情には、頗る迂いのであるが、却て、その方が、自由に意見も、吐ける、と思ふ。鈴木君や、湊君から各自の意見をいへ、といふ事で、あつたが、それだけの事では、誰も意見の吐きやうは、なからう。兎に角、相談すべき、問題を、假りに設けて、それについて、意見を述べる事にしたら、どうですか。たとへば、正々堂々の陣を張つて、擧兵してかゝるのは、何うである、とか、いつそのこと、手短に、暗殺専門でゆく、とか、さういふ問題について、大方針を極めて、それから、手段方法に關する、各自の考へを、述べるやうにしたら、相談の纏まりは早いであらう。どうですか、諸君の考へは……』

『そりやア、深浦君の、いふ通りだ。それに基いて、相談する外は、あるまい』

眞野が賛成して、それに、據る事になつた。これから盛んに、意見の交換があり、結局は、暗殺の一本槍で、進んで行く事に決したが、眞野は、この事が決ま

ると、さらに、意見を述べた。

『假りに、大臣暗殺で進む、としても、同志は、五十名位を要する、手段や方法は、その都度に相談する、としても一番手から、五番手まで、十一名を一組として、五組をつくつて置く、必要がある。就ては、同志を求めると、いふことが、却々に、困難なのであるから、これから、御互は、同志をつくることに、先づ力を注ぐのが、第一である人数が揃つたら、それから實行の方法について、さらに相談する事に、しやうぢやないか』

これには、鈴木も賛成して、同志を、つくる事になつた。

雑談のうちに、大久保内務卿を、殺つた時の事などが、いろ／＼と研究されて、格別の衝突もなく、一ぱい飲むで別かれる事になつた、鈴木辰三が、この仲間に入つたのは、それから後の事である。

一五

静岡縣益津郡小川村に生れて、家には、相當の資産もあり、大農と迄は、ゆくまいが、中農位の格はあつて、何一つ、不自由なく、その日を送つて居た。

左様した、身分の鈴木辰三が、静岡の町へ、流れ込んで來て、三百代言のするやうな、彼是れ屋に、なるまでにはナカ／＼面白い、履歷を踏むで來たのである。

小さい時から、膽が太く、平生の悪戯も、普通の子供と違つて、質が余り良くなかつた。多くは力づくの、喧嘩を好み、對手の子供に、ひどい負傷をさせては、尻を持ち込まれ、親や兄に、心配をかけたことも、少からずあつた。

一度は、次郎長の子分、何某といふものに貰はれて、その仲間にも、はいつたが、これとても、長くは續かず忽ちにして飛び出してしまつた。

それから、といふものは、各所を、ぶらつき歩いて、東京へは出て來たが、これと、いつて、爲す事もなく、ぶら

ついで居るうちに、一日のこと、日本橋の、薬研堀邊を通りかゝると、繩のれんの、飯屋があつたから、そこへ、はいり込んだ。

時は、明治十二年の頃、彼の歳は、十六七位であつた。西南戦争が治まつて、二年目であるが、未だ、どこへ行つても、その噂話で、持ち切りの有様、西郷の事をいへば、すぐ大久保の事が、噂の種子になる。

西郷と、大久保は、ともに薩藩出身の、偉傑ではあるが、西郷を賞めるものは、必ず大久保を貶すのが、殆ど一般の人氣であつた。

兵を擧げて、半歳の戦ひをつゞけ、國民に、迷惑をかけたにも拘らず、西郷の死を聞くと、國民の、すべては泣いて、その死を惜むた。翌年の五月十四日に、大久保は、兇徒の手に罹り、紀尾伊坂の露と消えたが、少數の識者を除いては、却て、その死を喜び、西郷の復讐が出来た、といつて、祝盃をさへ、擧げたものがあつた。

繩のれんの、居酒屋へ集まるものは、多く勞働を爲る人、時には、相當のくらしを、して居るものが、食物道樂の物好きから、飛び込んで来るのもあるが、概して、その日稼ぎの人が、多く集まる所である。

醬油樽や、荒削りの板でつくつた、床几に、腰を下ろして、一ぱい飲むだ勢ひから、勝手な熱を吹いてゐる。その様子を、見て居ると、實に愉快らしくもあり、且は羨ましくもある。

『お、お、おめへのやうな奴に、憚りながら、西郷大將の難有味は、と、とても、判るもんぢやねえ。何てツたツて、大さうなもんだぜ。世界はじまつてからの、偉らい人ツてえな、大將様のこつたぞ。なんでえ、べ、べ、べら棒めツ、お、お、大久保なんて、あんな奴は、殺されるのが當りめえだ。エーイ、ブツ！。ああいゝ心持ちに、なつちやツた。ハツハ、、、、』

怒つて居るのか、喜んで居るのか、その區別さへ、判らない。獨りで、氣を吐いて、獨りで、威張つて居る。襟字のある、店紳纏を、被て居る所や、すべての様子から見れば、どうしても、大店へ出入りの、親方風である。

そのの對手に、なつて居るのは、行商人らしい風のもので、少しは理窟も、いへるらしく、大工さんとは、意見の相違でこれは、大久保の味方である。

『そりや、親方の思ひ違ひ、といふものです。誰が、何といつた所で、大久保さんほどの政治家は、ありませんよ。あゝいふ人物を、殺すなんて人は、どうせ、碌なものぢやあるまい。大久保さんの死んだのは、たしかに國の損害ですよ』

『ば、ば、馬鹿な事をいふな。大久保なンぞア、死んだつていゝが、西郷大將を、生かして置たきかつたんだ』

辰三は、ちつと、兩個の争ひを、聞いて居る。『そりやア、西郷さんも、偉い御方には違ひないが、つまり、謀叛人ですからね。何といつたつて政府に背いたのですから、いけませんや……』

『オヤ、手前は、いやに、政府の肩を持ちやがるな。西郷大將様を、西郷さんなんて、吐かしやアがるのが、お、おりやア、癪にさわつて、なんねえのだ。大將様が、何時、ためへの友達に、なつたか。そ、それを、いつて見る、さんなんて、吐かしがッて、太へ野郎だ。さア何とか、いつて見る』

『さんと、いつちやア、いけないのですか』

『いけねえ』

『何といへば、いゝのです』

『大將様といへッ』

『それでは、大久保さんのことい、何といつたらいゝのでせう』

『てめえの、いふ通り、さんで、澤山だ』

『大久保さんは、日本一の政治家ですぜ』

「それが、どうしたつてんだ」

「だから、偉い御方です」

「どこが、偉いのだ」

「日本一だ」

「大將様は、世界一だ。日本と世界と、どつちが廣いか、てめへ、知つて居るか」

「そんなことは、どうでも、いゝでせう」

「よかアねえ、それから、極めてかからねえぢや、どつちが偉いか、判るめえ」

「戦さが強くて、國は治まつてゆくぢや、ありません。大久保さんのやうな、御方が居て、政治を執つて下され

ばこそ、日本も、漸次、よくなつて、ゆくのです」

「てめえが、いくら賞めたつて、殺されてしまつちや、仕やうがねえぜ」

「西郷さんでも、やつぱり殺されたでせう」

「ば、ば、馬鹿アいふな。西郷大將様は、殺されたのぢやねえ、死んだんだ」

「つまり、は同じ事です」

「少し違ふぞ」

「どつちにしたつて、死んだのです」

「大久保は、島田一郎つて、石川縣の書生ッぽに、殺されたんだから、考へて見りやア、つまらねえ野郎だ」

「わたくしは、島田といふ人は、日本に害をした人だ、と思ひます」

「オヤ、てめえは、可なり天邪鬼だな」

「だつて、日本のためになる、大久保さんのやうな、御方を殺すなんて、考へれば考へるほど、島田は、つまらない

人だ、と思ひますよ」

「そんな、つまらねえ奴に殺される、大久保は、猶ほつまらねえツて事に、なるんだ。併し、島田は、うまくやつた

な」

「……………」

「歳は、まだ三十位だつてえ、ぢやねえか。水戸の浪士より、余ッぽど偉えや」

「兩人の争ひは、どこといふて、捉へ所のない、つまらない争ひではあるが、聞いて居るものには、頗る面白い。辰

三は、口を出した。

「もし、ちよつと……」

「何だ」

「島田といふ人は、大久保さんを殺したのですか」

「うむ、左様だ」

「大久保さんは、何ういふ役をして、居たのですか」

「内務卿といつて、日本の政治を、勝手に、ヤツて居たので、それで憎まれて、殺されちまつたのだ」

「左様すると、島田といふ人も、ゑらいのですね」

「そりやア、左様とも、何しろ、内務卿を、殺したのだから、ゑれえもんだ」

「今、一番に、ゑらい人は、何といふのだらう」

「已れには判らねえが、太政大臣と、いふのだらう。それをやつてるのは、三條さんだ」

「大久保を暗殺した、島田は、ゑらい人だ、といふことを、聞かせられたので、フラ／＼と、その眞似が、したくな

つたのであらう。

尤も、その當時では、殺された大久保を、偉大なる政治家として、これを惜むだものは、少數の知識階級に留まり多數の人は、別に大した意見がある、といふのではなく、單純に『痛快だ』と思つて、手を拍つた位のもので、何時の世にも、暗殺者といふものは、えらい人物として、傳へられるものだ。生家を離れ、養家に背き、どこといふ的もなく、故郷を出てからは、恰で浮草の如き身となつて、東西に漂浪した揚句が、もう何うでもよい、といつたやうな、捨鉢氣分に、なつてしまつたのだから、かういふ時に、魔の手は延びて、意外の方面へ、その人を、導いてゆくものだ。

『三條さんてえのは、そんなに、偉い人かな』
『何しろ、太政大臣ぢやア、ねえか』

『ふーむ』

『おめへは、關白太政大臣てえことを、知つて居るだらう』

『うむ』

『その太政大臣なのだから、大したもんだ』

『左様かな』

元氣な親方は、勘定をすませて、戶外へ出た。跡に残つた辰三は、空になつた飯の井を、じつと、眺めて見る。

『もう徐々と、火を落しますが、何か、あげますかね』

と、いはれて、急に立ちかゝつて、辰三は、小錢を、バラ／＼と、臺の上に置いた。

『これで、いゝのかネ』

『へい／＼、有難う存じます』

居酒屋の亭主は、その小錢を數へながら

『丁度、ございます』

辰三は、黙つて出かけた。

空は、眞ッ暗に曇つて、星一つ無かつた。一月の末と、いふのだから、未だ寒い。江戸に名物の、筑波風か、それともに、秩父風か、いづれにしても、骨を刺すやうな、寒い風が、ピュ／＼と、吹いて来る。

『ア、つまらねえな。どうせ、こんなことで、世を送る位なら、島田といふ人のやうに、えらいことをヤツつけて、死ぬ方が、可いかも知れねえ』

暗い道を辿りながら、辰三は、こんなことを、考へて居るのであつた。

『いッそ、ヤツつけちまはらう。そして、早く死んだ方が、却て氣樂だ』

これといふて、まとまつた考への、ありやう筈もなく、たゞフラ／＼と、こんなことを、考へてしまつたのだ。

『どうせ、ヤツつけるのなら、大きいのが可いや。さうだ、三條さんにしやう』

勸工場で、買物を、する時のやうな、軽い考へから、莫迦らしい決心をした。

那邊で聞いたか、三條邸の附近へ、辰三が現れたのは、その夜の二時すぎであつた。警戒は、相當にきびしくもあつたらうが、難なく塀を乗越へて、庭に面した、座敷の雨戸を、見事にこぢ開け、トウ／＼廊下へ上つた。

大久保の遭難からは、かういふ人達の邸は、嚴重に警戒されて、不寢番には、武術の心得あるものが、それ／＼に雇はれて、夜の更けるに従つて、その見廻りは、一だんと、きびしくなつて居た。

辛うじて、廊下へ忍び込んだ、辰三は、忽ち見付けられて、それからは、大騒ぎになり、暴れ狂ふ、辰三を押へ付けて、高手小手に、しぼりあげた。

本人の、いふ所を聞けば、重大事件の如くも思はれるが、だん／＼問ひつめてゆくと、烟のやうに消えてしまふ。何だか、譯の判らぬ事件として、警視廳の方へ、引渡されてしまつたが、とに角、その取扱ひは、重大事件の犯人と

して、最もきびしいものであった。

暗殺の動機とか、犯意の基く所とか、そんなむづかしい事を訊いても、本人には、さらに判らないのだ。訊問が、進むにつれて、掛官も、莫迦らしくなつて、笑ふ外はなかつた。

或は、窃盗が、目的であつたけれど、捕まつてから、大きなことを、いふたのではないか、とも思つたが、よく訊べて見れば、さうでもないやうだ。さればといふて、本人の陳述を鵜呑みにして、これを國事犯として、取扱ふ譯にもならず、遂に家宅侵入罪として、處分することに決した。

何のための、家宅侵入か、それは判らないが、暗殺でもなく、窃盗でもない、とすれば、家宅侵入の外に、これを宛籍る、罪名が無い、といふ所から、左様なつたのだ、といひ傳へられて居る。

僅に一ヶ月の、懲役ではあつたが、この獄中生活が、辰三のためには、この上もない、樂になつた。放免されると、すぐに故郷の土を踏んで、先づ生家へ歸つた。小川村へ、辰三の姿が見えると、かねて、事情を知つてゐる人達は、驚異の眼を見張つて、噂は種々に、擴がつてゆく。

兄は、辰三を見るや否、家の敷居を跨がせまい、として、これを拒むのであつた。

「何で、歸つて來た。お前のやうなもの、一歩も家のうちへ、踏み込むことをゆるさぬ。さア、出て行け」

兄が、眞つ赤になつて、突き出さう、とする。その手を拂つて、辰三は、存外に、落ち付いて居る。

「まア、理由を、聞いて下さい」

「聞く耳は、持つて居らぬ」

「そんなことを、いはないで、少し聞いて下さい」

「いゝや、聞かない」

「私は、あなたの弟だ、兄が、弟のいふことを聞いてくれぬ、といふ筈はない」

「弟、ぢやない」

「へー、それぢや何です」

「………」

「悪い奴でも、弟は弟です。悪いことをしたから、弟でない、といふのでせうか、悪くなつた、とすれば、矢つ張り弟でせう、まア、いふことだけは、聞いて下さい」

兄弟が、しきりに、いい争つて居る、所へ、親も出て來て、兄を宥めるが、ナカ／＼肯かない。律義一途の兄としては、無理もない。

辰三は、何を思つたか、ツツと立上ると、すぐ臺所へ、やつてゆく。跡から尾いて來た、兄や家のものが、

「あッ」

と、いふ間もなく、菜切庖丁を取つて、右の人指脂を、ぶツリと、切り落した。

それを取つて、紙に載せ、兄の前へ出した、兄は、横を向いて、頓えて居るばかりだ。

「兄さん、わたしの、悔悟のしるしですから、取つて置いて下さい」

「わたしは、この位、悔悟して居るのです。生れもつかぬ片輪になつて、お詫をするのですから、勘辨して下さい。

わたしは、これから、何も彼も、やり變へるつもりですから、今迄の事は、どうか赦して下さい」

「まア、こつちへ來なさい」

さすがに、兄もこれで我を折り、辰三を、ゆるす事にはしたが、物堅い人の、集まつて居る、田舎へ置くのは、却

て良くない、となつて、どこかへ、住み込ませる事にした。

静岡の三番町に、室田半次といふ人が居て、辰三の父とは、親しくもして居たので、室田に、頼み込んで、その世話を、うける事にしたが、室田は、水車業で、あつた所から、辰三は、米搗を、させられる事になつた。悔悟の上の奉公であるから、骨身も惜まずに、よく働いて居た。

監獄に居る氣で、働いて居たら、どんな事でも、行はれるし、その取扱ひにも、不平は起つて來ない筈であるが、辰三の考へ、としては、水車小屋に、米搗をやつて居たのでは、苦勞の甲斐もない、と思つて、仕事の間には、いろいろ思案も、して見たが、自分の爲ることは、兵隊の外にない、と覺悟して、室田の家を、飛出してしまつた。

少しばかりの、小使ひ錢があるから、これを旅費にして、豊橋へやつて來た。此處には、名古屋鎮臺の分營が在るので、徴兵志願の申出をしやう、と爲るのであつた。

分營の附近には、代書屋が二三軒、設けられてあつた。入營者と、家族の間に立つて、いろ／＼の周旋をしながら手紙や、願ひ届に關する、書類の代書をして居るのである。

『モシ、ちよいと……』
只在る、一軒の代書屋へ、聲をかけてはいるのを、はやくも見たのが、代書屋の先生であつた。

『さア、こちらへ……』

『少し頼みがありやす』

『何ですかね』
『兵隊になる、願書を、たのみ度いのです』
『えッ、入營をしたい、といふのですか』
『はア』

『何かの事情で、入營が遅れたのですか』

『イヤ、さうぢやない』

『どういふのですか』

『別に、仔細はないのですが、兵隊になつて見たくて來たのです』

『へへー、妙ですな』

代書屋の、疑ふのも無理はない。その頃の青年が、自分から進んで、入營したい、といふやうなものは、ほとんど無く、大概は、徴兵を免れやうとして、苦心して居るのだ。然るに、この青年は、自ら進んで、入營したいといふのだから、頗る變に思つた。

『兵隊が志願だ、といふのですか』

『左様です』

『餘り良いものでは、ありませんぜ』

『何でも宜しい。なつて見たいのです』

『給金は、貰へませんよ』

『それは、承知して居ります』

『一たん入營すると、勝手にやめる事は、出來ませんが、それも承知ですな』
『宜しい』
不圖、辰三の手を見た。
『やッ、お前さん、指が一本ないぢやないか』
辰三は、その手を、ぐいと引きながら、

「はア」

と、いつたが、少し狼狽氣味であつた。

「そりやア、いけませんよ」

「左様ですか」

「軍隊では、不具者を採用しません」

「指一本位だから、何とか出来ませんか」

「鐵砲をうつに、都合が悪い」

「なる程」

「どうも、お氣の毒ですが、これは書面を出すだけ、無駄です」

「左様ですか」

限りなき、失望の色を現はして、ボンヤリしてる、様子を見て、氣の毒に思つたものか。

「兵隊さんには、いけないが、將校には、なれますよ」

「えッ、將校には、なれますか」

「但し、試験がありますから、それだけの準備が、無ければいけない」

「試験といふのは、どういふ事を、爲るのですか」

「お前さんは、學問をして居るかね」

「學問は、ちつとも、して居ない」

「そりやア、駄目だ」

「學問が無けりや、いけないかね」

「無學の將校ツて、ありやアしない」
辰三は再びぐツたりしてしまつた。

一七

自分で切つた、指のために、兵隊になり得ない、といふ、説明を聞いて、今更、後悔はしたが、どうにもしやうがない。けれども、將校なら宜しい、との事に、失望のうちにも、幾分の頼みはあるが、残念な事には、無筆に等しい身の悲しさ、いかなとも致しやうなく、悄々として、豊橋を跡に、静岡へ、歸つて來た。

さて、かうしたことに、一度でも出會ふと、文字の讀めぬのを、つくづく不自由だ、といふことに感じて、それからは、頻に學問を、志すやうになつた。

醬油の製造を、業として居る、鍵屋といふ、家が在つた。主人は、磯野新造と謂ふて、多くの雇人を使ひ、商賣は繁昌して居た。

辰三が、噂に聞いた所では、今更、新に數名の人を、雇人れるについて、仕事は、晝間に限り、夜間は、學校へ通はせてくれる、といふことであつたから、辰三は、大喜びで、募集に應じた。

「お前が、辰三といふのか」

「ハイ」

「今までに、かういふ仕事の経験が、あるかね」

「否、初めてのことですから、何分よろしく、御願ひ申します」

「體は、少し骨も折れやうが、眞面目に働けば、左までに至難しい事でもないから、まア、やつて見たら、可からう」

『有難う存じます』

『給金のことは、お前の、働き振りを見て、定めることにしやう、と思ふが、それでも、よろしいかね』

『給金のことは、宜しう御座いますが、夜學に通へるやう、お願ひ申します』

『それは、承知した』

辰三は、主人の返辭に満足して、その翌日から、鍵屋へ移つて、一生懸命に、働きはじめた。

亂暴なやうでも、義理堅い、辰三は、初め世話になつた、室田半次へ、無斷で飛出した詫もすれば、鍵屋へ雇はれる事も、豫め諒解を求めて置いたから、室田も、頗る厚意を以て、辰三の仕込みには、いろ／＼周旋もしてくれ

た。
半月ばかりは、無事に、勤めて居たが、習學のことについては、主人から、更に話がないので、辰三も、少し不平を抱くやうになつた。

新に雇はれたものは、辰三の外に、十人ほどあつたのだが、習學の餘暇を與へてくれる、と、いふことを、的にして來たものばかりであつた。

『オイ、どうしたんだらう。未だ夜學のことを、何とも定めてくれないが、少し變だぞ』

『さうだな』

『うまいことを、いつて、ずる／＼に働かせやう、としたのぢやあるまいか』

『さうかも知れないぞ』

『もし、さうだとしたら、君等は、どうするつもりか』

『どうしたら、いゝかね』
晝休みの時、三四人が集まつて、こんな事を、いひ出したが、さて、この事を、どう裁いてゆく、といふ見當はつ

かず、只だ不平を、いふだけの事であつた。

其處へ、ぶらりと、仕事場から、出て來たのが、辰三であつた。

『辰三さん』

『何だい』

『今、少し相談を、はじめた所だが、君も、仲間入りを、してくれないか』

『何の事かね』

『夜學へ、やつて貰はう、といふ一件だ』

『そりやア、大にやるべしだ』

『君も、賛成か』

『そのつもりで、雇はれて來たのだ』

『して見ると、君も、騙されたのだね』

『まア、そんな譯だ』

『このまゝに、黙つて居たら、と逆も夜學なんぞへ、やつてはくれないぜ』

『初めから、そのつもりでは、なかつたのだらう』

『全く左様かな』

『左様としか、思へないぢや、ないか』

『左様だ、とすれば、あんまり莫迦々々しいが、どうしたら、いゝだらう』

『どうも、からも、あるもんか、談判するまでの事だ』

『談判しても、肯かなかつたら、どうする』

「それから先は、銘々の考へ一つだ」
「君は、どうするつもりだ」
「僕は、出てゆくつもりだ」
「左様か」

辰三は、外のものに關係なく、自分一人でも、談判するつもりであつたから、平氣で、かう答へたが、外のものは單純に、左様ばかりは、考へて居なかつた。

夜學へも行きたい、が、働いて幾何でも、金を得たい、といふ考へがあり、疝癩紛れに、この家を出た所で、うまく働く先きが、あればよいけれど、若し無かつたら、どうしやうか、といふ恐れを、有つて居たので、辰三ほどに、強い覺悟は、なかつたのである。

働くものは、晝と夜との、二部に分れて居た。辰三は、多く晝の部に、働いて居たのであるが、剛情な代りに、よく働いて、ナカ／＼外のものに、負けて居ない。腕力も、相當に有つて、勞役に堪へるから、雇人のうちでも、幅を利かして居た。

或日の夕方、作業を終り、食事も、すませてから、辰三は、主人の前へ出た。

「旦那に、少し伺ひ度い事が、あります」

「何かね」

「夜學へは、何時から、やつてくれるのですか」

「それは、こちらの都合があるから、はつきり何時から、とはいへぬ」

「つまり、やつては下さるのですか」

「そりあア、承知して居る」

「併し、何時から、といふことは、判らないのですか」

「さうだ」

「何故、定めては下さらないのですか」

「本人の、働き振りを、見てからでない、と、さういふことは、定め難いものだ」

「働き振り、といふのは、どういふ理由ですか」

「此方の鑑定で、夜學へ、やるもやらぬも、定める譯に、なるのだ」

「私の働き振りでは、見込みがないでせうか」

「イヤ、さうばかり、とはいへぬ」

「それぢや、どうなるのです」

「……………」

短刀直入に、急所へ、切り込んだので、此答へには、磯野も苦しんだ。

「初め、私が、旦那に聞いたら、そんなにむづかしいことでなく、すぐにも、やつて下さるやうな話でしたから、

私は、喜んで雇はれたので、働きも人一倍は、行つて居るつもりですが、それでも未だ見込みはない、といはれるのでせうか」

「そんな、理窟張つたことをいはず、と、夜學に、行きたければ行きたい、といふたら可らかう」

「それは、雇はれる時、旦那に、左様いふてあるのですから、くり返していふ必要はないでせう」

「それなら、それで、いゝではないか」

「詞の上だけでは困るから、實行して下さい、といふのです」

「よく考へて置かう」

天性の癩癩が、ムラ／＼と、こみ上げて来た。

「これから、考へるのですか」

「左様だ」

「勝手にしやアがれ」

これを聞いて、磯野も、顔を赤くした。

「何をいふか」

掛け合ひは、無事に治まりさうもない。

「人間は、牛や馬と違つて、たゞ尻を叩いて、働かせさへすりや、可いと、いふものぢやない。初めからの約束がなければ、何もグツ／＼いふ筈はないのだが、夜學へ、やつてくれる、といふから、喜んで働きにはいつたのだ。働けるだけ、働かせて置いて、約束の夜學は、今更知らぬ顔で、すまさうとしても、そりやアいけねえ、金持の約束は、昔からの的にならねえ、とは聞いて居たが、これほど、とは思はなかつた。お前さんは、人間を、何だと思つて居る、牛や馬とは違ふぜ」

理窟詰にして、かういふ調子に、やりつけられては、磯野も、一言半句、返す詞はないのであるが、そのまゝ黙つてしまへば、雇人に、やり込められた、といふ事に、なるので、それを、この上もない、耻のやうに思つて、少し聲を荒くして、

「もう、何も、聞く必要がない。お前と、俺とは、意見が違ふから、今日限り、雇は解くことにする」

幾分か、威嚇の意味を含めて、かういふたら、辰三も、閉口するであらうと、考へたらしい。

「何、雇を解く」

「左様だ」

「此方の、希望が容れられなければ、其れで、雇を解く、といはないでも、此方から、御免蒙るが、今まで騙して置いたことについて、何とか挨拶をしたら、どうだ」

「……………」

「オイ、何とか、いはねえか」

「うぬッ」

と、叫んだ時は、辰三の拳が、磯野の額に、加へられて居た。

それから、大騒ぎになつて、家人は、一度に出て来て、辰三を、取押へやう、とするが、暴れ狂つてゐる、辰三の力は、驚くべきほど強く、とても、抑へ切れなかつた。

磯野は、這々の態で、逃げ出してしまつたから、對手の見えなくなつたのに、なほ暴れ狂ふほどの、莫迦でない。

辰三は、自分から静かになつて、雇人の溜りへ、引上げて来た。

「辰三さん、えらい事を、やつたね」

「われ／＼には、とても出来ない、えらいもんだ」

「お蔭で、主人も、眼がさめるだらう」

辰三の、周囲を取巻いて、慰めるものもあれば、賞めるものもある。辰三は、ニヤ／＼笑ひながら、一同に向つて、

「皆さん、これでお別れだ。若し主人が、これで眼を覺ましたら、この上もない、結構な事であるが、どうも、左様はなるまい、と見る。兎に角、私は、これから、引取る事にしますから、ずゐぶん機嫌よく働きなさい」

と、丁寧に挨拶して、手荷物を提げると、ズン／＼鍵屋の、仕事場を出てしまつた。

室田は、辰三から、仔細を聞いて、少し手荒な事をした、とは思つたが、やつてしまつたことは、致し方がないの

で、鍵家へは、室田が、自身に出かけて、話をつけることにした。
然るに、この事を聞いて、畔柳時行といふ人が、室田を尋ねて、辰三の世話をしたい、と申込んだ。
畔柳は、裁判所の判事を罷めて、可進社と稱する、訴訟事務所を、開いて居た。室田の娘、ハルといふのが、畔柳の妾であつた關係から、辰三の事は、前から聞いて居たのだ。
辰三は、喜んで、畔柳の世話を、うける事になり、支關番になつた。それから、晝夜を問はず、一心に勉強をはじめたので、存外に進みもはやく、一と通りの物が、どうか、かうか、讀めるやうになつたのは、僅に半年の後であつた。

訴訟の事も、少しは判り、談判の呼吸も覺えて、終に畔柳の家を離れ、自分は、獨立して、裁判所の門を、出入すやうになつたが、眞野眞佐との交際は、それから後の事であつた。

一八

畔柳の家に居て、一と通りの理窟も、いへるやうになり、法律の少し位は、判りもするし、民事の訴状も、大して至難しいのでなければ、自分で、書ける所から、小さい事件は、相當に、依頼人もあつて、駈け出しの代言人よりも商賣は繁昌して、氣樂に、その日を、送れるやうになつた。

殊に、談判が、存外に上手で、大概な事件は、法廷へ持出さずに、すますから、それからそれへ評判されて、辰三の名は、可成りに知られて來た。

一言に、三百屋といはれて、軽くは取扱はれても、収入は、思ひの外に多く、少し混み入つて、面倒な事件は、懇意な代言人へ持込み、報酬の歩合を、貰う事にするから、思ひも寄らぬ、儲けがある。依頼人の方でも、心易く頼む事が出来るので、どうしても、三百屋は繁昌して、本職の代言人が、自然と閑になる所から、どこでも、三百屋と代

言人の間は、いっくらゆかぬもので、動もすれば、争ひが起るのであつた。

静岡でも、それと同じ、聞苦しい争ひは、時に起つた事もあるが、何時も、辰三が、その調停に盡力して、その結果は、双方に喜ばれる事が多く、深浦や、音高にも、非常に親しくなつて、頗る好都合であつた。

眞野とは、左様した事からでなく、深い交りがあつて、練武館へは、毎日のやうに、やつて來る所から、昨今では自由黨の人達とも、馴染が多くなつて來た。

今日は、練武館の、稽古も休みで、眞野と差向ひで、しきりに話込んで居る所へ、ばらりと、はいつて來たのが凄であつた。

恰度、夕飯時だ、といふので、眞野が氣を、利かして、酒肴を取寄せてくれたので、一ぱい飲みながら、面白可笑しく、雑談に耽つた。

『時に、鈴木君』
と、眞野が、詞を改めて、辰三に向つて、説きはじめた。

『君も、法律を學んで、裁判所へ、出入して居るのだから、政治の事は、よく判るであらうが、昨今の政府に對しては、恐らく満足しては居まい、と思ふ。』

それに就て、少し相談したい事があるのだが、たとへ同意が出来ないでも、秘密だけは守つてくれたまへ』

『僕は、政治運動に、關係した事はないが、音高君に勧められて、自由黨には、加入して居るから、少し位、政治の事は判る。どうせ相談といふのは、政府を攻撃でもしよう、といふのだらうが、そんな事位で、秘密を守れと、いふほどの事はなからう。全體、どういふ事かね』

『兎に角、秘密は守る、と誓つてくれ』
『宜しい、承知した』

『政府を攻撃する、といつても、演説や新聞位で、ぐづくいつて見よう、といふのではなく、實は、一と思ひに、ぶち倒してしまはうといふのだ』

『えッ、政府を、ぶち倒すツて、……』

『うむ』

『そりやア、大い事だな』

『はやくいへば、由比正雪の二の舞でゆかう、といふのさ』

『ははア、謀叛か』

『つまり、左様いふ事に、なるのだ』

『思ひ切つたことを、考へたものだね』

『改めて、いはずとも、斯うして、同席して居る以上、湊君も、その仲間の一人だ、といふことは、君にも覺れるだらうが、どうだい、君も一と肩、入れて見ないか』

『全體、どうしよう、といふのか』

『人数が多くなつて、金が澤山出来れば、擧兵でゆかう、といふのだが、若し、其が思ふやうに整はなかつたら、暗殺で進まう、といふのだ』

『そりやア愉快だ』

兩人の應酬を、湊は黙つて聞いて居るばかりだが、辰三の様子には、鋭い眼を放つて、ぢつと、見て居た。擧兵と聞いても、また、暗殺を聞いても、びつくりともせず、ニコ／＼しながら、最後には、愉快だといつて、

落付いて居る、その態度には、すつかり感心してしまつた。たとへば、その心に、何と考へて居ようと、多少の膽力のある男でなければ、かうした態度に、出られるものではない。

ない。

幸ひにして、本當に、同意ならば可し。萬一にも、同意を装ふて、わざと、落付いて居るものならば、どこ迄も説きつけて、仲間に入れなければならぬ。かういふ男は、いざとなつた時、役に立つに違ひない、と考へて、しづかに、自分の發言す可き、機會の來るのを、待つて居た。

『眞野さん、本當に、行る氣なら、愉快な事ですから、一と骨、折つても見ようか、みんな死ぬ覺悟が、出來ますかね』

『勿論、始めから、その覺悟がなければ、とても、この仲間には、加はれないのだ』

『そりや、左様でもありませんが、眞に覺悟が、出來て居るか、といふのです』

『その點は、疑ふに及ばぬ。いづれも、決死の覺悟をして居る』

『それなら、宜しいが、曖昧の覺悟なら、いッそ始めない方が、よいのだ』

辰三の、いふ所は、固より當然であるが、同志の覺悟を、幾分か危ぶんで、念を押して居るのは、多少、侮られて居るやうな、氣もして、眞野や湊は、いく分、不快の感じもあつたが、湊は、ずつと乗出して、

『鈴木君、君の覺悟は、決つかね』

『未だ、仲間入りは、して居ないから、それまでの、覺悟はないが、死ぬ位の事は、何でもないさ』

『それでは、同志の一人に、なれるか』

『湊さん……』

『うむ』

『君も、本當に、やるつもりかえ』

『無論の事だ』

「えらいな」

「莫迦にしちやア、いけない」

「決して莫迦にはせぬ。君は、文章を書いたり、演説をすれば、岳南第一の男だが、左様いふ覺悟を、有つて居るとは、思はなかつた、全く感心したから、賞めたのだ」

「我輩の事は、どうでもよいが、君は、どうするつもりか」

「宜しい、眞野さんと、君に、僕の體を任せやう」

「左様か」

「何でも構はないから、一番危い事を、引受けやう」

「ふふーむ」

この時に、眞野は、湊に向つて、

「この男は、かういひ出したら、大丈夫だから、安心して、同志の一人に加へよう」

「可からう」

「音高君にや、この事を通じて、さらに加入の盟を、させる事にしよう」

「江川町の方は、我輩が引受けて、話す事にしよう」

「どうか刺む」

兩人を残して、湊は、すぐ音高の、事務所へ出かけた。

後に、辰三は、眞野と、語り合ふ。

「湊といふ人は、普通の才子だ、と思つて居たが、存外に、志士の風があつて、立派な男だ」

「何しろ、湊新八郎の、伴だからな」

「新八郎といふ人は、何をして居たのかね」

「君は、未だ知らなかつたか」

「少しは聞いて居たが、よくは知らない」

「昔は、講武所の劍術師範の一人であつたが、早死にをしたのだ」

「左様かね」

一九

辰三が、同志に加はつた頃、西村藤三郎も、新にはいつて來た。

初めは、キリスト教の、牧師であつたが、その頃は、縣廳の役人をして居た。併し、信仰を止めたのではなく、依然として、教會との關係は有つたのだ。

音高と懇意になつて、役人を罷めてから、自由黨に加はり、黨の機密にも、携はるやうになつた。學問もあり、辯舌も巧であつたから、黨内でも、重用されて居た。

明治十七年の一月十七日、湊が主唱者となつて、賤旗山の中腹において、秘密會を、開く事になつた。

昔からのいひ傳へで、戰爭の際に焼かれた、寶物の殘骸を集めて、埋めてある、といふ場所に、垣根をめぐらしてある、その附近は、一帯の平地に、なつて居て、展望が、頗る佳いので、其處を、會合の場所として、音高、辰三、眞休、藤三郎、その他のものが、追々に、集まつて來た。

政府の壓制が、ひどくなるほど、政黨員思想は、左傾してゆくばかりで、壓制の結果は、却て良くなかつた。

言論に對する、干渉といつても、その頃の干渉は、昨今の人の、想像し得ざるほどのものであつて、干渉といふよりは、禁止といつた方が、或は當つて居るかも知れない。

政黨員が、政府に對する、唯一の武器は、言論の外に、ないのであるから、その武器を取上げられたら、思想が左傾してゆくのは、固より當然の事である。

苟くも自由黨に在るものとして、これに對する、不平を有せざるものは、ないのであるが、たゞ陰忍自重する一派と、革命類似の、行動を取りて、これに對抗しよう、とする派とあつて、黨内にも、多少の紛糾はあつたが、板垣總理の、愚論にも肯かず、地方の黨員は、到る處に、不穩の企てを、はじめた。

今は、専ら静岡の黨員によつて、企てられたを、述べて居るのであるが、關東の方面にも、中京の方面にも、また信越の方面にも、それと同じ、企てはあつて、初めは、別かれ／＼に始めたのが、終には、多少の聯絡も、取るやうになり、相當、大きいものになり、なつたのであるが、すでに中途で、破れてしまつた。

秩父、加波山、浦和、名古屋、飯田等の事件が、即ちそれである。別に、大井憲太郎を戴いて、小林樟雄、新井章吾、磯山清兵衛の一派が、朝鮮へ乗出して、一と旗擧げやう、とした事も、要するに、外患を利用して、政府の顛覆をやらうとしたのであつた。

静岡の市街を、眼下に瞰て、近く久能山を望み、遙に興津、江尻の沖も見える。元來が、温かい土地ではあるが、未だ正月の中甸とて、寒い風は、骨に沁みるほどである。

『何時までも、計畫ばかり、論じて居た所で、何の甲斐もあるまいから、早く實行に、向つて進みたいが、それについては、かねて、論べた通り、二大方針の、いづれを取るか、これを先づ、定める必要があらう』

と、眞野が、發言たのを、機會に、各自の意見を、それ／＼に、闘はせる事になつた。畢竟は、擧兵か、暗殺か、どちらかの道を、ゆくの可いか、といふ事に、なるのだ。『どうせ行るのなら、正々堂々の手段を、執り度い。一人や二人の大官を、斃した所で、本來の目的に、叶うものでないから、義兵を起して、陳吳の役に、立たうぢやないか』

『湊君の意見は、實に立派なものであるが、どうして、人を集めるか。假りに、人数は集まるものとしても、擧兵の手續きの成るまで、その秘密を、保つことが出来るか、どうか、一考を要する次第ぢやが、殊に、費用の方は見込が、立つて居るのか、さういふ點から、先づ説明してくれたまへ。それでないと、同意しかねる』

さすがに、西村は、急所を衝いた。政府を顛覆する、といふことは、もう議論の餘地なく、誰も皆、左様なつて居るのであるが、只だ、手段方法については、大體に於て、暗殺の手段を執らう、と、練武館の集合では、一たん定まつたが、未だ、それに服さず、擧兵で進まう、とするものもあつて、新に加盟するものが、あれば、その説が、蒸し返されて、同じやうな議論を闘はすのが、殆んど常例の如く、なつて居た。

『兵を擧ぐる、といふた所で、幾千の同志を集めて、旗鼓堂々と、やれるものではない。昔と違つて、警察の手も届き、軍隊の組織も、完全して居る、今日では、どうせ、大した事もあるまいが、兎に角、二三百人の同志があつたら、事を起してしまつて、幾日でも騒いで居るうちには、各地の黨員も、これに習つて、續々はじめるに極まつて居るから、そのうちには物にならう、と思ふのだ。従つて、費用の如きも、左迄に大金を要する、といふのでもないから、さう心配するには及ばぬ』

『そりやア、湊君の説として、感心が出来ない。要するに、各地の黨員が、吾々に習つて立つであらう、といふのなら、暗殺の手段を執つても、その結果は、同じ事にならう。こんなことで、議論ばかりして居らず、と、いッそ、暗殺と決めて、その準備に、かゝる事にしたら、どうだね』

眞野は、西村と、同じであつた。『我等は、敢て擧兵論を、固執するものではないが、願はくば、成敗を度外視して、男子らしき、態度を以て、進んで行き度い、と思ふのである』

「それは、誰にしても、同じ希望であらうが、成るべくは、近道をゆく事に、しよらぢやないか、暗殺は、即ちその手段である」

「江川町は、どう考へる」

同志の間では、音高を呼ぶに、江川町と、いふて居るが、昨今では、鈴木が兩人に、なつたので、多くの場合、かういはれるやうになつた。

「我輩よりは、新加入の辰三君、どう思ふか」

「僕には、何も考へはない、諸君の決した通り、従いてゆくつもりだ」

「左様か。いづれにしても、金次第ぢやから、兎に角、金策を第一義として、その上で、方針を定めやうぢや、ないか」これを聞くと、眞野はすぐ反對した。

「そんな事は、不可ない。金次第で、方針を定めるなぞ、今頃、さふいふことを、いひ出すとは、怪しからんぢやないか。暗殺を實行する。となれば、大した費用は要らぬから、すぐ着手すればよい。音高君の意中、未だ擧兵の夢を、忘れずに居るから、さういふ説が、出るのだ。すべて、かうした事を企てるものが、名譽などと考へるから、多く蹉跌するのだ、一死以て、國家に酬ゆるの覺悟さへあれば、それで可い。死後の名聞に囚はれるものに、古來大事をなし得たものは、ないのである。狂と呼ばれるも、賊と呼ばれるも、我れ何ぞ關せん、意氣を以て、直に實行に入る可しだ」

「眞野君……」

「何だ」

「君ばかりが、志士仁人ではない。あまりに高慢な事は言はぬものだ」

「何が、高慢か」

「高慢ぢやないか、獨りよがりの犠牲論、そんな事は、君の講釋を待つまでもなく、みな覺悟はして居るのだから、人の感觸を、害するやうな事は、いはぬ方が可からう」

「そりやア、君が間違つて居るか」

「何が、間違つて居るか」
音高も、ナカ／＼癩癩の強い方で、眞野の、いふた事が、よほど癩にさはつた、と見えて、突ツかゝつてゆく。

一一〇

音高と、眞野が、詞の相違から、双方、腕を扼して、立ちかゝつた時、辰三は、初めて仲裁に、はいつた。

「まア、待つてくれたたへ。君等の如き先輩が、そんな事で、顔色を變へて争ふとは、實に驚き入つた。斬合でも、決闘でも、君等の御隨意に、やるがよい。併し、僕のやうなものは、一しよに、續いてゆくことは出来ぬから、後で、ゆつくりやつたら、いゝでせう。只今限り、僕は、御免蒙る」

と、いつて、さつさと、歸りかけたから、今度は、音高と眞野が、これを引留に、かゝつた。

「辰三君、そりや、不可よ」

「今更脱けやう、といつたつて、さうはならぬから、まア、待つてくれ」

「強ひて歸らうと、いふのではないが、あまり莫迦々々しいから、御免蒙り度く、なつたのだ」

「何故か」

「何故かツて、左様な事をいふて、争ふやうでは、この大事は見込みがないから、厭になつちまつたのだ」

「さう、短氣を出さないで、もう少し堪へてくれ。我輩等も、決して喧嘩をして居るのではない。論ずるだけは論じて、歸着する所を求めやうと、いふのであるから、聞き苦しい所はあつても、怒してくれなけりや困る」

「それぢや、その議論は打切つて、今日は散會して、貰ひ度い」
「宜しい」

この時、湊は、口を入れて、金の事を、いひ出した。

「議論は、いづれに落付く、としても、運動費だけは、調達して置く必要があるから、この事は、我輩に、一任して貰ひ度いが、どうだらう」

「そりや、いゝだらう」

「併し、多少は無理を、やるかも知れないから、その點も、承知して置いて、くれたまへ」

「……………」

「その代り、責任は、總て我輩が、引受ける」

何か知らぬが、湊は、しきりに運動費の調達を、自ら進んで引受け、その責任まで負ふ、といふのだから、多少の無理はやる、といふたについては、別に根問ひもせず山を降りる事にした。

音高等は、宮ヶ崎町の、魚磯へ引上げて、食事をすませてから別れやう、といひ出した。湊は、跡から行くと稱して、辰三と居残つた。

「オイ、辰三君、めゝしい議論ばかり、やつて居るのも、つまりは、金の無い爲だから、何よりも、先づ金をつくるのが、最も必要な事だが、とても、尋常の方法では、その見込みもない、或は非常手段に訴へても、まとまつた金を得たい、と思ふが、君は、何う思ふね」

「今迄は、音高君が、大概は立替てくれたけれど、追々に、同志がふへて来れば、音高君にも、出し切れまいし、昨今は、事件の方も、よほど少くなつたやうであるから、この上に、金の心配をかけるのは、いかにも氣の毒である。だから、我輩も、あゝいひ出して見たのだが、別に、どこへ行つて、借て来る、といふ、あてもないので、一と工

夫、立てるつもりだが、君に、力を貸して貰ひ度い、と思ふんだ、何うだらう」

「承知した。何んでも、手傳ふことにする」

「有難い。何れ相談することにしよう」

「併し、この運動を起すについて、どの位、金があつたのかね」

「そんな用意は、一文も、なかつたのだ」

「そりやア、無理だつた」

「議論倒れも、金の無いためさ」

「ハツハ、、、、さうかな」

それから、幾日かの後であつた。

音高等は、魚磯へ、引上げて来て、これから飲みはじめた。例の露八が、席上の周旋をして居る。

藝妓は、土地で、一流のものばかり、音高は、金の切れ放れが、よい上に、男振りも美しく、代言人組合長と、いふので、すばらしい勢力を、もつて居ながら、花柳界の氣受けも、頗る良かつた。

しばらく、席を脱して居た、眞野が、ふらりと、はいつて来て、音高に私語いた。

「濱松の中野二郎三郎が、訪ねて来たから、別室で話をすると、意外な事を聞いた、免も角、君も、中野に、逢つて見ろ」と、いふのであつた。

中野は、元來が、岡山縣人、幼少の時から、非常に才氣が、すぐれて居たから、藩の方でも、大に眼をつけて、東京へ遊學のために、送り出す事にした。學資は、藩の支出で、大に勉強して居るうちに、生れついでに美男が災をなして、女遊びをはじめたので、終に藩からの支出も無くなり、止むを得ず、それから、苦學をつゞけたけれど、何分にも、一たん持ち崩した身は、容易に堅氣になりかねて、學問も、中途で打切り、岡山へ歸つて、一身の方向を

立てやう、として、東海道筋を、ぶら／＼やつて来て、遠州濱松へ、足を停めた。

一時の腰掛けに、子供を集めて、英語を教へたのが、縁となり、土地のものからも、種々と勧められて、私塾のやうなものを、開く事になつて、英漢數の教授を、はじめた。

そのうちに、政黨が、盛んになつて来て、濱松にも、自由黨の支部が設けられた。

河合一郎、澤田寧、阿部伊吉、山田八十太郎等の人々が、眞ッ先に立つて、支部は設けられた。今の高柳覺太郎は澤田の、家に居たのである。

澤田は、代議士になつて、一時は名聲を馳せたが、日糖事件で失脚してから、専ら辯護士として、晩年を送つて居る。

阿部は、子供の時分に、大火傷をして、頭の毛は、ほんの申譯に残つてゐるばかり、顔も、半分はひつ／＼になつて、一皮剥けて居る、といふ、醜い容貌ではあつたが、やさしい氣分の男で、多少の資産もあり、ナカ／＼の奔走家であつた。

河合も、代言人をして居たが、はやく政界を、退いてしまつたから、あまり人には、知られて居らぬ。その外にもこの方面には、有志家が多く居て、遠陽自由黨の名は、岳南自由黨と、ならび稱されたものだ。

山田は、土地の生れでないが、勢力においては、第一位の人であつた。江州彦根から、流れ込んで来て、剛直と、世話好きで、賣出した。殊に、腕力の有ることは、東海道筋の黨員中、第一の稱があり、八十貫の石を、輕々と差上げたほどである。

體格も、廿四五貫はあつて、強いこと、この上なしであつたから、その押出しだけで、大抵のものは、へ／＼としまつた。

傳馬町の中央に、家を構へて、豊裕な生活をして居た。壽山樓の並に、三階のある家といへば、漫遊書生の鬼門で

あつた。

漫遊書生が、訪ねて来て、生意氣な事をいふと、三階へ、引つ張り上げて、ギューといふ、眼に逢はせるのだ。何しろ、大力の男であるから、どんなものでも、一と掴みになつてしまふ。散々に、苦しめて置いて、それから、旅費を與へて立去らせるのが、常例のやうに、なつて居たので、この關門を、無事に通り越したことは、自慢にした位である。

一一一

初め、警視廳に勤めて、警部をやつて居たが、上官と衝突して、これを殿りつけたので、忽ち免職になつた。不圖した事から、濱松に停まつて、家を構へるやうに、なつた。石田英吉や、増島六一郎とは、血縁の間柄である。

阿部が、山田を、訪ねて来た。

『先生、御宅ですか』

『やア、オツブか』

山田は、常に阿部を、オツブと呼んで居る。一般の人も、オツブといへば、すぐ阿部と、知る位であつた。

『追々に、入黨するものがあつて、支部も、盛んになつて来ますが、今度の演説會には、一層馬力をかけて、入黨者を、募るつもりです』

『しつかり、やつてくれ』

『本部の辯士だけでは、いかにも少いから、澤田先生にも、御出席を願ひました』

『そりやア、結構だ』

『モ一一人、大した辯士があるのですが、先生から、お話を願ひますまいか』

「誰か」
「中野先生です」

「うむ、あの塾をやつて居る、中野か」

「へい」

「頼むだら、可いだらう」

「ナカ／＼威張つて居て、私が、申込んだ位では、駄目です」

「何故か」

「何しろ、學者ですから、むつかしい事ばかり、いつて、居て、容易に承知して、くれません」

「此處へ、引つぱつて來い、我輩から、いふてやらう」

「先生から、足を運んで、いたゞけますまいか」

「莫迦な事をいへ」

「へー」

「貴様がいつて、引ッ張つて來い」

「來るか、どうですか」

「山田が來い、といつて居た、といへば、すぐ來る」

「左様でせうか」

自由黨へ、加入する時、阿部が、中野へ話ただけけれど、子供の學問を、仕込んで貰つて居る、關係で、阿部は、中野をひどく尊敬して居る。辯舌も巧い、といふことは、よく知つて居るので、辯士の一人に、加へ度いと、思つては見たが、自分からは、話し難いので、山田へ相談すると、山田は、中野を、連れて來い、といふて居る。少し無理

だ、とは見るが、かういひ出したら、容易に肯かぬ男、として居るから、阿部は、すぐに、中野の塾へ出かけた。

案ずるほどもなく、中野は、阿部に、つれられて來た。

狭い濱松に住んで、眼と鼻の先きに居るのだが、未だ沁々と、話をしたこともない。

「エー、中野先生です」

と、阿部が、紹介の役を、つとめる。

「やア、我輩が、山田ぢや」

「中野と、いひます」

肥太つて、色の黒い、山田と、瘦て、色の白い、中野と、さし向かひになつた。對照が面白い。

「君は、演説が巧い、さうぢやから、今度の會へ出席したら、どうか」

「僕は、希望がない」

「希望が、あるか無いか、そんなことを、聞いて居るのぢない。出席したらどうか、といふのぢや」

「僕は、厭だ」

「生意氣な事を、いふな」

「何ッ……」

「出席したらどうか、といふのだから、ハイといふて、出席したら、よいぢやないか」

「だから、いやと、いふて居るぢやないか」

「うぬッ」

と、山田は、中野の手をとらへた。

それから、ドタンバタンの組打ちをはじめた。阿部は、ウロ／＼して居る。山田の妻が出て來る。

やうやく、二人を引分けた。
 「愉快な男ぢや。大に飲まう」
 忽ち酒肴が運ばれて、これから、二人の交情は、兄弟の如くなつた。
 地方遊説は、政黨の仕事のうちでも、最も大切な事の一つであるから、本部より、特派されるものは、一粒選の辯士で、いづれも、雄辯家揃ひであつた。

そのうちに、立ち列んで、相當に、演つて退ける、腕があれば、雄辯家と、いふべきである。
 中野の名が、多く人に知られたのは、この演説會からであつた。城山靜一、小室信介、内藤魯一なぞいふ、人の中に立つて、雄辯を揮つたが、その演説が、また頗る上出来であつて、

「塾の先生は、演説が巧い」と、いふ評判で、これが爲めに、塾の方も、榮えて來た。

山田は、膽力と腕力で聞こえ、中野は、學問と辯舌で知られ、二人の交情が、いよく深くなるにつれて、支那の事は、多く兩人に依つて、處置されるやうになつた。

遠陽自由黨は、これから盛んに、なつて來たが、その代り、黨内の勢力は、二分されて、澤田と河合は、自然と打合もよく、山田と中野に對立して、互に勢力を、争ふやうになつた。

この仲間に、急進派と、漸進派の別が、はつきりと、なつて來て、山田、中野の一派は、急進主義で進み、岳南自由黨へ、聯絡を取つて、政府に對する運動は、だん／＼はげしくなつてゆく。

それ等の打合せをかねて、岳南自由黨の、内情を知るために、中野は、静岡へ、やつて來たのであるが、魚磯へ立寄つて、食事をして居る折柄、眞野に出會つたので、茲に音高と、會見の機會を、得る事に、なつたのである。

音高は、中野の口から、意外の事を聞いて、それは、大井等の陰謀事件で、朝鮮へ乗込んで、一と旗擧げる、といふ、思ひも寄らぬ事を、くわしく聞かせられて、頗る驚いた。

「朝鮮が、支那の屬國の如く取扱はれて、それがために、我邦は、何時も不利の立場に、在るばかりでなく、朝鮮人のうちにも、金玉均の一派は、支那政府の仕向けに對して、頗る不平を抱き、獨立運動なるものを起して、支那政府の干渉から遁れ、朝鮮を、立派な獨立國たらしめやう、として居るものがある。大井は、小林樟雄、新井章吾、磯山清兵衛等の同志を語らひ、百餘名の壯士を率ゐて、朝鮮へ乗込み、金玉均を扶けて、獨立の實を擧げしめやうと謀つて居る上に、この問題から、日支兩政府の間に、ひどい争ひが起り、或は、これが爲めに、戰爭を開くやうに、なるかも知れぬが、若し左様なつたら、一擧にして、日本政府も、倒してしまはう」

と、いふのが、大井等、一味の陰謀であつた。
 舞臺を、日支韓三國の上に求めたのが、この事件の特質であつて、外の國事犯とは、非常に異なる所があり、その計畫も、頗る大きいものであつた。

「鈴木君、かういふ計畫で、大井先生等は、既に同志を集め、着々、準備を進めて居るのだが、實に近來の壯學である」と、思ふ、吾々も、安閑として居る時でないから、何か一と仕事をやるか、さうでなければ、大井先生等の、企てに加はるか、いづれにしても、藩閥政府を、打倒す事を、考へなければならぬのであるが、君は、どう思ふか」
 「大井君に、さうした計畫のあることは、今、始めて聞いたが、實は、我輩の方にも、同じやうな企ては、あるのだ」
 「えッ、何か、やつて居るのか」
 「うむ」

「そりや、どういふ企てか」
 二人の應酬を、ぢつと、聞いて居た、眞野は、中野に向つて、これから鈴木等の陰謀を、遂一、物語つた上、自分も、これに加はつて居る次第を、くわしく打明けたので、さらに中野は、音高から、事件の説明をうけ、改めてその一味に加はる、約束をした。

昔から、陰謀を企てるものに、富有の人はゐない。大概は、金の無い人に、極まつて居るやうだ。従つて、陰謀の露顯は、多く金策の失敗から起り、手も足も出せないうちに、はやくも捕繩を拔げられて、大詰の幕を引くのが、ほとんど常例の如く、なつて居る。

由比正雪のやうな、偉い人物でも、金策のためには、可なり苦しんで、愚圖々々して居る中に、陰謀は露顯して、腹を切つた。丸橋忠彌が、江戸城の壕ツ端で、キセルの鷹首を、睨んで居るなどは、全く金のなかつたため、金さへ、充分に有つたら、疾くに旗擧げはして居る筈だ。

同志は、追々に、殖えて来るし、計畫も、稍熟して来たから、擧兵、暗殺、いづれにもせよ、兎に角、着手したいとは、思つて居るが、何分にも、金の無いために、如何ともする事が出来ず、音高が、一人位で、移いで居る金は、固より知れたものであるから、どうかして、纏まつた金を、手に入れやう、として、各自に、苦心はして居たが、思ふやうに金策は、出来なかつた。

湊が、辰三をつれて、音高を訪ねて来た。その相談は、相變らず金策に、關する事であるが、今日の計は、今迄にない、耳よりの話であつた。

『第卅五国立銀行から、大省へ、廻送する三萬圓、それを途中で奪ひ取つたら、相當の運動が起せやう。この事については、兩人が、責任を負うて行るから、ぜひ任かせてくれ』と、いふのであつた。

『今までにない、名案だ、ぜひやつてくれたまへ。併し、君等が、手を下すのは、却て良くない、と思ふが、誰か外に、適當な奴は、ないか』

『そりや、不可、かういふ事は、人にやらせるのは、破滅の基だ』
『君等の顔が、あまり知れすぎて居るから、危険だらう、と思ふ。兎に角、眞野を呼んで、一應相談して見やう』
『可からう』

すぐ、眞野を呼びにやつて、それから、亦た相談が、はじまつた。
『この事は、音高君のいふ通り、顔を知られて、居ないものでないと、成否に拘らず、後に露顯の恐れがあるから、いッそ、濱松の中野へ打合せて、彼に一任したら、どうか』

『左様だ。それが良い』
先づ大體に於て、やつける事は決して、中野の来るまで、念の爲め、銀行の方へ、もう一度、探りを入れる、といふ事になつた。

中野は、電報を、受取つたので、すぐ飛んで来た。眞野から、事情を聞いて、一も二もなく同意して、自分が、その任に當らうと定めた。

けれども、一人で、これに發るのは、ちと無理であるから、誰か人は、無いか、とあつて、辰三が、その相棒を捜すことに、なつた。

北海道生れの、木原成烈といふ男が、小學校の教師をして居た。辰三は、木原のために、よく盡してやつた事があるので、ひそかに、事情を打明けて、その手傳ひを頼むと、木原も、豫て自由黨には、熱心な賛成者であるのみならず、政府に對して、少からず反感を有つて居たので、立どころに同意したから、改めて湊や、音高にも紹介し、眞野と中野も呼んで、魚磯へ出かけた。

要するに、木原の投盟を、迎へるための小宴で、木原の身に取つては、この上なき、見榮にもなつて、いよく堅い決心を、するに至つた。

銀行には、湊の親友が居て、よく内情は判るやうに、なつて居たので、その後も、怠りなく注意を拂つて居ると大蔵省への送金は、人夫に擔がせて、行員が一人、それに付き添ふてゆく、といふことを、探知し得たから、中野と木原は、先づ函根を、指して出かけた。

東海道筋の汽車は、未だ全通して居なかつた。函根や薩陀峠の、トンネル工事は、やうやく着手した位の時で、不自由な時代であつた。

昔からの飛脚便と、同じ仕組で、三萬圓の大金を、人の肩を借りて運搬すると、いつたやうな、不便さは、今の若い人に聞かせても、本當には、せぬであらう。

中野は、木原を連れて、函根へ、やつて来た。辰三は、途中に居て、見張りの役を、勤める事になつた。

どこの宿屋へも泊らず、人目をさけて、野宿するやうにしたのは、掠奪してから後の搜索をうけて、それと、當りをつけられるのを、恐れたからである。

二三日の間は、山籠りをするだけの、食糧を携へて、じつと、待ち構へて居たが、何時まで経つても、それと思はれるものは、終にやつて来なかつた。

『オイ、どうしたのだらう』

『中野さん、少し變ですぜ』

『いくら悠々、やつて来るにしても、もう見える頃だが、どうしたのかしら……』

『送金の日取りが、變つたのではないでせうか』

『左様です。それにしても、何とか知らせが、ある筈だ』

『湊さんは、どうしたのでせう』

『湊よりは、辰三の奴から、何とか知らせがなければ、ならぬのだ』

『もう、日が暮れますぜ』

『また、一と晩、空しく野宿をするのか』

『そりやア、いゝが、食物が無くなりました』

『パンは、もう無いか』

『一と切れも、有りません』

『腹の減るのが、一番に困る』

『そのうちには、鈴木さんが、何か買つて来るでせう』

『うまく氣が付いて、何か買つて来て、くれゝばよいが、彼奴も、存外に呑氣な所があつて、そんな事には、氣の付かぬ男だから、あやしいものだ』

『何か、買つて来ませうか』

『何を買うにしても、二里位は歩かなければならぬのだから、思ふやうにならぬし、それに御互の顔は、あまり人に見せたくないから、まア辛榨して居やう』

山へ、はいつてから、二日になるが、銀行の飛脚らしいものは、終に通り合はせぬので、兩人も、少し力抜きの形ちがあり、殊には、腹も減つて来たので、頗る弱つたが、どうする事もならぬから、このまゝに、一と晩を、山林のうち、過ごす事に決めた。

三鳥驛を、晝過ぎになつて出かけた、辰三は、かねて約束して置いた、所まで来たが、すつかり、日が暮れに人通りは、全く絶えて居る。昔の街道を辿つて、四邊に氣を配りながら、だん／＼やつて来ると、向ふから人の来る様子

それを避けるつもりで、傍らの森の中に、すつとはいつた。

その前を、のそり／＼と歩いて居る奴が、足を停めて、何か考へて居る。よく睨れば顔は、判然見えないが、どう

も、木原のやうであるから、

『オイ』

と、不意に聲をかけながら、森を押分けて出た。向ふの奴も、二三歩引いて、じつと透かし視て、

『ヤア、鈴木さんか』

『どうした』

『君は、どうして来たのです』

『中野君は……』

『彼所に居ます』

『何をして居るか』

『疲れて、寝て居ます』

『左様か』

木原は、辰三の様子を見て、考へて居る。

今頃、辰三の来たのが、木原には、どうしても、解釋が出来なかつた。

『どうしたのです』

『うむ』

『昨日の晝過か、今日の晝までには、例の飛脚が通る筈で、しつかり、見張つて居るのですが、影も見えなかつたの

は、どういふ譯なのでせう』

『僕はその事について、やつて来たのだが、兎に角、中野君に逢つてから、話す事にしよう』

『左様ですか』

辰三の態度や、口調に依つて察すると、何か故障の起つたものと、思へる。

『駄目なのですか』

『うむ』

兩人は、歩き出しながら話す。

『中野君は、寝て居る、といふのに、君は、どうして、こんな所へ、やつて来たのか』

『どうしても眠れないので、ぶら／＼出かけて来たのです』

『すいぶん、疲れたらう』

『野宿といふ奴は、どうしても、疲れますよ』

『左様だらう』

『それに、パンが無くなつてしまつて、腹は減るし、閉口しました』

『パンは、背負つて来た』

『君ッ、パンを、持つて来て、くれましたか』

『うむ』

『そりや、難有い』

『牛肉の煮たのも、持つて来た』

『それは、御馳走だ』

木原は、足を停めて、

『この藪の中です』

『さうか』

ガザ／＼藪を分けて、木原が、はいつて行く後から、辰三も、つゞいてはいる。

「誰だ」

「僕です」

「木原君か」

「ハア」

「どこへ、行つたのだ」

「ちよつと、出かけたのですが、うまい工合に、鈴木さんと逢つたので、案内して来ました」

「何ッ、鈴木君が、……」

草の上へ、莫蓆を敷いて、寝轉んで居た、中野は、急に起き上つた。

「やア、中野君」

「辰三君」

「まテ、坐つてくれたまへ」

辰三は、其處へ坐つた。

「金の飛脚は、未だに來ないが、どうしたのだらう」

「何時まで、待つても來ないことに、なつたのだ」

「えッ、來ないのか」

「銀行の方の都合で、清水港から、船便に託して、もう送つてしまつた、といふことだ」

「何の事だ」

「静岡から、その報知があつたので、君等に、はやく話さうと、思つたから、やつて來たのだが、實に間拔けな話だ」

「ふーむ」

中野も、木原も、しばらくは言葉も出ず、あまりの莫迦々々しさに、只呆れるばかりであつた。

「凄が悪いのでもなく、銀行の都合で、さういふ事に、なつたのだから、どうも仕方がない」

「それぢや、引上げよう」

「兎に角、食物を、持つて來たから、腹をこしらへてから、出かけたならよからう」

「左様しようか」

三人は、水を呑みながら、パンや牛肉の煮たのを、腹一ぱい詰め込んで、東の白む頃、函根を下つて、静岡へ、引返した。

一一二

静岡の警察本部には、警部長として、香取新之助が居り、保安課長としては、高須欣太郎が居た。

香取は、有名な壓制警部長であつた。静岡縣へ乗込んだ、辯士として、誰でも、一度や二度は、ひどい目に逢はぬ

ものはなく、香取といふ名は、政黨員の耳に、悪鬼の叫びの如く、響て居た。

政黨の創立される前、國會請願運動の時代から、長い間、民權派を苦めて居たことは、全國を通じて、香取位のものであつたらう。

静岡を去り、千葉縣の裁判所に、檢事の職を、奉ずるやうはなつた頃から、少し氣が變になつて、晩年は、狂人と

して、此世を逝つたのであるが、彼の死を聞いた時、自由黨の古い連中は、祝盃を擧げたほどに、憎まれて居たもの

だ。

香取の跡を引受けて、自由黨員に、壓迫を加へたものは、高須警部であつた。

當時の警察官が、自由黨の秘密を探るため、黨員のうちに、スパイを置いたことは、殆ど常套手段の如く、なつて居た。

始めから、スパイとして、はいり込むものと、既に黨員になつて居るものを、喰はすに、利を以てして、スパイに仕立てたのと、此二つの別はあつたが、スパイを用ゐたことは、何時も、同じであつた。

改進黨のやうな、議論ばかりして居る、政黨のうちにも、スパイは、使用されてあつた。香取の去つて後は、高須が、政黨方面の取締を、やつて居た。岳南自由黨の内部に、何か不穩の企てが、あるやうに思はれ、薄々、知つて居たこともあるが、適確に、其事實を、知ることは出来ないで、高須は、頗る苦心した末誰かを、スパイとして、彼等の仲間に入込ませやうと、苦心して、眞野眞依に眼を付けた。

當時の眞野は、非常に窮して居て、毎日の家計にも苦しむ、といふ有様で、あつたから、それを利用して、眞野を引込まう、といふことになつた。

練武館には、可成りの門人があつて、稽古は、毎日のやうにして居るけれど、収入は、割合に少く、自由黨に關係してからは、出入の人も多くなつて、その飲食に費す金も、眞野の境遇からすれば、決して少ないものではなかつた。陰謀に、加はつて居るものは、一人として富めるものなく、僅に鈴木音高が、代言人として収入のあることが、一同に分つて居たほどで、同志の窮迫も、ずいぶん酷いものであつたから、融通の道は、全く無かつたのである。

「高須警部か、來ました」
「何ッ高須が、來た」
「ハイ」

「何の用事か、聞いて見る」
「行基菩薩の、彌陀の尊像を拜観したい、といふて居られます」

「うむ、左様か、こちらへ通しなさい」
執り次の、門人が去ると、すぐ高須は、やつて來た。
「やア、先生」

と、いひながら、サーベルを、傍へ置いて、眞野の前へ坐つた。
鼻下に、美しい髯を蓄へ、見た所は、温厚の紳士らしく、態度や言語にも、やさし味があつて親しみ易き人であつた。

「先生、今日は、職務外の事で、御伺ひいたしました」
「彌陀の尊像を、拜観したい、といふのですか」
「はア、左様です」

眞野は、一つの箱を取出して、しづかに、その蓋を開けた。
眞野が、どうして、かういふものを、手に入れたかは分らぬが、圓滿光明の、彌陀の尊像と稱して、世間からは「糸引きの阿彌陀様」と、いはれて居た。著者も、眞野から、見せられた事があつて、その尊像を、拜んで居ると、指の先きから、蓮の糸に似た、細い毛のやうなものが、すーつと、出て來る、とかいふので、一時は、評判されたものだ。究迫して居る、眞野は、これを賣り度い、といふので、持ち歩いたのを、高須が、どこかで、聞き込んだ所から、拜観を名として、眞野を抑へつけに、來たのである。

「先生、これは、大したものですか」
「とに角、行基菩薩から傳へられた、といふ、折紙附の物であるから、國寶にも等しいのだ」

「先生は、これを、誰かに譲られるさうですが、それは、實眞の事ですか」
「之れは、我輩の家に傳はつたもので、手放したくはないが、食うと食はぬ境では、そんな事も、いうて居れず、望

「み人があれば、ゆづつてもよい、と、思つて居るのだ」

「左様ですが」

「君に、心當りがあつたら、世話をして欲しいが、どうです」

「斯ふいふ事について、信仰を持つ人でないと、むづかしいでせうな」

「どうか、心掛けて下さい」

「承知いたしました」

それから、高須は、膝を崩して、話をはじめたが、ナカ／＼うまい事をいうて、眞野を引付けやうとする。

「時に先生は、西南戦争の際、何か建白を爲れた事があるやうに聞いて居りますが、さういふ事が、あつたですか」

「それは、體にあつた」

「どういふ意味の、建白でしたか」

「舊藩の士族を、うまく使つて、戦争の役に立て、衣食の道を開いてやらねば、生活の上から来る、窮苦が、やがて

政府を怨むことになつて、將來は、國の災にもならう、といふ意味の、建白であつた」

「なる程、それは、御道理の建白ですが、只今、拜見が出来ませうか」

「さ、今、ちよつと見當らぬから、いづれ捜し出して、御覽に入れやう」

「どうか、お願いいたします」

この日は、それだけの事であつたが、三四日してから、眞野は、その建白書が、見付かつたので、それを携へて、

高須を訪ねると、非常に喜んで、眞野を歓迎した。

「警察署員のために、撃劍の師範を、勤めて戴き度いのですが、いかゞでせう」

「我輩も、練武館を、開いて居る位であるから、御望みならば師範に、なつても宜しい」

「それでは、左様願ひませう」

「毎日といふのは、困るが、月に何回とか定めて、出かける事にしたいが、それでも、宜ろしいでせうな」

「月に五六回も、おいでを願へれば結構です」

「その程度なら宜しい」

「甚だ失禮ですか、俸給も定めて置きたい、と思ひますので、その邊の御希望は、御座いますか」

「別に、いくらでなければ、とはいはぬが、まア、多いに越した事はない」

「金十五圓位で、御承知を願たい」

「宜しい」

「明日は、辭命を御届いたしますから、次の土曜日からに願ひませう」

「承知しました」

斯うした事情から、眞野は、警察署の道場へ、通ふやうになつた。

眞野の姿が、警察署の門を、出入するやうになると、同志の間に、疑惑を抱くものが、出て来て、集合の度毎に、

それが問題となつた。

一一四

一日、湊が、練武館へ、やつて来た。眞野は、稽古をすませて、汗を拭きながら、座敷へ来て、いかにも草臥れた、
といった様子で、席に着いた。

「失敬した」

「稽古も、可なり面倒だらうね」

「今朝から、二十人ほど、立ちつゞけにやつたので、少し疲れた」

「よく、呼吸が續くな」

「そりやア、始終、やつて居ると、長く呼吸もつゞくが、少し休むと、ナカ／＼苦しいよ」

「今日の稽古は、これで終つたのかね」

「うむ、けふは、これで打切りにするつもりだ」

「少し言が、あつて来たのだが、閑があらうか」

「もう、宜しい」

「どこかへ、行かうか」

「外へ行くよりか、此處の方が、よいぢやないか」

「人が来ると、うるさいからな」

「それは、どうにでもなる」

「いつて、眞野は、門人を呼んだ。」

「けふは、これで休みにするから、誰が来ても、斷るのぢや。それから、お客さんが来ても、外出して居る、といふてくれ」

「はッ、承知いたしました」

「君も、呼ばないうちは来ないやうに……」

「はッ……」

門人は、道場の方へ行く。跡は、兩人が、差向ひになつた。

「どういふ話か」

「君は、近頃、警察署へ出入する、といふて、同志の間で、大分疑ふて居るが、どういふ次第かね」

「未だ、君等には、話をしなかつたが、巡査に撃剣を、教へて居るのだ」

「アー、さうか」

「どういふ理由で、それを疑ふのだらう」

「何のために、出入するのか、その事情が分らなければ、誰にしても、變に思ふからな」

「なる程」

「誰の推薦で、行くやうになつたのか」

「高須警部さ」

「えッ、高須だッて……」

「左様だ」

「高須と、君は懇意なかね」

「よくは知らなかつたが、最近に逢つてから、その相談を、うけたのだ」

「單に、それだけの事なら、よいが、御互の身には、彼等の眼が、光つて居ることも、少しは考へてくれぬと、とんだ間違ひを引起すから、その點は、深く考へて欲しい」

「……」

眞野は、じつと、考へて居る。

「高須から、外に何か、相談はうけなかつたか、もし、何かあつたなら、打明けて貰ひたい」

「實は、いろ／＼吾人の事に、ついて聞くから、ほどのよい、返辭はして居るが、どうも、少し變にも思はれる」

「其處だ。それが、彼等の慣用手段で、さういふ所から、ソロ／＼と、引つ張りつけるのだ、といふことを、考へて」

くれぬ、と困るのだ」

「よし、解つた」

「高須が、何か、君に頼みはしないか」

「知つて居ることは、打明けてくれ、と、いはれた」

「どうだ、君は、それを引受けたら……」

「何ッ、我輩に、探偵をやれ、といふのか」

「探偵になつて、却て探偵を、爲るのだ」

「ふふーむ」

「吾人の、不利益になる事は、無論、いはぬ事にして、彼の懐裡へ、飛び込んで、警察の秘密を、さぐつて貰ふ事にしたら、この上もなく、都合がよいのだが、ひと奮發して、くれないか」

「濠のいふ所は、ずいぶん大膽な事で、かつ冒險的であるが、併し、考へて見れば、面白い事でもある。

政府の味方、と見せかけて、その實は、反對であり、警察の犬の如く、なつて居て、却て警察の秘密をさぐる、といふのであるから、上手に、やつて退けたら、同志のためにも、なる事であり、自分は、これが爲めに、幾分の収入があつて、生活の助けにも、なるのだから、甚だ狡い仕事で、士君子の、恥ぢる所ではあるが、時と場合に依つては、それも忍ばねばなるまい、と、眞野も考へれば、濠も、頻りに勧めるので、終に眞野の覺悟も、決いたらしい。

「それぢや、君のいふ通り、兎に角、やつて見る事にしやう」

「吾人の計畫が、追々に、進行してゆくと、警察側の注意も、起つて来るだらうし、同志の間にも、變な奴が、出て来るかも知れないから、それを、疾く知つて災を、未然に防ぐには、どうしても、警察側の秘密を、知る必要があるのだ。君の奮發で、それが出来る、となれば、實に仕合せな事にならう」

「併し、濠君……」

「何だ」

「この事は、ずいぶん困難な仕事で、或は、我輩の一身に取つては、重大な問題を、生み出すかも知れないが、その邊の事は、よく打合せて置かぬと、後日に至つて、意外な内訌を、引起すかも知れないから、我輩のいふことは、充分に呑み込んで、置いて貰ひたい」

眞野は、この大役を、引受ける氣になつたが、併し、その心には、多少の不安も、感じたのである。

「どういふ事か、君の思ふ通り、いふて見たまへ」

「警察側の秘密は、一々知らせる、としても、此方の秘密も、少しは報告しなければ、なるまい。計畫の筋に觸れたら、事件の真相については、一言半句、いふ事は、出来ぬが、三度に一度は、なるほど、と思ふ位の事は、いふて置かぬと、向ふでも、此方の報告を、信用しない事に、ならうから、黨の内情や、個人の素行位については、いくら、不利になる事も、いふが、それ等の點は、豫め承知して置いて、くれたまへ」

「その位の、犠牲を拂はなければ、先方の秘密を、知る事は出来ぬから、それはよい、と思ふ。けれども、御互のやつて居る、事件に觸れぬやう、これは、充分に注意して貰ひたい」

「それは、よく承知して居るが、若しも、その恐れのある時は、すぐ君に、相談する事にしやう」

「左様して、くれたまへ」

「かういふ事は、ナカ／＼至難しいもので、何時か、同志の間に、忌な噂が、起るか知れないが、その時は、君の力で、その噂を抑へてくれない、と、我輩の立場が、ない事になるから、この點も、深く考へて置いて貰ひたい」

「宜しい」

「音高君には、話して置く必要があらう」

「それは、有る」

「君から、話してくれるか」

「うむ、僕から、話す事にするが、或は、君からも、話して貰う事に、なるかも知れない」

「我輩は、何時でも話すが、兎に角、君から、内談して置いてくれ」

「それでは、これから、行つて来やう」

「では、さうして、くれたまへ」

大體の話を極めて、湊は、練武館を出た。

眞野が、この時に、心配した通り、後日になつて、眞野の一身は、頗る困難な、立場に陥つた。事件の露顯した時は、眞野を目するに、本當の犬として、同志からは、酷く排斥を受け、警察側のものは、一ばい喰つた、といふ所から、眞野に、不利益な報告をつくり、双方から犬として、扱はれる事になつた。

二五

音高の、諒解を得て、眞野の事は、忽ちに決したのが、陰謀の計畫は、遅延として、運ばなかつた。殊に、三萬圓掠奪の一件が、意外の手違ひを來してからは、いくらか、自暴になつた傾きもあり、運動費の調達に、苦しむ所から、變則の手段に訴へても、金をつくらう、といふ説が、同志の間に、張く唱へられるやうに、なつて來た。

變則の手段とは、果して、何ういふ事か。それは、強盗を、やつてもつくれ、といふ説であつて、「大功は、細瑾を顧みず、と古人も、いふて居る、また切り取り強盗は、武士の習ひ、とさへ、いはれて居る位だから、目的を遂行するためには、いかなる手段も、止むことを得ない」

と、いふやうな、はげしい事を、いふものが、進々に、ふへて來た。

折柄、東京の本部から、全國の代表者を集めて、對政府策に關して、相談會を開くといふ、通知が來たので、いろいろ相談の末、音高と湊の二人が、岳南支部の、黨員を代表して、上京する事に決した。

所へ、濱松の方からは、中野が、名倉良八と、いふものをつれて、これも上京のため、やつて來た。

音高の家で、四人が、話して居る、と、村上佐一郎が、やつて來て、一しよに上京したいといふから、連れてゆく事にした。

村上は、一番に、年を老つて居て、資産も、持つて居たし、文字は、深く知らないが、昔の士族氣質で、頗る好人物であつた。

自由黨には、創立の時から加盟して、力を盡して居るし。地方では、顔も賣れて居る。同志の間でも、物堅い人として、ナカ／＼信用はあつた。

はやくから、音高等の陰謀に加はり、今迄に、運動費の負擔も、相應に、引受けて居たのであるが、何分にも、計畫が、進まぬ所から、いくらか、焦り氣味にもなつて、今度の上京も、思ひ立つたのである。

五人は、連れ立つて、東京へ出たが、音高と湊は、本部の傍に在つた、林家旅館へ泊り、村上、中野、名倉の三人は、日吉町の栗柳といふ、宿屋にはいつた。

その頃の本部は、銀座二丁目の、川岸通りに在つて、すぐ隣家は、自由新聞社であつた。本部には、なつて居るが、表の看板は、寧靜館と、なつて居た。

全國から、集つて來た、代表者にも、硬軟二派があつて、その争ひは激しかつた。音高の宿館へは、硬派のものが、多く出入して、いづれも、直接行動で進まう、といふ、説を唱へて居た。

仙波兵庫、小勝俊吉、富松正安、山川善太郎、伊賀我何人、甲田良造等の連中は、毎日のやうに、林家へ、やつて

来た。

仙波は、茨城縣の生れで、その頃には、熱烈な志士の、風格を持つた人であつたが、郷里には相當の資産を有し、後には、代議士になつたが、昨今では、無一物となり、時代に遅れて寂しく、世を送つて居る。

群馬縣人には、宮部、長阪を始め、木呂子退藏、新井毫、深井卓爾、小勝俊吉、伊賀我何人、山口重脩などいふ、人々が居て、當時の上毛自由黨は、頗る振つて居たが、そのうちで、小勝は、東京に家を持ち、星亨の配下として、多く本部に詰めて居た。

富松は、茨城縣の下館に、有爲館なるものを設け、玉水嘉市が、竹刀を取つて、青年に、擊劍を教へ、富松は、精神的に、青年を訓育してゐたので、郷黨の間には、非常な信用を、有つて居た。

後の加波山事件には、二人ともに關係して、富松は、この事件で捕はれ、死刑になつた。玉水は、無期徒刑に處せられて、北海道へ送られ、今では、下館へ、歸つて居る。

今は昔、大日本製糖株式會社の、疑獄が起つて、多くの代議士が拘引されたり、社長の酒匂某が自殺したり、いろいろの事があつて、疑獄は、どの位延びて行くかと、多くの人に、危惧の念を、抱かせた時、山川善太郎の死に因つて、ホツと息を吐いた、代議士のあつた事は、あまり人の知らぬ事である。

山川は、丹波の出身で、中村敬宇の、同人社に學び、漢學の深い割合に、英學は淺かつたけれど、一と通りの物は、讀み得て、翻譯は、上手であつた。

明治十年前後に、北辰社といふ言論の團體があつて、さかんに演說會を開き、例の嚶鳴社と對抗して、一般の人氣は、北辰社に傾いてゐた。荒川高俊、土居光華、瀬谷正次、土屋龍太、漆間眞學、山川善太郎等が、社中の重立ちたるものであつた。

山川は、一目瞭して、若いうちから、頭髪が薄く、體格も小さい方で、その風采は、甚だ振はなかつたが、演說は、

巧いものであつた。

本人は、存外に眞面目で、よく人を笑はせる。滑稽演說の達人ともいふべく、奇抜な議論を吐いて、聴くものをアツといはせた。

この人が、日糖會社の依頼をうけて、多くの代議士を、引付けて居た事は、本人から、聞いて居た位で、若し、山川が、あの時に頓死しなかつたら、もつと、澤山の、人が、捕へられたらう、と思ふ。

昔は、可なり激しい、議論を吐いて、よく若いものを、煽動して居た事がある。自由民權派のうちでは、中老の格で、岳南の連中にも、深い關係があつた。

小勝の晩年は、政府の犬である、といはれて、同志から排斥をうけ、その終焉も寂しかつたが、一時は、信用も厚く、芝田村町の家には、何時も、三人や、四人の、食客が居て、急進派の、秘密會合所の如き觀があつた。

伊賀は、宮部の弟で、大井の大阪事件に加はり、一頃は、高崎方面に、勢力を持つて居たが、今では調落してしまつた。

明治十六七年頃には、政黨員中の著述家で、甲田良造の名は、ひろく知られて居たけれど、議會が開けてからは、全く政界と絶縁して、晩年は、大阪で終つた。

かうした、連中が、代る／＼やつて來て、音高を中心にして、過激な議論を、吐いて居たから、林家の一室は、ずいぶん賑やかであつた。

『やア、失敬』

といつて、執次もなしに、はいつて來たのは、小勝であつた。

『少し相談があつて來た』

『どんな事か』

「星君が、一度逢ひ度い、といつて居るが、君の都合は、どうかね」

「何時でも、都合はする」

「それでは、今夜、行つて見ないか」

「宜しい」

「星君に、さういつて置かう」

「併し、用事は何かね」

「何、少し話して見たい、といふのだ」

「左様か」

この時、湊は、口を入れた。

「そりやア、好都合だ。星君には、一度逢つて、話をして置くが良い、と思つて居た所だ。大井君は、例の方で忙し

いだらうから、吾々の方にも、星君位の人物が、後援してくれたら、この上もない事だ。

音高は、湊に向つて、

「君も、行くか」

「一しよに、行かう」

「オイ、小勝君、それでも、よいか」

「宜しいとも……」

所へ、仙波等が、追々、やつて来て、談論が始まつた。夕方になると、一同を置去りにして、音高と湊と、小勝と共に星を訪ねた。

一一六

星は、自由黨の人として、新しい方であつた。國會請願の運動には、何等の關係もなく、黨の創立される時にも、没交渉であつたが、後藤象二郎の紹介で、遅れて加盟したのであるから、政黨員としては、餘り先輩でなかつた。

河野廣中、片岡健吉、大井憲太郎の方が、ずっと、先輩であつたから、初めのうちは、本部へ來ても、大して幅は利かなかつた。

黨へ加はつた時も、外に連れて來たものもなく、たゞ一人であつたから、黨内にも、味方はなかつた。

イギリスの、ケンブリッジ大學を出て、バリストルになつて歸朝し、京橋の三十間堀に、代言人の看板を掲げ、それから、漸く人に知られて來たのである。

後藤は、高島炭坑に失敗して、多くの負債が有つた。横濱のイギリス一番館が、債權者の第一位で、星に、訴訟の代理を託した。

後藤が、いくら偉い人でも、法律に關する事は、とても、星の對手でない。殊には、債務者であるから、弱點を抑へて、ギユウ／＼締つけてゆくので、この時には、流石の後藤も、可なり苦しめられた。

そのうちに、後藤は、星の爲人を見抜いて、自由黨へ、入るやうに説いた。訴訟で虐められても、對手が良い、と

観れば、黨員として引付けよう、とする。後藤には、かうした大きい所があつた。

傲岸不屈の星は、毎日のやうに、本部へ、やつて来て、前からの黨員に接して、その人物を、ひと通り知つて置いたのだ。人が、自分を軽く視る、とか、悔どつて居る、とか、そんな事には頓着なく、眼中に、河野も大井も、將た片岡も、無かつたのである。

板垣總理が、岐阜の富茂登村で、相原といふものに斬られ、その傷が癒ると、すぐに洋行した。その事が、原因と

なつて、党内に、紛紜が起り、大石正巳、馬場辰猪、末廣重泰、田口卯吉、西村玄道、浅野乾、堀口昇等の人が、終に脱黨してしまつた。

その頃から、星は、頭を上げて来て、板垣の洋行中、自由新聞を、預かる事になつた。党内に、一人の味方はなくとも、機關新聞を握れば、この上の好都合はない。

社員を淘汰を行つて、自分の味方を、多く入れる事にしたなら、自由新聞の實権は、星の手に、歸した事になる。地方に、自分の立つべき地盤は無いが、新聞といふ機關を持つたのは、非常な強味であつた。

星の手に、機關新聞を渡す、といふのは、多少の異論もあつたが、どうしても、星でなければ、引受けられぬ事情があつた。河野は、福島縣會の解散から、引續いて總選舉が始まり、東京へ出る事が出来ず、假に出られたにしても、金の力は、皆無であつたから、新聞の引受けは、出来ない。大井にしても、また片岡にしても、同じ事情で、新聞社の脊負て居る、一萬圓の負債は、如何ともする事が出来ぬ。なほ、その上に、どれだけの金を要するか、明日以後の經營にも困る、といふ有様であつたから、泣く／＼星の手に、新聞社を、引渡すの外は、なかつたのである。

星は、洋行から歸つて、代言人を始め、大きい事件の報酬を、そのまま溜込んで置いたから、當時の金にして、十五六萬圓は有つたのだ。

されば、新聞社の負債を引受け、今後の經營についても、少しの心配もなかつた。社長は、依然として、板垣であるが、實権が、星の手に移つてしまつたのは、かういふ事情からであつた。

新聞の資本金は、初め株式であつたが、それは、疾くの昔に使つて、今では、負債ばかりで、社の金は、一文も無かつた。

星は、それを口實として、新株募集の遊説を、はじめた事になつた。今と違つて、昔は、新聞の經營も、頗る樂であつた。第一に、資金は、今のやうに。澤山、要らなかつた。紙數も、

一萬枚位出たら、それで満足して居られたのだから、まことに氣易いものであつた。昔から、自由黨の人は、新聞の經營が、下手であつた。東京に於て、生ひ立つた、機關新聞は、只の一つもなく、興しては仆れ、仆れては、また興し、いく度か、同じ事を繰返して、終に立派な新聞は、一度も出来た事が、なかつた。

そのくせ、地方へ行くと、ナカ／＼成功して居る、新聞がある。これは、何ういふ理由か判らないが、實に不思議だ、と思つて居る。

自由新聞を、始める時は、一株廿圓づゝ集めた。これに應じたものは、寄附のつもりであつたから、失敗しても、悶着は起らなかつたが、その代り、二度目には、みな斷つてしまつて、金を出すものは、頗る少かつた。

星が、新株募集を、考へた時、この理由を以て、幹部のものは反對したが、星は、何か確信があるが如き態度で「なアに、心配は要らぬ。我輩が」と廻りすれば、十萬圓位の金は集まる」といつて、ニコ／＼笑つて居た。

これを聞いたものは「いかに星君でも、そんな譯にはゆくまい」といひ、或は「夢のやうな話だ」といつて、冷嘲した位であるが、いづれにしても、社に金はないのであるから、何とかして、金の都合はするであらうと、多少の期待は、有つて居たらしい。

星に従いてゆくものは、加藤平四郎と、小勝俊吉の兩個と定まつて、これから、東海道筋の、遊説に出かけた。本部の幹事として、地方支部の人達に、馴染の多い、加藤は、極めて濃厚な人であつたから、一般の信用もあり、殊には、古い頃からの有志家で、知人も、澤山に有るし、本部の内狀にも、通じて居るから、かういふ人の隨行は、星のためには、頗る好都合であつた。

加藤に比べると、位置も低く、本部の役員でもなかつたが、壯年血氣の連中には、氣受の良かつた所から、小勝

を伴れてゆく事にしたのも、巧い仕方であつた。星が、どういふ理由で、先づ東海道筋へ、眼をつけたか、といふに、それには、大に事情があつた。新聞の株金を募集する、といふのは、表面の口實であつて、實は、この方面へ、他日の勢力を、植付けて置かう、との考へから、出かけたのが真相である。

關八州には、大井が、頭張つて居て、手も足も出せない。大井は、豊後の馬城山下、高並村の生れで、初めは、高並大軸と謂つたが、長崎遊學の頃、例の大井卜新と、親しく交はつてゐたが、その後、大阪へ出てからも、卜新の世話になつて、深くその厚誼に感じ、兄弟の盃を取交して、氏名を、大井憲太郎と改め、東京へ出てからは、開成所の舎密學の教師となり、日を送つて居るうちに、明治六年を迎へた。

板垣退助、後藤象二郎、副島種臣、江藤新平、古澤滋、岡本健三郎、由利公正の連名で、國會開設の建白書が、政府へ提出されたので、これが、學者の間に論議となつて、加藤弘之が、國會尙早論を公けにした。

然るに、當時の曙新聞へ、馬城臺二郎の名を以て、その駁論を出したものがあつた。それから、加藤との間に、さかんな論争が起つて、馬城の名は、郡鄙、到る處に傳へられた。

馬城といふたのは、大井で、それから後、東京へ、足を停めて、代言人を始め、自由黨創立者の一人となつて、關東八州の有志家は、大井を戴いて、首領とするに至つた。さういふ事情で、關東には、星の勢力は、いかにするも、植付け得なかつた所から、東海道へ、眼をつけたのである。

二七

大井の晩年は、甚だ振はず、何時、亡くなつたか、余り人にも知られなかつたほど、生きて居るうちに、死んだものとして、扱はれて居た事もある。

併し、一と頃の大井は、關八州に於る、唯一の勢力家であつた。當時の政黨員中で、政府の、最も恐ひものは大井一人であつた。

大阪國事犯の、罪に座して、獄に投ぜられた時が、人氣の絶頂であつた。朝鮮の金玉均と、遠くから握手して、支那政府の、干渉の手から、朝鮮を救ひ出してやるには、非常手段を以てする外はない、との考へから、百余名の同志を率ゐて、密に朝鮮へ渡らう、と謀つた。それが、露見して捕はれ、大阪の裁判所で、處分を受けたのである。

事は、朝鮮の獨立を、主としたものであるが、同時に、日本政府も、顛覆してしまはう、としたので、外國に關する罪と、内亂陰謀の罪と、この二つが、併發したのであつた。

岳南自由黨の連中が、大井の計畫を聞いてから、一層の意氣込みで、陰謀の進歩を謀つたのは、大井の方でも、よく知つて居たが、事件としては、何の聯絡もなかつた。

この事件で、遂に有罪となり、憲法發布の日に、大赦となつて出獄はしたが、それからの大井は、だん／＼下り坂になつて、衆議院へも、一度は出たが、これといふて、人の注意を、引くほどの事もなせず、何時、退くともなく退ひて、終りは陋巷の間に、窮死してしまつたのは、如何にも、氣の毒な次第であつた。

大阪國事犯に連座して、最後まで、大井の面倒を視たものは、村野常右衛門と、森久保作藏の兩個であつた。小久保喜七も、この事件で入獄したのである。

明治十七年頃の大井は、黨員の間に、神の如く尊敬されて、關八州の第一人者であつたから、流石の星も、それに觸れる事を避けて、東海道筋へ、勢力を植付けに、かゝつたのである。

この方面には、全道を統一するほどの人物なく、群雄割據の形であつたから、それを見込んで、星は、新聞の株金募集を名として、先づ静岡へ、乗込んで來た。

鈴木音高の一派と、前川豊太郎の一派と、互に睨み合つて居たのを、星が調停して、うまく折合をつけてやつた。

兩派の間に、板挟みとなつて、弱つて居た。連中の喜びは、勿論、兩派のものも、星の人物に感服して、それから、星の意をうけて、何事も爲るやうになつた。

殊に、鈴木一派は、深く星を信じて、音高始め、同志の者が、別に星を招待して、小宴を開いた時、陰謀の一端を漏らして、星の意見を聞いた。

「どうせ、一度は、やる事にならうから、まア、しつかり結束して、行けるだけ行つて見るのも可からう」といはれたから、音高等は、非常に喜んで、その覺悟は、いよく堅く、なつたものである。

静岡から、濱松へ、岡崎、豊橋を経て、名古屋へ出る迄の間、星の一行は、到る處、さかんな歓迎をうけた。

名古屋にも、陰謀を企て、居る、一派があり、星は、その連中に逢つて、いろ／＼相談に、與つて居る。

岡田利勝、祖父江道雄、大島宇吉、澁谷良平、久野常太郎、塚原九輪吉、大島渚等の人々が、その一派であつた。

初めは、余り重きを置かなかつた、新聞の株金も、存外に、よく集まつて、遊説の結果は、頗る良かった。

何よりも、星のためになつたのは、同志の多く出來た事である。そのうちでも、岳南自由黨の鈴木派は、殊に、星

を信頼して、運動費の一部は、星の手からも、支出されて居た位で、この事件と、星の關係は、かなり深いものがあつた。

星の家は、京橋區日吉町に在つた。今の博品館の裏通りで、藝妓屋町に在つたのだから、すこぶる妙だ。すぐ前の

家は、寺島家のやうに、覺て居る。

「先生」

「何だ」

「静岡の鈴木先生が、見えました」

「鈴木音高か」

「ハイ」

「一人で来たか」

「イエ、湊さんも、御一しよであります。それから、小勝さんも居りました」

「うむ、左様か」

少し考へて居たが、

「可矣。此處へ通せ」

「ハイ」

執次の書生は、玄關の方へ行く。

「やア、しばらくでした」

といつて、鈴木はすツとはいつた。肩に波うつ、長い髪が、前へばらりと下るのを、両手で掻き上げて、軽く會釋した。

星は、椅子にかけた儘、ニヤリと笑つて、

「どうした」

と、いひながら、湊や小勝の、顔を見た。

それから、碎けた話になつて、しばらく、談笑して居たが、鈴木は、ぐつと、椅子を寄せて、聲をひそめた。

「かねての計畫が、遅々として運ばないので、實に弱つてしまつたのですが、御名案は、ありませぬか」

「君等は、名と實を、一時に擱まう、とするから、不可よ。どうせ、君等の考へて居る事は、名を捨て、かからねば駄目だ」

「その點については、相當の覺悟も、持つて居るのですが、何をするにも、第一に、金を要するので、實に困るので

す」
「充分に、金を握つてから、計畫を進めやう、とするから、不可のだ。何でも構はぬから、手ツ取り、早くやつてしま

うに限る。さうして、進んでゆくうちには、金などは、どうにでもなる」

「それが、先生、ナカ／＼左様いかなでの、困つて居るのです」
「名古屋の連中も、そんな事を、いふて居たが、我輩は、それについても、よく話して來た。金をつくらう、とする

なら、方法は、いくらでもあるのだが、名に囚はれて居るから、思ふやうに、出來ないのだ。何でも構はぬ、とな

つたら、金は出來やう」
「左様ですな」

この時に、湊が、口を入れた。
「僕は、先生と、同じ意見なのですが、同志のうちに、種々の異論があつて、どうしても纏まらないので、鈴木も、

困つて居るのです」
「斷じて行へば、鬼神もこれを避く、といふてある通り、少し位の無理はやらねば、かういふ計畫は、決して遂げら

れるものではない」
星の口氣から察すると、この事件に、深い關係があるらしくも、思はれる。

岳南の連中は、金策についての議論が、二派に分れて居るので、頗る困つて居たのだ。然るに、星の意見は、目的

のために、手段を擇ぶな、といふのであつたから、元來が、變則手段を用ひても、金をつくらう、といふて居た、湊

は、非常に心強くなつて、鈴木を顔を見ながら、しきりに、自説を、唱へはじめた。
「もう、宜しいぢやないか、こゝで、左様した事を、いふのは、先生へ、迷惑をかけるやうなものだから、その議論

は打切つて、各自の事は、各自で、きめる事にしよう」

鈴木は、かういつて、湊を抑へた。

時に、星は、思ひ出したやうにして、

「君等は、何時歸るのか」

「明日にも歸らう、と思つて居ます」

「それなら、頼みたい事がある」

「何ですか」

「實は、人間を一人、頼み度いのだ」

「どういふ、人物ですか」

「宇都宮の者で、宮本鏡太郎といふのだが、今は、守屋雄夫と偽稱して、我輩の家に、匿まつてあるのだ」

「ははア、匿まつてある、といふのは、どういふ次第です」

「官吏侮辱の次席裁判をうけて、こちらへ、遁れて來たのを、匿まつて置いたが、どうも、危ないから、静岡の方へ

連れて行つて、貰ひ度いのだ」

「刑は、どの位、受けて居るのですか」

「六ヶ月だ」

「その位の刑期なら、素直に服罪して、刑をすませた方が、よいやうに思はれるが、隠れて居なければならぬ、とい

ふ事情でもあるのですか」

「本人の意見では、そんな事で、半年も、獄に繋がれるのは莫迦らしいから、隠れて居て、何か大きい事を、やり度

い、といふのだ」

「それは愉快な、人物らしいですな」

「人間は、ナカ／＼しつかりして居て、確な奴だ」

「先生が、諷しても服従せぬ、といふのですか」

「何と、いふても肯かぬ」

「剛情な男と、見えますな」

「うむ、剛情な事は、日本一だ、ハツハ、、、」

「先生が、剛情だといふ位では、よほど剛情に違ひない」

「オイ、小勝ッ」

「ハイ」

「宮本を、呼んで来てくれ」

「ハイ」

小勝は、奥へはいつたか、と思ふたら、すぐ出た。その跡から、尾いて来たのは、背のひよろりとした色の白い、口の、大きい男で、眼の光りは、鋭い方であつた。

「やア……」

と、いつて、星と鈴木の間、腰を下した。

「これが、鈴木音高だ」

「はア」

「そちらが、湊省太郎だ」

「はア」

「今話した、守屋といふのだ。何分頼む」

「承知しました」

「それから、君等に、注意して置くが、その筋の眼は、君等の一舉一動に、注がれて居るから、大に氣を付ないと、

いかんぞ」

「いくら眼を、付けられて居ても、守屋君を、先生から託される間は、大丈夫でせう、ハツハ、、、」

「こりやア、一本まるつた」

その晩の事は、それだけであつたが、翌日は、鈴木一人で、星を訪ねた。いろ／＼の打合せが、あつてから、

「これは少いが、守屋の世話料だ」

いくら、はいつて居るか、それは判らないが、金の包みを出されたので、鈴木は、手を振りながら、

「それは、いけません。一人位のもを引受けた、といつて、いくらかゝるのですか、こちらで、何とかして置きますから、これは、辭退いたします」

「イヤ、左様いはずに、取つて置いてくれ、守屋の身に使はずとも、何にでも使へる、調法な物だから、受取つて置くがよい」

「さうですか、それでは頂戴して、ゆきませう」

「昨晚の話では、今日、歸るやうにいつて居たが、どうなつた」

「湊と守屋を、さきに歸して、我輩は、もう二三日は居ります」

「左様か」

「事に依ると、高崎まで、行つて來ます」

「うむ、そりや、是非、行つて來るがよい」

「高崎の事は、先生も御承知ですか」

上州高崎には、長阪八郎と、宮部襄の兩人が控えて、上毛自由黨の牛耳を、執つて居た。國會請願運動以來のひとしては、木呂子退蔵も居るが、その頃には、長崎と宮部で、何事も取仕切つて、やつて居たのだ。

長阪は、有徳の先輩として、同志の間に、すこぶる重きをなして居たが、才幹においては、宮部が、第一人者であつた。

昔から、上州は、博徒の勢力ある處で、大前田と、相の川が、最も勢力を張り、それに比ぶれば、極く小さいものであつたが、精悍無比の、國定忠次も出た。明治十七年の頃には、一の宮に、山田丈之助が、素晴らしい勢ひで、羽翼を張つて居た。

宮部は、かういふ連中を扱はせると、實に上手なものであつた。山田の如きは、宮部を信ずること、神の如く、何でも、そのいふ所に従つて、火の中へでも、飛び込む、といふほどの關係を、持つて居た。

山田の乾兒で、神宮茂十郎と、町田鶴吉の二人が、探偵の藤田丈吉を斬つて、その家を焼いたのは、その頃の事であつた。

これが原因となつて、山田と警察側の、衝突を引起し、遂には山田が、妙義山下の陣馬ヶ原へ、約三千の乾兒を集めて、甘樂郡の生産會社を襲ひ、岡部爲作の家を、焼き拂つて、大い騒ぎのあつたのも、その後、間もなく起つた出來事である。

宮部は、それ等の事件にも、多少の關係を、持つて居て、巧に彼等を操つて居たのであるが、例の秩父暴動も、宮部がその奥に、かくれて居たのだ。

自由黨本部の、幹事をして居たから、高崎の方には、多く居らず、東京に出ても、月に二三回は、往復して、高崎との聯絡は、取つて居たが、その留守師團長の格で、高崎を守つて居たのが、長阪であつた。

東京は、警視廳が厳しく、秘密の集會を催すにしても、萬事に、都合が良くないので、場所を高崎に運び、一切の打合せを、爲る事になつた。

星と大井は、兩雄を並立たずの諺通り、自然に反目して、何といふことなく、折合が悪かつたけれど、さすがに本人同志は、深く慎んで、表面は、美しくして居た。

殊に、かうした事件については、双方に諒解があつて、秘密の相談には、興つて居た。星は、宮部から聞いて、高崎の會合は、疾くに知つて居たから、鈴木に對しても、高崎行きを、促すほどであつた。

「各地方ともに、黨員の氣が、乗つて來たやうだから、この機會を逃さぬやうにして、うまくやらなければ、いかにせ」

「そりやア、心得て居ります」

「各地との聯絡は、宮部に頼んで置くが良い」

「我輩も、その覺悟です」

「君の方は、殊に名古屋の連中と、よく聯絡を通じる、やうにして置かぬと、失敗するぞ」

「その點も、充分に注意して居ます」

「兎に角、名を捨てゝかゝれ、狂と呼ばれ、賊と罵らるゝも、我において何かあらんや、といふ、意氣を以て進めば、天下の事、手に唾して成るものだ」

「大に決心してみますから、御心配下さるな」

これで、話はすんだ。鈴木は辭して歸り、翌日は、高崎へ出かけた。

高崎には、仙波兵庫、富松正安、山川善太郎、甲田良造、伊賀我何人、小勝俊吉も出會して、土地のものとしては長阪、宮部、それから、深井卓爾、新井愧三郎、木呂子退藏等の人も、出席した。

この時の相談は、各地ともに、能く聯絡を取つて、緩急、相應する事とし、飽までも政府側、破壊の目的を達する事、この手段や、方法の如きは、各地の同志がそれ／＼に決定して、最善の道を進む、といふのであつた。

東京から歸りがけに、中野は、静岡へ、足を停めて、しばらく遊んで居た。

そのうちに、鈴木も、湊も、歸つて来て、一二度は集まつたが、これといふ事も決めず、相變らず、事件の進行は以前の通り、遅々として、運びが付かないので、同志の間には、いくらか倦怠の氣も、出て来た。

かういふ事情に、なつて来たので、各自の考へから、勝手な事を始めるやうになつて、今から視ると、莫迦らしくもあるが、また、面白くもある事件が、少からずあつた。そのうちでも、殊に興味のあつた企てが、徳川慶喜を擁立して、一と旗擧げやう、とした事である。

これは、中野の發案で、僅に五六人の間に、行はれた事ではあるが、中野の意見は、かういふのであつた。

『幕府が倒れて、慶喜公は、静岡へ退隱せられる、と同時に、幕臣の多數が、公と共に、引上げて来て、開墾事業に従つて居るから、これ等の人々を、うまく煽りつけて、事を起したら、存外に成功するかも知れない。それについては、慶喜公を引付けて、これを説きつけるのが、第一である。けれども、容易に接近することが出来ないから、公の外出を狙つて、無理に連れ出し、否認はさず、擔ぎ上げてしまへば、幕臣は、止むを得ず、尾いて来るに、違ひない。幕府の復興など、いふことは、いかにも莫迦らしく聞えるが、幕臣の耳には、必ず良く響いて、多くのうちには、眞面目になつて、應ずるものもあるだらうから、是非、これを實行して見たい』

當時の静岡邊では、ちよつと迎へられさうな説で、これには、湊も賛成して、直に實行しよう、となつた。

『慶喜公は、魚釣が好きで、毎日の如く、阿部川へ行かれるから、その際を見て、連れ出す事にしたら、どうだ』

これは、湊の説であつた。外のものも、それは可からう、と同意して、湊は勿論、新に加盟した守屋も、例の辰三も、ひとしく實行委員たる事を、引受けた。

湊が、どうして、かういふ事を、いひ出したか、といふに、魚釣りが好きなために、阿部川へ、出かける所から、慶喜の魚釣りに、来る事も、よく知つて居たのである。

音高は、訴訟事件のため、名古屋へ出かけて、四五日、不在であつた。その留守中に、企てられたのが、この事である。

星のために匿まはれて、今は、静岡へ送られ、この連中に、庇護されて居る、宮本鏡太郎は、相變らず、守屋雄夫と稱して居た。

朝はやく、音高の家を出て、釣道具の、都合をつけて、阿部川へ、やつて来た。覆面して居るので、その何人であるかは、判らない。魚釣の人は、笠を冠つたり、覆面したりするので、阿部川の頭には、さうした風體の人が、何時も、釣竿を擔いで、ぶら／＼して居るから、誰一人として、怪しむものもなかつた。

守屋は、だん／＼川上の方へ、深入りしてゆくが、これと思はれる人は、さらに見當らなかつた。

魚を釣るのが目的でなく、つまり慶喜公を、釣に來たのであるから、それらしい、人物を求めれば、よいのだ。積傳ひに、奥深く、やつて來ると、遙な向ふに、これも覆面した、魚釣りが一人、大きい岩に、腰を下して、餘念もなく、綸を垂れて居る。

守屋は、やゝ足を、はやめて、その人の傍へ、やつて来た。

『どうですか』

『……………』

『この邊は、よく食ひますかね』

『……』
啞か、聲か、守屋の、いふことには答へず、ちよつと、振返つたばかりで、すまして居る。

二九

太公望は、直な針を垂れて、人を、釣りに出た、と、聞いて居るが、守屋の目的も、これと同じやうに、魚を釣るのでなく、人を釣りに來たのであるから、綸は流れに、投げ込んだ儘、傍らの人を、ちつと、見つめて居る。

二三度は、聲をかけて見だが、何の答へもなく、すまして居られたので、話を仕かける隙もなく、變な奴だ、とは思つても、釣りをする人に、一番の禁物は、高聲で、話を爲る事で、ある位の事は、守屋も知つゝあるから、強ひて答へを、迫る氣にも、なれなかつた。

しばらくすると、その人は、すいと立上つて、竿に絲を巻きながら、なほ川上の方へ、のそりくと、歩き出した。守屋は、ずつと、その容子を見て、いよ／＼變に思ひながらも、それが、慶喜公らしいので、すぐに跡から、尾いてゆく。

其人は、しづかに綸を垂れて、また釣にかゝる。守屋も、その通りにして、容子を、窺つて居た。守屋は、氣短かな男で、魚釣と、いつたやうな、氣樂な事は、大嫌ひな質であつた。けれども、目的は、他にあるのだから、堪らへ、堪らへて居たが、もう莫迦らしく、なつて來た。

『オイ君ッ』
『……』
『少しも釣れないぢや、ないか。よく君は、こんな所に、辛棒して居るな』

『……』
『釣といふものは、そんなに、面白いものかな』

『……』
『君は、耳が悪いのか』

『……』
『オイ、何とか、いはないか』

『……』
『莫迦ッ』

『……』
『何をいはれても、貴様には判らないのか』

『……』
何といふても、黙つて居るので、さては、其人に違ひない、と思ひ詰めて、守屋は、ずつと、傍へ寄つて

『オイ』
肩へ手をかけて、ゆすぶつた。

『ハツハ、、、』
肩へかけた、手を拂ひながら、其人は、高笑ひをした。そこで、守屋は、ぐつと疝癩が、こみ上げて來た。

『何が、可笑しい』
『可笑しいぢや、ないか』

『どうして、可笑しい』

「君は、魚を釣りに来たのか、それともに、人を釣りに来たのか、どちらなのか、判らないぢやないか」
さすがに、守屋も、ぎよつとした。

「君は、何者だ」

「僕の名か」

「さうだ」

「僕は、僕だ」

「その僕といふのは、名前ぢやなからう」

「うむ」

「名前を、訊いてゐるのだ」

「僕の名前を訊いて、何にするのか」

「まあ、名をいへ」

「僕の名を、いつた所で、何の禁厭にも、なるまい」

「とに角、名をいへッ」

「よし、それぢや、名をいほう」

「何といふのだ」

「辰三だ」

「えい」

其人は、覆面を脱つて、守屋の顔を見た。意外にも、それは、鈴木辰三であつた。

「何だ、君であつたか」

「ハッハ、、、」

長い馴染なら、聲を聞いた丈で、すぐにも判らうし、また、其容子を見ても、當りは、つくのであらうが、何しろ、静岡へ来て、まだ僅少にしか、ならぬので、守屋には、辰三の聲を、聞き分ける丈に、辰三を、知つて居なかつた。

「莫迦らしいぢやないか、君なら君で、はやくさういへばよいのに、變な態度をするから、すつかり釣り込まれて、しまつた」

「いくら、顔をかくして居ても、慶喜公が、どうか、といふこと位、見分けが、つきさうな、ものぢや、ないか」

「慶喜公には、一度も逢つたことはないし、君の聲を、聞き分けるほど、未だ君とも、親しみがなかつたので、ッ引つけられて、しまつたのだ」

「今日は、慶喜公も、来ないやうだから、とに角、引き上げやう」

「左様しようか」

兩人は、ブラ／＼歩き出した。辰三は、急に足を停めて、

「守屋君」

「うむ」

「君は、湊から、何か聞かなかつたか」

「どういふ事を……」

「何か、秘密の話は、なかつたか」

「事件の外には、何も聞かぬ」

「矢張り事件に、關係した事だが、運動費の事に、ついてだ」

「イヤ、何も聞かない」
「左様か」

「どういふ事だね」

「湊から、聞かなけりや、僕から、いふことは出来ぬ」

「誰から聞くのも、同じぢやないか」

「それでも、僕が話しては悪いのだ」

「それぢや、強ひて聞くまい」

石ばかりの磧を、歩き難さうにして、また歩きはじめた。

守屋は、心のうちに變だ、と思つた。湊も、辰三も、ひとしく同志である以上、どちらが、話してもよからうに、折角、いひかけたことを打ち切り、而かも、其れが、事件に關係のある、秘密だといふのだから、深い事情のある事に違ひない、殊に聞通し得ないのは、運動費についての事だ、といふたが、どうも、湊の態度に、少し變な所がある、と、思つて居たのは、必ずしも、自分の邪推ではなかつた。何か、秘密に、行つて居る事が、あるのだらう。いづれ湊から話は、あるに違ひないから、どういふ事を、行つて居るのか、と考へながら、辰三の跡から、尾いてゆくうちに、磧を出外れて、町の方へ、かゝつた。

「オイ、鈴木君ぢやないか」

と、呼び留るものがあつた。

兩人は、振り返つて見ると、それは、湊であつたから、

「やア、湊君か」

「オイ、守屋君も一しよか」

「どこへ、行くのか」

「音高君が、名古屋から、歸つて来た、といふ報知が、あつたので、是れから行く所だ」

「それぢや、一しよに行かう」

「うむ。併し、兩人連れで、釣りに行くとは、ナカ／＼呑氣な所があるな」

「あまり、呑氣でもないが、別に爲る事もないから、出かけて見たのだ」

「守屋君、君も、釣りを爲るのか」

「イヤ、我輩は、大嫌ひなんだ」

「大嫌ひなものが、釣りに行く、とは變ぢやないか」

「それでも、出かけたのだ」

「何か、釣れたか」

「大きい鯨を、釣り損じて、雑魚も、取れなかつたよ、アツハ、、、」

湊は、少し考へたが、

「ア、さうか、大きい鯨を、釣りに行つたのか」

「うむ」

三〇

大きい鯨といふのは、慶喜公の事に違ひない、と思つたから、湊はすぐ合樋をうつて、話しはじめた。
「失敗にも種々あるが、跡へ災の残る、失敗ぢや、あるまいね」
「そりや、大丈夫だ」

『どうして、釣り損じたのか』

『代へ玉に、引つかゝたのだ』

『えッ、代へ玉とは……』

『鈴木辰三といふ、代へ玉だ』

『何だか、話が解らなく、なつてしまつたが、どういふ筋道か、よく解るやうに、話してくれないか』

『實は、我輩が、鈴木君を間違へて、鯨のつもりで、遂ひ廻したのさ』

『何だ、つまらない』

『鈴木君が、妙に逃げ廻るので、確に、それと思つて、遂ひ廻して見たら、つまり、雑魚の辰三と、いつた譯だ、ハッハ、ハ、ハ、ハ、』

『雑魚か、ハッハ、ハ、ハ、ハ、』

『湊と、守屋が、しきりに笑ふので、辰三は、苦い顔をしながら、』

『雑魚とは、酷いぢやないか』

『鯨と比べたら、まア雑魚だらう』

『引きづられた、怨みを晴らさう、と思つて、ひどく當つて來るな』

『左様いふ次第ではないが、先づ雑魚で可からう』

『湊は、兩人の中へ、割つてはいつた。』

『オイ、大概にしたらどうだ』

『喧嘩をして居るぢやない』

『喧嘩でないにしても、あまりしつこひと、喧嘩の花が咲くよ』

『それぢや、止さう』

『ぐづぐづ、いつて居るうちに、江川町へ、來てしまつた』

『左様だな』

名古屋から歸る、と、音高は、すぐに、湊へ知らせてやつた。心待ちに、待つて居る所へ、湊ばかりでなく、辰三

と守屋も、一しよに來たので、音高は、意外に思つた。

併し、兩人を避けて、秘密に話す、といふほどの事もないので、これらの四人は、打解けて話をはじめた。

『名古屋の方は、どんな状況で、あつたか』

『此方と、大した相違はない。つまり、人は集まつたが、金が無いので、何も出来ない、と言ふのだ』

『矢張り、左様かね』

『星君が、行つた時に、星から、話があつたとか、いふので、塚原と久野が、貨幣偽造で、苦心最中だ、と聞いたが、』

巧くゆけば、よいが……』

『ははア、貨幣偽造は、面白いな』

『塚原が、あの通り、器用な男であるから、巧くゆくかも、知れない』

『もう、始めたのか』

『話の容子では、塚原が、毛筆で、見本をつくつた、さうだが、これは實に見事な出来で、實物と、寸分異はないけれど、一人で書いて居たのでは、高が知れて居るので、とても、そんな事では、しようがないから、矢張り印刷し』

よう、となつて、今では、久野の家で、しきりに研究しながら、やつて居るさうだ』

『塚原なら、巧く仕上げに、違ひない』

『時に、此方の計畫は、君の出でから後、別に變つた事はないが、慶喜公を利用しよう、といふ議が起つて、すでに』

手を着けたものもあるが、うまく行かなかつたやうだ」

「何ッ、慶喜公を利用する、といふのは、そりや、どういふ事か」

この事は、音高に、關係なく始めたので、今、話の小口を聞いて、音高は、不審に思つたのだ。そこで、淡から、詳しい話をすると、音高は、呆れるほど、驚いた。

「莫迦な真似も、大概にしてくれぬ、と、それが爲に、萬事が破れるのだ」

音高の語氣が、存外に鋭かつたので、三人は、顔を見合せた。

「全體、誰が、そんな、莫迦な事を考へたのか、また、君等が、それに同意した、といふのも、怪しからんぢや、ないか」

「まア、左様、怒らずに、事情を、一と通り聞いてくれたまへ。この事は、中野君の、考へから始まつて、僕が賛成

したので、辰三君や守屋に、何の過失も、ないのだから、君が反對なら、反對でもいゝから、相談の上で、中止す

るのは、何でもない事だ、初めから、名案でない、といふのも、知つてゐるが、引つかゝつて來たら、ちよつと面

白い事だ、とも思つたので、兩君に勧めても見たのだが、悪ければ止めるまでの事さ」

「君の考へは、事件を弄ぶのだから、不可よ、今時になつて、徳川慶喜公でも、なからう」

「この話は、これで打切つてしまはう」

淡が、軽く受流したから、音高も、遂に黙まつた。

「中野君は、君と入れ違ひに、濱松へ歸つたが、君は、濱松へ、寄つて來なかつたのか」

「山田を、尋ねて來た」

「それぢやア、逢つて來たのだね」

「うむ」

「金の相談は、どうなつたかしら……」

「彼處でも、都合が悪いやうであつた」

「名古屋の方は……」

「紙幣の偽造が巧くゆけば、此方へも、廻して來る事に、なつて居る」

「君の見込みでは、どう思ふ」

「先づ至難しからうな」

「ふふーむ、して見ると、それも駄目だね」

「うむ」

「弱つたな」

「星君から、貰つて來たのは、疾くに使つてしまつたし、我輩の方も、昨今は、事件が少なくて、収入も多くないから、

實に困つてしまつた」

「もう、非常手段の外は、なからう」

「……」

「こんな事で、ぐづ／＼して居るうちには、何も、彼も駄目になつてしまふから、いつそ、やることにしたら、どう

だ」

「今まで、黙つて聞いてゐた、守屋は、急に膝を進めた。

「非常手段と、いふのは、どういふ事か」

「何でも、構はぬから、ヤツつけやう、と、いふのだ」

「目的のためには、手段を厭はず、進まう、と、いふのだな」

「左うさ」

「ヤツつけたら、いゝぢやないか」

辰三も、これには同意らしく、

「どうせ、生命を捨てる時、きめた以上、別に考へる必要も、ないだらう」

「オイ、鈴木君、君の考へは……」

流石に、音高は、考へて居て、容易に答へなかつた。湊は、少し焦れ込んで、

「星君の、いふた通り、名を捨てゝかゝる外は、あるまい」

と、三人が、ひとしく追つて、音高の決心を促した。

「可突、やらう」

相談は、これで決した。この連中の非常手段は、これから、進められたのである。

いかに、國事のためとは、いひながら、苟くも志士を以し任ずるものが、かういふ、手段に出た、といふのは、ま

ことに惜むべき事ではあるが、當時の事態としては、止むを得なかつたかも知れない。

維新の志士が、或は火付けをやつたり、或は斬取りも、やつたりした、それと、何の別はなく、獨り、この連中の

事ばかり、咎める事は出来ぬ。

大阪事件にも、名古屋事件にも、また加波山事件にも、みな非常手段は、行はれて居たのである。

赤井の刑死まで

一

石川島の獄を破つて、行方を眩ました、赤井が、山縣縣南都留郡の寶村に、かくれて居たことは、前回にも述べてあるが、意外の事から、足が付いて、危くなつたのを悟り、逸早くも、逃げ出して、更に行方をくらましたのは、實に敏捷い事であつた。その赤井が捕縛されて、死刑になるまでの顛末を、一と通り述べることにしやう。

その頃には、地方漫遊と、いふことが、非常に流行つたもので、政黨に、關係して居る、齡の壯い人達は、盛んに試みた。一には、知友の多きを誇り、また、一つには見聞の廣くなるのを樂みにして、しきりに地方へ、出かけたものだ。

昔の學者や文人が、或は名山大川を跋渉して、靜かに想を練り、或は、大家に逢ひ、同輩と語り、而して、文字の外に、何物かを得やう、として、苦心した事は、種々の書物にもあるが、それと同じやうに、地方の有志家を、次ぎから次ぎへ、訪ねてゆくのが、漫遊生の目的であつた。

併し、改進黨の方では、さうした事は、絶えて無く、獨り自由黨の方にばかり、あつたのは、どういふ理由であつたらうか。

大隈参議が、諭旨免官になつて、それと、同時に、辭職した連中が、その中堅となつて、組織されたものが、當時の改進黨なのであるから、どうしても、役人肌の黨員が多く、今ていふ、官僚臭い所があつて、自由黨員の如き、有志家氣質のものが甚だ少なかつた。

世間から、名づけられた壯士と、いふやうなものは、薬にしたくも無かつたので、従つて、漫遊書生などは、只の一人も、出なかつたのである。

それであるから、漫遊書生を、多く有する、地方の自由黨員は、ずる、ずる、苦むだものだ。殊に、東海道筋の黨員は漫遊書生の送迎には、少からぬ失費もあつて、これがために、貧乏したるものも、多くあつたのである。

或町へ着いて、その土地の黨員を訪ねると、一と晩泊めて、翌朝の出立には、多少の小使錢を持たせて、次ぎの町の同志へ、紹介状までも附けてやる。

若し、相當な人物だ、と視れば、二日や三日、足を留めさせて、優待する事もあるから、それについての入費は、可なり多く要かつて、何時も苦しむものは、地方の黨員であつた。

その代り、漫遊書生を、よく取扱つてやれば、何かの時に、役に立つ事もあり、また、一般に名を知られるには、どうしても、これを辛抱する必要があるであつたのだ。

博徒の親分が、旅人を扱ふのと、よく似て居た。この附合ひをせぬものは、大きい親分に、なれないのと、同じやうに、地方の黨員として、重きをなす事を、得なかつたものである。

静岡へ來れば、先づ鈴木を訪ねて、その世話になるのが、漫遊書生の例であつた。それであるから、江川町の事務所には、何時も、二人や三人の泊りがあつて、別に豊島屋といふ、宿屋へ特約して、漫遊書生を、鞭待して居たら、鈴木の評判は、非常に良かつた。

洗ひ晒しの木綿衣物に、太いヘコ帯を締めて、ズツクのカバンを、肩から提げた、書生が、鈴木に立つて、しきりに案内を、求めるのであつた。

「頼む、たのまう」

「どれ」

「玄關番の書生が、出て來て、

「ヤツ、何か御用ですか」

「鈴木先生に、お目にかゝり度い」

「先生は、鞠子の方へ、訴訟用出張中ですから、只今は居られません」

「いづれ、歸られるてせう」

「はア」

「それぢや、歸られるまで失敬しやう」

一一

玄關の敷臺へ、ズツクのカバンを、どざりと下ろし、草鞋を穿いた足を、投げ出して、腰を落ちつけたので、執次の書生は、少し癢に觸つた。

「オイ、君ツ」

「何だ」

「其處に居ては、困る」

「先生の歸りを、待つのだ」

『お歸りの時間は、判然分らないのだから、待うけるのなら、外の所で待うけて居るやうにしてくれたまへ』

『左様はゆかぬ』

『何故です』

『外に知つて居るものは、ないから、どうしても、此處で、待つ外はないのだ』

『それでも、玄關は困る』

『外に、待うける所がなければ、仕やうがないだらう』

『君の方の都合ばかりいはないで、此方の迷惑も、考へてくれたまへ』

『それほど迷惑なら、待ちうける所を、教へてくれ、さうでなければ、此處に居る外はないのだ』

『併し、君は……』

『黙れツ』

『……』

『天下の、志士を以て任ずる、鈴木君の書生とも、あるべきものが、人を遇するの道を、知らないのか』

『だつて、君は……』

『未だ、グヅ／＼吐かすか』

聲は大きいし、眼玉は、イヤに光つて居る。何となく、強さうな奴だから、執次の書生は、グーの音も出さず、面を膨らせながら、奥へ引込んでしまつた。

その跡で、漫遊書生は、例のカバンを枕に、敷臺へ、ゴロリと横になつて、旅の疲れか、高軒で、眠りに入る。

しばらくすると、音高は、歸つて來た。

『お歸り……』

と、傳夫の呼び聲は、書生部屋へも、強く響いた。バタ／＼音をさせながら、飛び出して來た、書生は、この狀を顧みて、ちよいと驚いたが、今更、致し方がなく、平蜘蛛のやうになつて、頭を下げてゐる。

鈴木君の歸りを、知つて居るのか、それとも知らずに、眠つて居るのか、漫遊書生は、敷臺一ぱいに、足を延ばして寝てゐるのであつた。

鈴木は、車から降りて、しづかに、その上を跨いで、玄關へ上つた。それから坐敷へ、はいつたが、迎へる妻もな

く、獨身者は、何となく寂しいものだ。

『お歸り……』

と、いつて、書生は揃つて、鈴木の前へ、手をついた。

『オイ』

『はツ』

『彼れは、何だ』

『先生に、御面會いたしたい、といふて來た、人です』

『何故、敷臺へ寝かして置く』

『寝かして置いたのでは、ないのですが、勝手に、待つて居る、といつて、勝手に、寝て居たのであります』

『待たせて、置く可きものなら、座敷へ通すが、よい。待たせて悪いものなら、追ひ拂つてしまふが、よいではないか』

『はツ……』

『そんなことで、玄關の番が、出來るか』

『はツ……』

「名は、何と、いふのか」
「まだ、聞いて居りません」
「莫迦ッ、名を聞かぬ、といふのは、どういふ譯だ」
書生は、叱りつけられても、返辭のしやうがなく、そつと立上つて、玄關へ、來て見ると、列の怪物は、矢ッ張り寝て居る。

三二

「オイ、君ッ」

「……」

「オイ、君ッ」

「……」

「ちよいと、起きてくれたまへ。オイ、君ッ、君ッ……」

「いくら、聲をかけても、グー／＼寝て居るから、書生は、敷臺へ下りて、

「オイ、君ッ」

肩へ手をかけて、ひどく、揺つた。

「五月蠅ッ」

と、いつて、その手を拂ひ退けた。

その見幕に、書生は驚いて、手も出せずに、見て居るのみであつた。

カバンを枕にして、仰向けに寝た儘、大きな欠伸を、二つ三つ續けた。

「今歸つて來たのは、先生か」

「左様です」

「僕の足を、跨いで行つたが、立派な風采だ」

「へー」

何といふ、横着さだ。眠つて居たのではなく、狸を、極め込んで、居たらしい。

「君の姓名は、何といふのですか」

「僕か……」

といつて、やうやく、起き上つた。

「君の姓名は……」

「僕は、山田憲治と、いふものだ」

「縣地はどこですか」

「茨城縣だ」

「どういふ、御用ですか」

「先生に逢ひたく、訪ねて來た、といつて、くれたまへ」

「先生に逢ひたい、といふのはどういふ用件ですか」

「君は、實に解らぬ男だな、先生に逢ひたい、といふたら、それが、用件ぢやないか」

「ははア」

「はやく左様、いつて見たまへ。此方へ通せ、といふのは、極まつて居る」

「なる程……」

「何が、なる程だ。はやく取次がぬと、また叱られるぞ」

取次の書生は面喰らつて、奥へはいった。

その間に、山田は草蛙の結び目を、解いて待つ。今度は、他の書生が、出て来た。

「どうか、こちらへ、御通り下さい」

「やア、失敬する」

案内されて、座敷へ通つた。

鈴木は、山田の様子を、ぢつと見ながら、

「我輩は、鈴木です」

「山田憲治と、いふものですが、宜しく御願ひします」

「書生が、何か失禮をした、といふ事だが、田舎者だから、赦してくれたまへ」

「僕の方が失敬したのです」

「茨城縣は何の邊か」

「眞壁郡です」

「下館や下妻には、多少知つたものもあるが、どの邊かね」

「下館から、奥へはいつた、田舎です」

「那の邊には、同志のものも、多く居るが、君は、矢張り、自由黨員か」

「イヤ、まだ入黨は、して居ませんが、はやくから、自由黨のためには、奔走して居ました」

「そりやア、特志とでも、いふか」

「まあ左様ですな」

「下館には、間宮太平、大内達三郎、藤田善次郎、玉水嘉一、富松正安等が居る。とに角、茨城縣は、有志家の多い所て、青柳球平、濱名信平、關信之助、飯村丈三郎、森隆介、仙波兵庫、柴孫二郎、長塚源次郎、片野文助、小久保喜七、奥村龜三郎、淵岡駒吉等の連中が、ずらりと、揃つて居るからな」

四

山田を、茨城縣人だ、と聞いて、鈴木は、同志の名を列べながら、山田の様子を、ぢつと視て居る。

それに、山田が、合槌を打つて、同じやうに、人の名を擧げるか、と思つたら、意外にも、山田は顧みて、他の事を語る、といつた調子で、鈴木の話に、觸れないやうに、上手に避けてゆくのを、鈴木は、疾くも視て取つた。

どうせ、その頃の事で、かうした、變な奴は、時々、やつて来るから、大して氣にもしないが、併し、油斷のならぬ奴だ、とは思つた。

「其處で、君の、訪ねて来た、用件は、何ういふ事か、聞いて見たい」

「イヤ、別の事でもないが、しばらくの間、お世話になりたい、と思ふが、どうでせう」

「當分は、足を停めるつもりで、来たのかね」

「左様です」

「我輩の家は、この通り手狭でもあるし、それに、妻が居らぬから、充分の世話も、出来んので君を置くことは、御免を蒙り度いのだ」

「未だ、妻君を、持つて居られぬ、といふことも、かねて聞いて居つたのですから、その御斟酌では、却て恐れ入る。たゞ書生部屋の片隅に、寢て居ることだけを、許して下さいれば、それで可いのです」

「併し、置く方の身にすると、左様もならぬから、困る」